

鳴門秘帖

船路の巻

吉川英治

青空文庫

心の地震

鬱然うつぜんとした大樹はあるが、渭山いやまはあまり高くない。山というよりは丘である。

西の丸、本丸、楼台ろうだい、多門など——徳島城の白い外壁は、その鬱蒼うつそうによって、工芸的な荘重と歴史的な錆さびをのぞませ、東南ひろく紀淡きたんの海をへいげいしていた。

城下をめぐる幾筋もの川は、自然の外濠そとほりや内濠のかたちをなし、まず平城ひらじろとしては申し分のない地相、阿波二十五万石の中府としても、決して、他国に遜色そんしよくのない城廓。

その三層楼のやぐら柱にもたれて、さつきから、四方を俯瞰ふかんしている人がある。

太守である。阿波守重喜あわのかみしげよしだ。

かれは、そこからかすかにみえる、出来島できしまの一端を見つめた。河にのぞんだ造船場ぞうせんばがある。多くの工人、船大工が、しきりに巨船を作っていた。

すぐ、その眼を、徳島城の脚下にうつした。

そこにも、多くの石工いしくが、外廓そとぐるわの石垣を築いていた。搦手からめての橋梁きょうりょうや、濠さくらを浚うう工事にもかかっている。

石垣の修築は、幕府の干渉がやかましいものだが、阿波守は、わずかな河川の修復を口実にして大胆にこの工を起こした。しかもそれは大がかりな城廓の手入れらしい。

のみや槌の響きは、何か新興の力を思わせる。阿波守の胸には、その音が古き幕府に代るものの足音として衝つてくるのだ。——四顧すれば海や空や本土のあなたにも、皇学新興の力、反徳川思想がみちみちて、ひとたび、この渭之津の城からのろしをあげれば、声に応じて西国の諸大名、京の堂上、それに加担するものなどが、ときの声をあげるだろう。重喜の眸は、そんなことを想像しながら、時の移るのを忘れていた。

「だが？ ……」

ふと、自分で自分に反問する。

「大事——未然に洩れては、すべての崩壊だ。この城、この国、一朝にして、資本も子も失くすことになる」

望楼を歩きながら阿波守、しきりに苦念の様子である。ゆるく、的なく、一步一步と踏む足には力をこめたが、胸底の憂暗、かれの横顔をおそろしく青くみせた。

「堂上方を中心として、竹内式部、山県大弐、そのほか西国の諸侯数家、連判をなし血誓の秘密をむすび、自分はすでにその盟主となっている。今に及んで、卑怯がまし

い、なんの、これほどの大事をあぐるに！」こう、動じやすい意志を叱って、唇をかんだ。「よしや、江戸表で、うすうすぐらいな疑いを持つとも、城壁の改築や、造船の沙汰ほどなら、いくらでも言い解く口実の用意はある」

さらに、強くなれ、強くなれ！ とそこで、徳島城を踏みしめた。

で——、やや明快な面をおもて、サツと海風のくるほうを眺めると、今、淡路の潮崎と岡崎の間を出てゆく十五反帆の船が目につく。

帆じるしをみて、重喜にも、それが商船であることが分った。

月に一度ずつ、大阪表へさして、藍、煙草、製紙などを積んでゆく、四国屋の船である。と思うと、脚を深く入れた、塩積船が出てゆくし、あなたからも岡崎の港へ、飛脚船や納戸方の用船などかなり激しく入ってくる。

その海上往来のさまをみているうちに、阿波守は、またかすかな不安をおぼえだした。

「ム。何ごとも、惧れるものはない。しかし、あぶないのは、領内へまぎれこむ他領者だ——ことに江戸から目的を持って入りこむ奴じや。天堂一角の通知があつたので、取りあえず、この春の道者船はさし止めたが、あのように、頻繁な船入りのあるうちには、どんな者が、どう巧みに入りこまぬ限りもない……」

今まで懸命に、意志を支えていたものが、グラグラと揺れだして、極度に、重喜の壮図をおびやかしてきた。

でなくとも、かれは、ここ数年の間、内面的に、すくなくからぬ細心と辛勞を抱いてきたので、近頃は、かなり強い神経衰弱にかかつていた。

渭之津城を脚下にふみ、広大なる大海の襟度に直面しながら、思いのほか、重喜の心が舞躍してこないのも、かれの眉が、ともすると、針で突かれたようになるのも、そのすり減らされてきた神経のせいだろう。

神経衰弱——源内流でいえば、心病、あるいは心勞症というに違いない。常に不安を感じ、焦躁にかられ疑心にくらまされ、幻覚をえがく。

あくなき色慾にただれ、美食管絃の遊樂に疲れての大名病にもこの症があるが、重喜のはその類とはなはだ異なる心病だ。イヤ、神経衰弱といおう、そのほうが、かれの今の心持にピッタリと合う。

「殿！ 何をしておいでなさいます」

ところへ、竹屋三位卿が上がってきた。

これはまた、いたって、苦勞も憂懼もないふうだ。

三層楼のやぐらの上に、重喜とならんで、かれも姿をたたせると、その憂いなき栄養に肥えた紅顔は魚のごとく澆刺はつらつとし、海を見れば、おのずから禁じ得ぬもののごとく、自作討幕の詩を、いい気もちで微吟びぎんしだした。

「殿もお謡うたいなさらぬか」

海に向つて、討幕の詩を微吟していた有村ありむらは、黙然もくねんとしている重喜へ義務のようにいった。

阿波守は、それを、微笑で聞き流した。しかし、複雑な神経が、さびしい笑みに隠されていることは、もとより三位卿の感じるところでない。

「鳴門舞なるとまひ——しばらく殿の朗々たる謡うたいごえ声も聞きませぬ。詩吟、舞踊なども、たまには浩濶こうかつな気を養つてよろしいものと存じます」

「さよう」

「願わくば、わが盟主、もつと元気にみちていて下さい。大事をあぐる秋ときは、刻々と迫つてきております」

「うム……」

「御当家の城普請しろづしんや造船や、また火薬兵器の御用意などが、着々とすすむにつれて、筑ち後柳川くこやながわの諸藩をはじめ、京都の中心はもとよりのこと、江戸表の大式だいになどもしきりに、ひそかな兵備をいたしておるとか」

「うむ」

「——無論、そうなる場合、御当家の一陣は、この有村が承るものと心得ておりますが……」と三位卿は躬みみずから、二十五万石の城地を賭けて、乾けん坤こん一擲てき天下をとるか否かのやまを張っているような気概でいる。

「何より、士気に関するのは、阿波殿のお体で——よかれ悪しかれ味方の旗色はたいろにすぐ響いてまいりますからな」

「う……む」

「海のごとく寛くひろ、空のごとく明るく」

「心を持ってとか？」

「その通りです」

「分っている。しかし有村殿、家中かちゆうの者一統の生殺をあずかる阿波守じや。要意に要意をいたさねばならぬ。で、自然に、そこもなどにはお分りのない心遣こころづかいがある」

「そう申せばお顔の色がひどく青い——、海の反映か、樹木のせいかと思っておりますが」

「あなたはまことに羨ましい」

「皮肉な仰せ—— 居候はひがみます」

「いや、それではない。すべて公卿殿の立場は気が軽いと申すのじや。事未然に発覚しても、およそ堂上の方々は、謹慎ぐらいなところですよ。で、おのずから討幕などということも、蹴鞠を試みる程度の気もちでやれますが、さて、大名の立場となると、そうはまいらぬ」

「いや、有村じやとて、敗れた後は、決して生きてはおらぬ覚悟」

「そこがまことに羨ましいと思う——この阿波守などは、そうできぬ。なぜかといえば」

「しばらくお待ち下さい」

やや色をなして、三位卿、重喜の前へ健康そうな胸を張った。

「では、阿波殿には、討幕の壮図、やぶれるものとみておられますか」

「勝ちを信じる前に、そこに思いをいたすことは、もとより武門の慣いである」

「なんの！ 今の幕府が——指で突いても仆れるほど、腐敗しきっておりますのに」

「いや、それよりは、こつちの足もとを気をつけておらぬと、事を挙げぬうちに逆捻さかねじを食うであろう。有村殿にも、その辺のお心配りを第一に願いたい」

「それは、ご安堵あんど下さいまし、先頃から、天堂一角の知らせにに応じて、それぞれ船関ふなせき、山関やまげきの手配りなども一段ときびしく固めさせてあります」

「しかし、昨年大阪表おもてで取り逃がした、法月弦之丞という江戸方の者、容易ならぬ決心をもつて、この阿波へ入り込もうとしているというが」

「何をしているのか天堂一角、刺客しかくとなつてかれをつけて行きながら、いまだに刺止しとめることができぬらしい。——それをみても、弦之丞と申すやつは、一癖あると見えまする」
かつて、安治川の下屋敷しもやしきで、月山流がつさんりゅうの薙刀なぎなたをつけ、したたかに弦之丞のために投げつけられたことは、今も三位卿の記憶に残っている筈だが、それはいわない。

そこへ、侍臣のものが、重喜の意向を伺いにきた。

「森啓之助もりけいのすけ様が、つるぎ山から帰られて、何か、御拝顔を得たいと申されておりますが——と。」

「う、今頃うせたか」

すぐに、こう応じたのは、重喜でなく、有村の苦笑だった。

「まいろう」

と阿波守はやぐらを降りて、徳島城の西曲輪にしぐるわへ向った。

ひとりで、その風に吹かれてもしかたがないので、三位卿も重喜の腰について行つた。

小姓にしてはわがまますぎるし、飯粒めしつぶにしては大きすぎるこのつきものを、別に気にかけない重喜も大名だが、その邪魔にならない徳島城もさすがに広い。

「どうであつた？ 剣山の方は」

「は、昨夜御城下へ戻りましたが、夜中やちゆうのことゆえ、御復命さしひかえておりました」

「月々つきつきの目付役、大儀である」

一室の席についた阿波守は、そこへ森啓之助を引いて、山牢の様子を訊きいていた。

そばには竹屋三位卿、恬然てんぜんとして控えている。啓之助の目と有村の目が、重喜をはずして時々妙にからみあつた。

「そちも聞き及んでいる通り、江戸方の者がしきりに当国をうかがっている場合じゃ、剣山の麓ふもとや山関の役人どもにも一倍用意させておかねばならぬぞ」

「山番の末にいたるまで、近頃はみな緊張しきっておりまする」

「ム。では、別に異常もなく警固しておるな」

「ところが、天満同心の俵一八郎が、とつぜん、死亡いたしました」

「や、遂に、病死いたしましたか」

「ならば別段でもござりませぬが、何者かの悪戯あくぎ——おそらく悪戯と察せられます——で、殺害さつがいされたものでござる」

「間者かんじやろう牢の者を殺害した？ 誰が？ 誰がそんな意志をもって悪戯をいたしましたか」

「剣山の御制度をわらい、間者を殺せば祟りたたりがあるという御当家のきびしい掟おきてを、迷信なりとって故意に矢を射て殺したものでござる。しかもその下手人は——」

「あいや！」

と、いきなり声を出して、三位有村、啓之助の言葉を抑え、重喜の方へ向きなおった。

「いさぎよくその下手人の名は下手人の口から自白いたします。すなわち、俵一八郎を一矢にて射殺しました者は、かく申す竹屋有村、御当家的おため！ こう信じてやりました」

見るまに、重喜の顔色が変わった。そして神経質に青ざめたまま、いつまでも平静にかえ

らず、ジツと病的に光る眸ひとみをすえた。

「なんでさようなことをなさる！ 当家中興の祖義伝ぎでん公以来、たとえいかなることがあつても、領土へ入りこんだ隠密は殺さぬ掟おきて——間者を殺せば怪異を生むという徳島城の凶事を、そこもとは好んで招き召されたな」

「イヤ凶事を招く意志ではありませんせぬ。むしろこれを吉兆の血祭りとして、御当家の古き迷信をやぶり新時代の風雪に陣をくりだすの意気を示しましたつもり。また、そのような旧ふるき思想にとらわれている家中の者の蒙もつをさますためにもと、あえて、かれを殺しました」

「おだまりなさい！」

こらえていたものが吹ツ切れたように、阿波守の声、やや冷静をかいて癩走かんぼしった。

「阿波には阿波の歴史があり、この城にはこの城の柱ちゆうせき石をなす掟と人心というものがある。間者を殺せば凶妖きようようありと申すことは、家中一統の胸に深く烙やきついて、誰も信じて疑わぬまでになつている。お身の乱暴な矢はその人心におびえを射こみ、動揺を起こし、大事の曙光しよこうに一抹まつの黒き不安を捺なすつてしまった！ もし向後こうご渭山いやまの城に妖異のある場合はいよいよ家中の者に不吉を予感さするであろう。ああ、まったく要いらざることを！ 烏おこ潜こな気働こきをさせたものじゃ」

こう、叱っている阿波守が、すでに迷信から生じる一種の不安と疑懼ぎぐにおそわれつつあるような心理が、三位卿には不解であった。

「それみたことか」

といわんばかりに啓之助は、小しょうじん人らしい溜りゆういん飲いんを下げていた。剣山の帰途、お米と自分の姿へ、馬上から諷罵ふうばをあびせかけて行つた有村の態度には、彼とても、こころよくはなかつたから。

しかし、有村は、あの時、啓之助へ投げた言葉も、偽らぬ感情を、疾風の間にいいたことだし、また阿波守に咎とがめられたことも、自身では、正しい啓蒙と信じているので、なんらの痛痒つうようもおぼえていない。

で、かれはなおも毅然として、剣山の制度は、家中に無用な迷信心理をつくる禍因かゐんだと論じた。

また、蜂須賀家の癌がんになるだろうともいった。

その上に、ツイ口を迂すべらして、

「いッそのこと、後あとに生き残っている甲賀世阿弥こうがよあみも、この際、殺してしまったほうがよろうと存じます！」

と痛言つうげんして、これはちと口が過ぎたと、自分もハツとして絶句し、阿波守や啓之助は、なおさらにびっくりして、その暴言にあきれたような眼をみはった。

——その時だった、折もあろうに。

突然！

ドドドド——ツと、すさまじい地唸じうなりがして、栗尺角くりしゃっかくの殿中柱が、ミリツといったかと思うと、三人の坐っている畳までが、下からムクムクと震動してきて、座にたえぬような恐怖を感じしめた。

「あ！……」

といつて、啓之助は度を失い、三位卿は、

「地震ないだ！」

と叫んだ。

阿波守は席を立たなかつた。脇息きょうそくとともに仰むけに身をそらし、もの凄やい家鳴なりにゆれる天井を、白眼はくがんで見つめていた。

地震！

かなり大きな地震——と直覺したことは、三人ともに一致していた。

震動は徐々とやんだが、啓之助は、地震ぎらいとみえて、次にくる揺れ返しを案じながら、喉^{のど}ぼとけを渴^{かわ}かせて、生ける色もなく棒立ちになっている。

家鳴^{やな}りのあとは一そう陰森^{いんしん}として、宏大な殿中は、それつきりミシリともしなかつたが——やがて何事だろう？

西曲輪^{にしくぐるわ}の廊下から武者走^{むしやばし}りの方へ、家中のもの誰彼となく、一散になだれだした。

その物々しさが、天変のあつた直後だけにことさらただごとでなく思われる。

「にわかには物騒がしいが？」

と三位卿も襖^{ふすま}をあけ、次の間を出て内廊下の一^い端へ飛びだした。

続いて、阿波守も席を立つたので、啓之助はそれを幸^{さいわ}いに、誰よりも早く、庭手へ下りかけようとすると、そこへ作事奉行^{さくじぶぎよう}の中村兵庫^{ひやうご}、城普請^{しろがしん}の棟梁^{とうりよう}益田藤兵衛^{ますだとうべえ}、そのほか石垣築^{いしがきづき}の役人などが、落ちつきのない顔色でバラバラと、重喜の面前へきて平伏した。

常なら、近習^{きんじゆう}、または表役人を通じて謁^{えつ}すべきなのに、いきなり、各作事支度^{さくじ}のわらじばきで、庭先へ平伏したのは、よほど何か狼狽^{ろうばい}しているとみえる。

「なんじや兵庫！ おお、益田藤兵衛！ そちの面めん色しよくもただではないぞ」

廊下に立つて、重喜が声を励ますと、中村兵庫、おののきながら、急変を知らせた。

というのは、この二人が責任をもつ作事のこと、こんど新たに築きかけている城南の捨曲輪すてくるわ、その水堀から積み上げた大石の堆層たいそうが、どうしたのか、今俄然がぜんとしてくずれたため、上の榭形ますがたへ建築しかけている出丸櫓でまるやぐらの一端まで、山崩れのごとく濠ほりへのぞんで落ちこんだ——という大失態。築城上例のない変事だ。

「申しわけござりませぬ！」

その後で、一句、こういったまま、作事監督の両役人、大地ひたいへ額ひたいをすりつけてしろうふく伏ふくする。

阿波守は、その者たちへ何ごともいわずに、ツウと足を早めたかと思うと、以前の三重じゆう櫓やぐらの上へ駈けのぼった。

竹屋卿と啓之助も、息をきらしてそこへ上がってきた。

でも阿波守は、それへも一言すら、口をきかずに、櫓柱やぐらばしらに手をかけて、城南出丸の工事をジツと見おろしている……。見ると、なんとという惨状だ、まったく目もあてられない状態。

さつき、有村がここに立つて、討幕の詩を微吟びぎんしていた時は、屹然きつぜんとしていた捨曲輪の石型や櫓が、みじめに歪ゆがみくずれている。そして、助任すけとうがわ川からくる水を堰せき止とめてある空濠からぼりの底へ、何千貫の大石があるいとして無数に転落しているものであった。

城内から溢あふれ出た若侍たちは、うろたえている人足どもを叱咤しつたして、その空濠の底から、石に押しつぶされた工こうじん人の死骸を引きあげさせている。

わめく者、うめく者が、戦場のごとく入り乱れていて、重喜の驚きを、呆然ぼうぜんのままにさせてしまった。

「ああ、これは容易ならぬことだ……」と啓之助は当然なことをつぶやいて——「川底の地固めが足らなかつたに違いない、そのために、大石をすえた沼がすべつたのだ……作事方の手落ち、申し開きはあるまい」

「最初の地ひびきは、さては、このすさまじい音であった。地震なではなかつたのじゃ」
竹屋卿がいうと、啓之助は、天変以上のこの禍わざわいを見ながら、なんとなくホツとした気持で、

「さよう、地震ではなかつたとみえます」
と、相槌あいづちを打って、殿とのの顔色をみた。

重喜はなお黙然としていた。

かれの心は、今もまだ、大きな地震の力をもって、渭山いやまの城とともに揺さぶられている。

阿波守に、事多き日であつた。

そこへ、船手組取次ふなてぐみとりつぎの早はや状じょうが一通、近きん習じゅうの手をへてかれの前へ届けられた。

密封した書状の上紙うわがみには、木曾街道垂井たるいの宿しゆく、御用飛脚屋ごようひきやくやむかでやの扱い印いんがベツトリとおしてある。

「気分が悪い」

といつて、重喜は、今手にとつた早はや状じょうを一読すると、それを三位卿に渡し、自身は近きん習じゅうの者と一緒に、望楼を下りていった。

「ム、一角の早打はやうちか。近頃ひんぱんは頻繁に様子を知らせてまいるな」

と、有村がそれへ目を落すと、啓之助もそばから顔をさしだした。

書信もんごんの文もん言ごんは簡単である。しかし、少しも吉報ではなかつた。

すなわち天堂一角が、阿州屋敷から助太刀に派遣された、原土はらしの組と協力して、もちの木坂に法月弦之丞を待ちぶせした、その翌々日、垂井たるいの宿しゆくで発したものの。

遺憾いかんながらこのたびも、遂に、弦之丞を討ち洩らしたが、次の機会には、必ずこの遺漏いろうの不名誉をすすぎます、という申しわけだ。

そして、自身刺客しかくとして弦之丞をつけ廻るうちに、関屋孫兵衛せきやまごべえ、旅川周馬たびかわしゅうまという、ふたりの剣士にもすくなからぬ助力を得ている旨が追記してあり、関屋孫兵衛は、もと、御家の原士の者ゆえ、弦之丞刺殺の目的が果たされたのちは、何分、原士の旧籍に復格のことを許していただきたい——などという私事のほうは多分にしたためてある。

「駄目だ！ これは」

有村は見切りをつけたように、文殻ふみがらを啓之助へつきやって、

「所詮しよせん、天堂などの敵でないともえる。頼み甲斐のない一角の報しらせがまいるたびに、阿波殿の御気分がいらいらとしよう。よし、ひとつこの有村から、わざと罵詈ばりを加えた返書をやって、かれを鞭撻べんたつしてくれねばならぬ」

「や、三位卿」

「なんじゃ」

「およしなされ、また要いらざる僭せん上沙汰じょうと、後あとになって殿のお叱ちりをうけますぞ」

「よいわ、よいわ。どうせ天下に、主人あるじの氣にいる居候はない。叱ちられついでに、一角が

腹を立てて、弦之丞を討つか、舌を嚙んで自殺いたすかという気になる程な、手紙を叩きつけてやる」

何かにつけて暇のある竹屋三位、思いつくと童心のようにこらえているということがない。ばらばらとそこを降りて、己れの部屋へ向いかけたが、その途中、先刻立った廻廊のところまでくると、そこに老臣や多くの者が寄り集まって、しゅうぜん愁然たるうちに、どこやら物騒がしく駈け廻っていた。

みると、さくしかた作事方の責任者である、益田藤兵衛と中村兵庫のふたりが、最前、阿波守へ平伏した庭先の場所から、一寸もいどころをかえずに、そのまま、腹を切っていたのである。

ふたりの死骸は、すでに運び去られてあつたが、血汐を吸った庭土にわつちには、まざまざと濡れている痕あとがあつた。

「兵庫は偉い！ 藤兵衛もさすがだ」

こう言いながら、竹屋三位、その騒ぎの中をぬけて居間へ入った。実際、かれはそう思った。清涼剤のような心地がした。

「それにつけても、歯がゆいやつは天堂一角、たかのしれた弦之丞ひとりを大勢して、い

つまで持ち扱っているのだ」

憤然どこのいといったものである。

宿直宿直のものが襖越ふすましに聞いていたら、阿波守がつぶやいているのではないかと間違えるくらいに。

やがて硯すずりをよせて、墨をすりだした。

土佐ずきの巻紙をのべて、活潑な文字を書きだした。世尊せそん寺流じりゅうとか醍醐だいご風ふうとかいうような、色紙うつりのする水荃みずくきの文字ではない。文字もかれの気質どおり、わがままに匆はね、気ままに躍っている。さらにだんだん見ていると、一角に宛てたその文言もんごんも激しいが、文字そのものもまた、一字一字怒いかっている形。

しばらく夢中で書いている。

かかる間に、地震なならぬ地震なのあつた徳島城の殿中は暮れた。

「これでよし！」

巻折まきおりにして、封じ目に糊のりをしめし、上へ、大阪安治川御屋敷留守居役便託びんたくとしるし、そのわきへ、天堂一角——とまで太く書いたが、すぐ下へ、殿という字を書きつづけないうで、ちよつと小首をかしげていたと思うと、取ってつけたように、先生と書いた。

天堂一角先生——

この書いた宛名あてなを眺めて、みずから悦に入りながら、

「先生は皮肉でいい。ム……だが、皮肉や諷語ふうごは、正直にうけとられると、時に大変なま
ちがいになるものじゃ。しかしよかろう、由来、先生という名称は、その表より裏で通用
するものだ」

それに決めて、机から目を離した。

気がついてみると、いつか手元がほの暗ぐらい夕ぐれ。

「お……もう六刻むっ過ぎであろうに、きよの騒動で燭台の支度までおくれたか」

と、書面を託送すべくそこを立って、間数まかずを越えてゆくと、ふいに、陰気な夕明りのた
だよう奥殿にあたつて異様なうめき声が洩れる……。

妙な呻うめきを聞いたのは、有村ばかりでなかったとみえて、小姓部屋からひとりの近きんじゆ
習うが走りだし、やはり錠じょうぐち口くちに立って、耳を澄ましているふうだったが、うす暗い所
から、

「安田伊織やすだいおりではないか」

と、突然、三位卿に声をかけられて、びっくりしたようにふりかえった。

「あ、有村様でございましたか」

「向うでする呻き声、どうやら殿の寢室らしいが、阿波殿にはどうしておられるな！」

「先ほど、お櫓やぐらからお下り遊ばすと、すぐに気分がお悪いと仰せられて、典医のさしあげた薬湯やくとうも召しあがらずに、お臥ふせりになった筈でござりますが」

「それでは今のは囁うわごと言か……一八郎の死をひどく気にされていたところへ、妙にきようは悪い偶然が重なったので、まだ昼の地震にゆられておいでになるとみえる」

「あ、何やらまた、激しいお声を出されておられます。オ……いつにない鋭いお声で」

「だいぶ神経を起こしておられる。伊織いおり、ちよつと御寢所へ行つて揺り起こしてあげい」

「はい」

「お燭台しよくだいがまだまいっておらぬようじゃ」

「ただ今、手燭をもちましてお移し申してまいります」

手雪洞てほんぼりをかざした近習の安田伊織という若者、なんの気もなくお次部屋へ入って、しきりにうなされてゐる寢所の襖ふすまをことさら忍びやかにあけてにじり進むと、

「誰じゃッ」

と、いきなり白絹しろぎぬの蒲団がパツとはねあがった。

その権幕のおそろしさと、まっ白な練絹ねりぎぬの寝衣ねまきをきた重喜の相貌が、手雪洞てほんぼりのかけに別人のようにすごくみえたので、伊織がヒヤリとして腰をうかしかけると、重喜の目がジイとすわって、彼をそこへ居すくませた。

「と、殿様……」

とおののくのを、なお睨ねめつけていたと思うと、

「……………」

無言のまま、阿波守の白い手の先が枕元の蛭ほたるぎ斬り信国のぶくにの太刀へスーとのびて行ったので、もう、伊織はジツとしているにたえない。思わず、後退うしろさがりに立ち上がろうとする。

とたんに、かれの白足袋たびが、そばに置いた手雪洞てほんぼりを踏みつけ、一道の灯ほかけが天井へ揺れたかと思うと、

「おのれ！ 隠密ツ——」

抜き打ちに斬って、阿波守の手に、信国の太刀が呆然と持たれてあつた。

「有村様ツ。あ、有村様——」

伊織は絶叫しながら錠じょうぐち口くちまで転げてきたが、すぐにバツタリと仆れてしまった。何かと驚いて、来あわせた者二、三人、森啓之助も飛んできて、太守たいしゅの寢室へかけこんでみた時には、誰よりも早かった竹屋三位が、重喜を抱きとめながら、声に力をこめて何か叫んでいたが、重喜はまだ落ちつかない眸ひとみを光らして、

「江戸の奴が……江戸の隠密が……」

「な、なにを仰せ遊ばす！」と三位卿は、夜具の上へ諸もろだお仆れになりながら、

「渭山いやまの城中に、なんで、江戸の隠密などがおりましようぞ。夢をみておいでられたのであろう、おお、方々かたがた、早く燭ひを——いつもより燭台を多く！」

右往左往して騒ぐうちに、間もなくそこは、晃々こうこうとした灯の明りに、物の蔭もなくなつて、仰むけに寝かされた重喜の顔だけが青白かつた。

典医がきて診みなすと、夕刻前よりはいちじるしく熱があがっていた。だが、それつきり悪夢を口走る様子はなかつた。むしろ、平常へいぜいのかれよりいっそう冷徹にその神経が冴えてきたようであつた。無論、それも病的にはあるが——。

啓之助は、遂にその夜、城をさがることができないで、公私二つに気が散っていた。

私事のほうの気がかりは、お米よねのことであつた。きよう岡崎の港を出て大阪へ向つた四

国屋の舟には、お米と仲間の宅助がのつて行つた。——それはかれが、止むなく許してやったことだが、どうも、あのままこの阿波へお米は帰つてこないような気がする。しまつた。幾ら泣こうが吠えようが、大阪へやることを許すのではなかつた。女の涙ほど嘘のあるものはない。ほんとに泣いた涙でも、女は、あとでそれを嘘にして平気なものだ。ましてや、あの女は、無理無態に、海を越させてきた女ではないか。

失策だ、失策だ。とり返しのつかない失策をやつてしまつたのではないか。——と、彼は人知れぬ焦躁をもつて、殿の枕元に坐つていた。

かれ以外に、夜詰の間にも、常より多くの侍がつめたが、妙に、その晩は徳島城に鬼気があつた。陰にみちた人の心が鬼気をよぶのだ。そして、誰も口には出さないうで、誰の胸にも俵一八郎の死がこびりついている。

だが、三位卿だけは、おのれの部屋へひきあげた途端に、いとすこやかないびきをかいて寝てしまつた。春は蛙の目借時、かかる日も、食客殿は幸福であつた。

いまわしい運命の呪縛じゆばくからのがれたい一心に、さまざまと手をくだいた甲斐があつて、川長かわちようのお米は、やつと、なつかしい大阪の町を、再び目の前に見ることができた。土佐堀口の御番所ごばんしょで四国屋の藍船あいぶねが、積荷しらべをうけている間に、許されて、その親船を離れた一艘そうはしけの舩は、幾つもの橋の下をくぐつて、阿波座堀の町を両岸に仰いでいる。

お米は日傘をさしてそれへ乗っていた。啓之助の手を遁のがれるとともに、心のうちで、「もう、どんなことをしたつて、阿波へなんぞ戻りはしない」

と、永別えいべつを告げてきたお米は、そこに、少しも変りなく賑わっている大阪の町を眺めて、なんとなく後ろめたい気持であつた。

怖ろしい体験と、執念ぶかい男のなぐさみに耐えてきた女は当然、心も容かたちも変つている筈。それは、境遇の導くままに任せている間は、気がつかない姿だけれど、久しく接しない故郷の町へ入つてみると情けないように變つていることが、その人自身にもありありとみつめられる。

両河岸がしをゆく人——橋の上を通る人——、すべての視目しめくも、自分ひとりに注そそがれているように感じた。そして、その肩身のせまい気おくれが、お米に日傘をかざさせた。

もつとも、親船を下りる前から、お米にはあらかじめ強い世間意識があつたとみえて、土地の者に、こんな姿を見られるのはイヤだといって、かこ 困い女ものこの 好みに、阿波で啓之助がこしらえてくれた衣類をスツカリ派手なものに着かえ、髪も娘らしい形に、自分で結びなおしてしまった。

それでも、まだ緻密ちみつな女の心は、気がすまないとみえ、幾夜幾たび、浅ましい男の快楽に濡れた唇へは、濃すぎるほどの口紅をつけて、いまわしい思い出のかげを玉虫色に塗り隠した。

「やつぱり大阪は大阪だな、俺でさえ久しぶりに来てみれば、悪くないんだから無理はない……。ねえ、お米の方かた」

と、舟の進むのとは逆に向いて、舳はしけみよしの舳に腰かけながら、くわえ煙管ぎせるで納まっているのは、啓之助の内意をふくんで、お米の監視についてきた 仲間ちゆうげんの宅助。

「さだめしあなたはお懐かしゆうござんしよう。旦那様からお許しが出たんだから、まあこれから日限にちげんまでは、ゆつくりと、好きな所をお歩きなせえ。だが、ひとり歩きはいけませんぜ。そいつアくれぐれも、啓之助様から、念を押されてきた宅助。あなたの紐ひもになつて、どこまでも一緒にクツついてまいります。ハイ、立慶りっけい河岸のお宅へも道頓堀の芝居

へも、大津の叔父さん——なんていったつけ、そうそう、おおつえし大津絵師のはんさい半齋か、あそこへ行くとおっしゃつても、宅助やっぱりお供しなけりやなりませんぜ」

うるさいやつ、毛虫みたいな男——と眉をひそめながら、お米は返辞もしないで、わざと、日傘を横にした。

ふふん……ソロソロご機嫌がお悪いネ。

大阪へ着いた以上は、もうどうにでもなれというような不貞ふてくされをやったつて、そうは問屋とんやで卸おろさねえぞ——というようなのは宅助たくすけの面つらがまえ。

「それじゃせつかくお暇がでて、のびのびすることができないから、さだめし、この宅助を、ダニのようにうるさく思っていますよね。だが、こいつも主人持ちの悲しさというやつなんで……、へへへへ、役目の手前と思っておくんなさい。お米の方の目付役も、どうしてなかなか楽じゃねえ」

「分っているよ、おしやべりだね」

ろ櫓を持つている船頭の手前もあるので、お米がキツイ目を見ると、女あしらいに馴れきっている宅助、わざと、恐れ入ったように頭をかいて、

「ホイ、またお叱りでござんすか」

「考えておくれよ、大阪へ来たんだからネ」

「そりや分つておりますとも」

「分つているなら、なぜ、ツベコベとよけいな、おしやべりをするのさ。人中ひとなかで、お米の方かたなんてふざけるともう阿波へ帰つてやらないからいい」

「帰つてやらないは手きびしい。思えば、あなたも変りましたネ、そんな啖呵たんかをきる度胸になつたんだから……」

「そうさ、お前まへみたいな狼おおかや貉むじなと、さんざんたたか闘つてきたんだもの」

「こいつアいけねえ、どうも大阪へ入つてから、次第次第に気が強くなつてきやがる……イヤ、なつておいでなさいますね」

「今までの仇かたきう討うちに、たくさん威張つてあげるのだよ」

「謝あやまつた！ 宅助お役目が大事でござんす、あなたに大阪でジブクラれると、まことに手数がかかつていけねえ。どうかすなおに陸おかへ上がつて、すなおに遊んで、すなおに阿波へお帰り下さいまし。おつと、冗談はともかくとして、この舟を、いったいどこへ着けさせますか？」

「そうだねエ」

「そうだねエジや船頭が可哀そうだ。なんならすぐに川つづきを、このまま立慶河岸へや
つて、川長のお店の前へつけさせましようか」

「やめておくれ、ばかなことを」

お米は、腹が立つように、

「家を出たまま、半年以上も姿を隠していながら、不意にボンヤリと帰れるものかどうか、
お前だつて考えてごらん。神隠しに会った与太郎じゃあるまいし……」

と、口でぞんざいに言い放しながら、胸では、何か密な考みつえをめぐらしているふう。

もとよりお米の真意は、二度とふたたび、啓之助の所へなど帰るまいとしているので、
それにはなんとかして、この宅助という監視の紐ひもを、大阪の町で、迷子にしてしまわな
ければならないと苦思くししている。

ところが、紐もまた一癖も二癖もある紐で、目から鼻へ抜けている上に、女あしらいに
馴なれていて、お米の心の動き方まで、いちいち浄玻璃じょうはりの鏡にかけて睨にらんでいるような男
——なんとも始末の悪い紐だ。

しかし、森啓之助とすれば、実に、上じょうじょう乗じょうなる紐を付けておいたものといわなければ

なるまい。

およそ、世に生きとし生ける雑多な人間——迂、愚、鈍、痴、お天気、軽薄、付焼刃、いかなる凡才にせよ、何かの役に立たないという者はなく、何か一面の特性をもたないという者はないけれど、かかる役目の適材というものは、そうめったにあるものではない。

事簡単に申せば、一匹の男が、ひとりの女を束縛する、一本の紐と化り代るわけで、その屈辱的な努力を軽蔑してやる以外に、買ってやる所はみじんもないが、紐自身にいわせると——紐の宅助の述懐にきけば、どうして、お米の方の目付役も、これでなかなかむずかしいそうだ。

第一、紐の資格たるや、どこまでも自分に好色根性があつてはやれない。ありはあつてもねじ抑えきる辛抱がある。第二、ホロリとする同情の廻し者にかからぬ冷酷に強く、俗にいう玉なしという失敗を招かぬこと。第三、どこまでも凶々しく、かつしつこく。第四、嫌われることにひるまず、しかも先を嫌つてはいけない。そしてあくまで綻びずに、二子の糸で縫いつけたように、終始、完全に女の腰に取ッ付いていることを旨とし、紐の使命とする。

こう観じてくると、紐たるや、紐の役目も、仇やおろかな苦勞ではなからう。忍苦

忍^ゆ従^うの大事業にも等しい。されば、常に蚤^{のみくそ}糞^をを肌着につけて、寝酒一升の恩賞にあずかるため、時には命も軽しとする仲^{ちゆうげん}間^を部屋のなかからでもなければ、よくこの任にたえる異才は現われまい。

なにしろ、お米にとつては、苦手であり、手強^{てじわ}い懸^{かけ}引^{ひき}相手である。

しかしこの場合、非常手段を用いても、宅助をまいてしまわないうちは、決して、自由は解かれていない。藪^{やぶ}で捕^{とら}われた鶯^{うぐいす}が、籠のまま藪へ帰されても、それが放たれた意味にはならないのと同じに。

「——だからね、宅助や、私はこう思案しているのだけれど、どうだろう？」

下手^{したで}に出ると、宅助は、その泣き落しに誘^うわれ^れないで、

「たいそう尋常なお話で。嫌いぬいたわつしに、今度はご相談といらっしゃいましたか」

「茶化^{ちやか}さないで聞いておくれよ」

乗^{のり}人が迷^{まよ}っている様子なので、櫓^ろを取^とっている船頭は、ゆるゆると阿波^{あわ}座堀^{ざぼり}を漕^こいで、

今、太郎助^{たろうすけ}橋^{はし}の杭^かを交^かわしかけていた。

「決して、茶化^{ちやか}してなんぞいるものですか。これが宅助の大まじめなところで」

「なにしろ、いくらあつかましくつても、このまま、ハイ只今と、家へいきなり帰るわけ

には行かないから、当座の間、どこかへ二、三日落ちついて、大津の叔父さんに来て貰おうと思うのさ」

「あの絵師の半齋さんにね。そりやけつこうでござんしょう」

「そして、叔父さんに、啓之助様のお世話になっていることを話して、家へも程よく話して貰った上、こんどは晴れて阿波へ行くということにしたら……」

「だが、ちよつとお待ちなさい。なんだか、旦那に暇を貰ってくる時には、あなたのお袋様が、危篤とか大病とかで、急に来てくれという訳じゃありませんでしたか」

「そんなことは、元から嘘の作りごとだということを、お前だって、うすうす知っていたじゃないか。私は、ただ、この大阪が見たくって」

「驚き入った腕前です。それで、あんな涙がよく出ましたね」

「おや、いつ私が、泣きなんぞしたえ？」

「したじゃございませんか——ほれ、劍山の麓口ふもとの——あのむし暑い納屋倉なやぐらの中で、納なつと豆まみたひになりながら、いつまで、シクシクシクシクと」

「いやな、宅助——」

日傘をすぼめて、その先で、はしたなく向うの膝を突きながら、

「いい加減なことをおいでない！ 船頭さんが笑うじやないか」

「もつともわつしは、程よく酔^{めいてい}酩^{めいてい}した時だったんで、残念ながら、それ以上知らないことにしておきましょう。ところでそういうお話なら、とにかく、この辺で解^{はしけ}を上がるとしませうか。どうせこちからはあなた任せ——」

「そうだねえ？」

と、お米が陸^{おか}を見上げた時に、船の先が、ちようど橋の下をこぎ抜けていた。

すると、その時、太郎助橋の欄干を、向う側からこつちへ移つて出てくる解^{はしけ}を見なおそうとしている年増の女があつた。

「おやッ。川長のお嬢さん？ ——」

こうびつくりした顔をして、女はのめり込むように川を覗^{のぞ}いた——ぞんざい結びの止め^さに挿^さしてある、珊瑚^{さんご}の脚がヒョイと抜けそうになるのを抑えて、

「もし！ お米さん——お米さんじゃございませんか」

不意に名を呼ばれたので、オヤ？ と思つたらしく、お米も橋の上を見上げたが、にわかに、すぼめていた日傘をパチツと開いて、

「あ——船頭さん、もう少し先までやって下さいな。少し、急いでね」

と、日傘のかげに身を隠したまま、人違いと思わすように、そしらぬ顔で舳を進ませた。

「あれ？ ……」

橋の上へ取り残された年増の女は、不思議そうな目を、その日傘の色へ追っていた。それは、目明し万吉の女房——お吉であった。

「人違いだったかしら？ ……だが、どうしても、今のは、お米さんのようだったけれど」
こうつぶやいて、気をとられている眸の先を、ツウと、燕が白い腹を見せてかすった。

お吉とお米とは、かつて久しぶりに、九条の渡舟で会ったことがある。その時のお吉は、消息の絶えた万吉の身を案じて、四貫島の妙見へ、無難を祈りに行った帰るさであった。

お互いに、女同士の愚痴をいったり慰めあったりして別れたお米が、フツと大阪から姿を消したのは、それ以来のことである。

万吉と夫婦になる前は、川長の座敷で仲居をしていた縁もあって、お吉はその騒ぎの折も、店の者とひとつになつてお米の行方を探したが、どうしても知れなかった。

そのお米が——今何げなく眺めた阿波座堀の舳の中に、その頃より肉づきささよくなつ

て、仲間態ちゆうげんたいの男と話を交わしていたので、お吉は、驚きのあまり、ジツと、見定めるという余裕もなく、いきなり声をかけたのである。

けれど、先の女は、日傘の下に姿をすぼめて、いかにも素気なく聞き流して行ってしまった。お米様ならあんなことをするいわれがない。やはり、自分の錯覚さつかくであつたかしらと、お吉は茫然と思いなおした。

「そういえば、仲間ちゆうげんらしい男もいたが、川長のお嬢さんが、そんな者を供につれて歩いていけるのも妙な話……。とすると、何かにつけて、同じ年頃の女をみると、もしや、もしや？　と思う私の気のせいだったんだね。アア、気のせいといえ、うちの良人ひともどうしたのだろうか？　……」

そのまま、しばらく欄干らんかんに、片肘かたひじをもたせて休んでいたお吉は、お米のことを思い消すと一緒に、より強く、良人おとこの万吉の安否がひしと胸にわいてくる。

江戸へ行つたということだけは、たしかに聞いているけれど、以来、手紙一本よこすではなし、一言半句の人伝ひとづてをしてくることもなく、去年の秋から冬を越して、もうやがて、この春も、また沙汰なしに暮れようとしている。

「薄情というのか、男気おとこぎというものか。いくら目明しの居所知らずといっても、家や女

房まで忘れてしまわなくつてもよさそうなものだけれど……。ああ、考えまい、思いつめると今のように、他人の後ろ姿までにハツと動悸どうきを打ってしようがありやしない」
 気を取りなおして橋を渡った。

そしてまた、今日も、その信心にゆくのらしい。木綿もめん縞じまにジミな帯もいつに変わらず、
 装よそおいもなく巻いた髪には、一粒の珊瑚珠さんごじゆだけが紅あかかったけれど、わずかなうちに、削けずつたような瘦やせがみえる。

お吉の影がそこを去つたと思うと、まもなく、一方の舢はしけが空からになって、川筋を戻つてきた。
 た。

もうその頃、陸おかへ上がったお米と宅助とは、長なが浜はまの河岸から本願寺の長土塀ながどべいに添つて、ぶらりぶらり肩をならべてゆく。お米は今、太郎助橋たろうすけで、ワザと顔をそむけたお吉のことを考えて、なんとなくすまない氣にふさいでいた。

で——うつむきがちに先へ行くと紐ひもの宅助もしばらくは無言のまま犬のようについて歩く。

午後の陽ざしが足もとへ、細長い二つの影を引いていた。お米は、自分の影のうごくほとりに、ゆらゆらとこびりついてくる影を見て、踏んづけてやりたい氣がした。

「アア嫌だいやだ。どうしたらこのうるさい鎖くさりを切り離すことができるだろう？ 何かいい智慧はないかしら？ この男をまいてしまわないうちは、いらいらして、気が立って……」

お米はジリジリする力を糸切歯にこめて、必死に、急な策をしぼっていた。それにひきかえて紐の方は、自力を労さず他力主義に、お米の足の向くほうへ、ズルズルついて行くだけである。

「さつき、橋の上から声をかけた女——ありや一体だれですか」と、宅助、少し退屈をしてきたとみえて、追いつきながら話しかけた。

「あ、太郎助橋でかい？」と、お米は肩を並べさせないで、宅助よりは、またふた足三足先に歩いた。

「あの女は、ずっと前に、家で仲居をしていたことがあるので、私のおさな顔を知っていたのだろうよ。だけれど、今の身の上を聞かれたり聞いたりするのもうるさいから……」

「川長のお宅へはすぐに帰らないというし、知り人に会えば姿を隠す——そんな窮きゆう屈くつな大阪へ、一体なんのためにはるばると帰ってきたんだか、ばかばかしくって、この宅助

にや、あなたの氣心が知れませんぜ」

「ご苦労様でもばかばかしくても、私にとれば、この大阪が、無性むじょうに恋しくつて恋しくつて、夢にみる程なんだから、しかたがないじやないか」

「へえ、生れた土地というものは、そんなにいいもんでございますかね。わつしは能登こいでの小出ヶ崎で生れて十の時に、越後の三条にある包丁鍛冶ほうちようかじへ、ふいご吹きの小僧にやられ、十四でそこを飛びだしてから、碓氷峠うすいとうげの荷物かつぎやら、宿屋の風呂焚たき、いかさま博ぼ奕くちの立番たちばんまでやつて、トドのつまりが阿波くんだりまで食いつめて、真しん鑰ちゆう 鑿こじりに梵ぼ天帯てんおびが、性に合あつていとみえて、今じやすっかりおとなしくなっているつもりですが、それでもまだ生れた土地へ帰つてみてえなんてことは、夢にも思つたことありませんがね」

「そりや、お前まへが情じやうなしか、それとも、お前をつなぐ人情というものが、その土地にないからさ」

「おや、その論法でゆきますと、それほどこの大阪にや、あなたを迷わす人情があるという理窟りくつになりますぜ」

「あるだろうじやないか、お母おつかさんやら、叔父おじいさんやら」

「冗談は置いておくんなさい。皺しわのよつたお袋や叔父さんに、そこまでの情愛があるもんですか。血の気の多い年頃にや、それを捨てても男のほうへ突ツ走るじゃござんせんか。ははあ……読めましたぜ、お米の御方おんかた」

「勝手に邪推をお廻しよ」

「エエ、すっかり神易しんえきを占たてました。筮竹ぜいちくはないが宅助の眼易がんえきというやつで。――

この眼易の眼力で、グイと卦面けめんをにらんでみると、あなたが大阪へ来たがった原因は、死ぬほど会いたいと思つている人間がどこかにいるに違えねえ。え、どうでしょう、この判断は？」

「そりや、いないとも限るまいさ」

「ふふん。しやあしやあと仰せられましたね。いよいよ不貞くされの捨て鉢の、さらにヤケのやん八というやつで、この宅助を怒らせようとなさいますか。そして、阿波へ帰るのはイヤじゃイヤじゃと駄々をこねようとなさいますか。――どツこい宅助は怒りませんテ。はい、頭ぶを打ちたければ頭、足をなめるとおっしゃれば足もなめます。なあに、わずか少しの辛抱で、無事に、もう一度連れ戻りさえすれば、旦那様から存分な褒美ほうびをねだる権利があるんで――一生扶持ふちばなれをしねえ仕事、それくらいな我慢がなくなつちや、猫と女の

番人はできねえ」

図に乗つて、また舌の動き放題ほうだいに、怖がらせをしゃべっていたが、お米に返辞がないので、こんどは少し音を柔ねらやわげて、

「だが旅先だ——」と手をかえた。

「口でいうお惚気のろけぐらひは、わつしも寛大に扱ひましようよ。が——だ、ただしだ、そんな方へ体ぐるみ、籠かご抜けにすつぽ抜けようなんてもくろみは、ムダですからおよしなせえ、エエ、悪いことありません。世の中に骨折損こけというくれえ、呆痴こけな苦勞はないからなあ」

「野暮めぼしに目柱しらをお立てでない」

心の底を見すかされて、釘を打たれたかと思う口惜しさに、お米は少しふるえて言った。

「口でそうはいうものの、私の恋しい思い人は……」

「ほーれ、やつぱり眼易がんえきがあたつていやがる」

「真顔まがおになつて、何も心配することはないよ。この大阪にはもとよりいず……ああ今頃は、どこを流して流れているかも分らない……」

と、ツイ口の辻すべつたついでに、お米は、さげすみぬいているこの男へ、胸に秘めている本当の声を、叩きつけてやりたいような気がして、

「——ひとよぎり一節切の」

と、喉のどまでその人の名を洩らしかけたが、邪推ぶかい紐ひもの宅助に、これ以上な気を廻させては、いよいよ自縄自縛じじょうじばくの因もとを招くばかりと思いなおして、ホ、ホ、ホ、と取つてつけたさびしい笑いにまぎらわせた。

とにかく当座の宿をとつてからの思案と、お米はその晩、中橋なかばしすじの茗荷屋みようがやという家を選んだ。

どこということもないが、なんとなく、旅籠はたごにしては目立たぬ家で、裏には当り障りさわのない座敷もありそうなので。

無論、紐の宅助もついて入った。

けれど、宿がきまると今までのように、お米の腰に寄り付いているわけにはゆかない。

仲間ちゆうげんは仲間として待遇され、若奥様は若奥様と向うで見なして、丁重に差別をつけ、部屋も別々、お膳も別。女中たちの物言いまでが違ってくる。

お米が何ともいわないから、宿でよけいな気転を利きかして、お供の膳に酒をつけるということもない。酒がないのは宅助にとつて、はなはだ哀れを感じしめる。ひとつの刑罰を

うけてるのと同じだ。

「宅助や、お前は疲れたろうから、早く寝むがよい」

改まったお米の言葉も、急に素気なく取り澄ましてきた。

宿の手前はたまえとして、何もそうにわかに関をおかなくたっていいだろう。下郎を召し連れた若奥様かお嬢様か——というふうな権式だけを取って、こっちへ酒もあてがわないのはひどすぎる。と、宅助の虫は穏やかでなく、

「ばかにしてやがる！」と面をふくらせた。

「お付人のおれに、寝酒ぐらいは飲ませておかねえと何かにつけてためにならねえぞ。

困い者のくせにしやがって、気の利かねえ女もあるものだ。よし、ひとつまたチクリチクリ嫌がらせをいってやらなくっちゃならねえ」

と、隣の部屋からニジリ出して、境の襖を少し開けた。

「お米さんエ」

目玉だけでも脅迫のきくような凄顔突き出して、わざとこう伝法口調に、
「今、そこで、何とおっしゃいましたエ」

お米は鏡をよせて、寝白粉をつけていたが、ふりかえりもしないで、

「ゆるすから、お前は先にお寝みというのさ」

ふざけるな！ と宅助はムカついて、何か痛い言葉をぶつつけてやろうと、浅黒いうわ唇を舐めあげていると、折悪しく、宿の女中が廻ってきて、夜具の支度をしはじめた。

女中たちの手前、宅助は、喉まで衝きあげた啖呵を飲み殺して、ツイしかたがなく、

「ありがとうございます」

と、お辞儀をしてみました。そして寢床へ潜りこんでから、

「ちえッ、いまましい女だ。ここを出たら、ひとつギユツと手綱を締めなおさなくつちやいけねえ」と、業を煮やして、寝返りを打つ。

お米の部屋にも、程なく、ふツと行燈を消す息がきこえて、真つ暗になった。一刻ばかりたつと、どこの部屋もあらかた寝静まつたらしく、風呂の湯を落す音と、不寝の番のあくびよりほかは聞こえなくなる。

鼻が悪いとみえて、仲間間の宅助、おそろしいいびきをかいてきた。それが耳ざわりで寝られないのか、暗い中で、二、三度枕をキシませていたお米が、やがて、床の中から迂りだしたかと思うと、スウト、廊下へ出て行った。

カタンと、さるをはずす音がしたから、廁へ立ったのかと思うと、廊下へ風が流れてく

る。

裏庭へ出る雨戸が四、五寸ばかり音なく開いた。

たたりと下がった緋縮緬ひぢりめんにからんで白い脛はぎがそこから庭土にわつちを踏もうとすると、

「オイ、オイ、オイ。お米さん」

いつのまにか眼をさまして、

「どこへ行くんだ！ 少し方角が違うだろう」

と宅助の両手が、お米を元の座敷へ抱だき戻してきたらしい。

並なみの者なら、あわてて明りをつけたり、女の逃げ支度を調べたりするところだが、そこ

は老巧な紐ひもである。——気がついて、わざと、それまでの事件にはしないで、

「女のくせに、夜半よなかに扉越しの曲芸なんぞをやると、猫の恋と間違えられて、誰かにドヤ

しつけられますぜ。うふッ……」

といやな笑い方をしながら、自分の寢床へ長々ともぐりこむ。

それなり宅助も黙りこくつてしまふし、お米も寢床にジツと固くなっているらしい。もう両方で、寢息を探りあうことは止めた。そしてただお米の心臓だけが暗い中でドツトと鳴ってじれていた。

翌日は、どんな顔を見あわすかと思われたが、宅助もお米も、気まずい話にはふれなかった。

昼を過ぎてから、お米は、叔父の半齋の所へ手紙を書いた。それを飛脚屋へ頼みながら、気晴しに歩いてこようか——と、今日はお米のほうから宅助をうながして外へ出た。

「ソロソロ機嫌を取つてきやがったな」

と肚はらの中で宅助は、こうあるのが本当だとうなずいた。宿屋を出るとその調子で、じきに言葉もぞんざいに、

「お米さん、大津絵師の半齋へ、なんていう手紙を書いたんで？」と、糺ただしてきた。

「きのう私がいつていた通りさ」

「はてね。忘れてしまったが」

「とにかく、叔父さんに相談があるから、茗荷屋みよがやまで、来て貰いたいという意味をね」

「なるほど、そこで叔父貴おじきに事情を話して、川長の店へとりなして貰おうというんですか。だが、その相談の時にや、宅助も立会いますぜ」

「いいどころじゃない。どうせ、家うちの方へ得とく心しんして貰ったら、私の手道具や着物まで、

スツカリ荷物にして阿波へ送ろうという話なのだから」

「ぜひとも、そうありてえもんです。昨夜ゆうべみたいなきことが、この先チヨイチヨイとないうに」

やんわりと、棘とげを含んでくる言葉を、聞きそらしたように装よそおって、いつか天満てんまの河岸へ出てきた。お米は、河筋にある舟料理の小ぎれいなのを探しているふうだった。——もう蠅かきの季節でもないが、奈良茶ならちやの舟があつたので、宅助を誘うと、だいぶ昨日きのうと先の態度が違うので、かれはその風向きを疑つたが、ゆうべの一事で、お米も諦あきらめをつけてきたのだらうと、考えた。

酒に渴かわきぬいていた折なので、気を緊しめながら、宅助、存外ぞんがいに飲んだ様子である。お米も、昨夜以来、何か思案をかえたとみえて、珍しいほど神妙に、時々しやく、酌しやくまでしてやつた。

「そら。河のほうへ寄ると、あぶないじやないか」

ふたりがそこを帰る頃、もう天満河岸はトツプりと暮れていた。

宅助は陶然とうぜんとして、おぼつかない足どりを踏みしめていた。しかしあくまで油断はしていないので、酔わぬ時より、しつこくお米に注意を配つた。

「あぶねえって、だ、誰が？ ……」

「そう、川べりを歩いちや、足もとが危ないというのさ。落ちたら私が困るじゃないか」

「ご親切様で……へ、へ、へ。だがネ、お米の御方おんかた、き、気の毒だが、宅助、ちツとも酔っちゃいねえ。だ、だめだよ！ ……ず、ずらからうなんて気で、どう神妙な様子をしたらって、微塵みじんも油断はありやあしねえ！」

と、先に立った宅助、どうやら、常には腰について廻る紐ひもが、今夜、お米を引きずってゆく形だ。

「そうかい……」と、お米はまた、それを気任せきまかに歩かせながら、「じゃお前は、どこまでも私を疑っているね」

「この間も、キツパリ止めとどめを刺しておいたじゃねえか。ウ、ウーイ……おれの目玉は浄じよう玻璃はりの鏡だと」

「まったくお前の眼力がんりきは鋭いね」

「所詮しよせんだめだよ、諦めあきらめがつきやしたかい！」

「ところがなかなかつかないのさ。そういうお前に、もう野暮やぼな隠し立てはしますまい。私はね、もう二度と阿波へは帰らないつもりだよ」

「つもりか——は、は、は、は」と嘲笑あざわらっていたかと思うと、急に、胸の気もちでも悪くなつたか、宅助は、脇腹を押さえたまま、路面へグウツとかがみこんでしまった。そして、ペツと生唾なまつばを吐く音をさせて、そこを立とうともしない様子。

「どうしたの？」

お米は、やや離れた所に足を止め、片手を柳の木にかけて、冷やかに闇をすかしながら、
「——たいそう威張っていたようだけれど、脆もろいねエ……もう薬が廻つたのかい」

「な……なんだと」

無理に、起き上がろうとした宅助は、かえつて、ウームと呻うめいたまま、苦しそうにのた打つた。

「付人つけびとのお前が、そんな意気地なしじやお困りだね。ずいぶんお前も執念強く、私を逃がすまいとしていたようだけれど、今日のお酒はちつとばかり、悪い薬がまじつたとは、さすがにその浄玻璃じょうはりの目玉でも見えなかつたとみえる」

「うツ……うぬ、ど、毒を？」

「なあに、そう心配おしでない、持ちあわせの鼠薬ねずみぐすり、それもホンの小指の先で、お銚ち子の口へつけたくらいだから、まさか、そのずう体の命を奪とるほど廻りはしまい。……

だが、思えば私という女も、すごい腕になりました。これもみんな、お前や、啓之助が私に度胸どきょうをつけてくれたお仕込みしこだよ。阿波へ帰ったら、あの男に、くれぐれよろしくいっておくれネ」

「ウーム……ちツ畜生」

「口惜しそうだね、ホ、ホ、ホ。苦しいかエ。私が長持へ押しこめられて、阿波へやられた時も、ちようどそんな苦しみさ。毒でも飲んで、いつそ死のうとしたことが、幾度だったかしれやあしない。——だけれど、死んで花が咲かないよりは、恋しい、恋しい、あるお方に、会われないのが心残りで、ツイのまずにいた毒薬を、フイと昨夜ゆうべ思いだして、少しばかりお前に試してみたわけさ。——どうだエ、宅助、それでもこのお米様を、阿波まで連れて帰れるかい」

「……………」えび 蝦えびのようにかがまった宅助の影は、ただ激しい痙攣けいれんを起こしていた。

「おや、返辞もできなくなつてしまつたね。もう少し、話し残りがあつたものを。じゃ、いろいろお世話をかけたけれど、宅助や、あばよ——」

牡丹刷毛ぼたんばけをもって、しきりと顔をはいていたいろは茶屋のお品しなは、塗りあげた肌を入れ鏡台を片よせると、その出窓をあけて表も見ずに、手斧ちようなげず削りの細格子ほそごうしの間から鬢び盥んだらいの水をサツと撒まいた。

と一緒に、窓の外にたたずんで、立ち話をしていた二人の侍が、

「あ、ひどい！」

両方に飛び別れて、後ろの櫛れんじ子をふりかえった。

「かかりましたか、水が」

「見ろ、これを」

「すみませんでした……」と真つ白に塗った襟えりをのぼして、油よごれの水がちつとばかりはねた侍の藁草履わらぞうりを眼にした。

「……どうも、つい」

「たわけめ、気をつけい！」

と、総髪そうはつの若いほうが睨みつけたが、ここは野暮を嫌う色町でもあり、かたがた軒を並べているいろは茶屋の暖簾口のれんぐちには、脂粉の女の目がちらほら見えるので、

「天堂」

と、一方へ顎あごをしゃくるなり、連れの編笠あみがさをうながして、浜納屋はまなや囲いの軒並を離れてしまった。

そして、後ろ姿を並べ、向う側へ斜めに歩いて行ったかと思うと、また足を止めて、立りつげいがし慶河岸の埋立うめたて辺にたたずみ、まだほかの連れでも待っているようなふうであった。

「いけすかない、ニキビ侍だよ」

首を引つこめるとすぐに、お品は吹きだして、側に寝転んでいる朋輩ほうばいの女へ、

「なんて怖い眼をするんだろう、水ぐらいかかっても、ハラハラする程なお召物じゃあるまいし」

「だって、お前さんが悪いんじゃないか」

「色町の軒下に立って、不景気な顔をしているほうがよッぽど間抜けさ」

「おや、相手が行ってしまつてから、とんでもない鼻ツ張ぱりだ」

「なに、まだ向うの川縁かわづちに立っているんだよ、土左衛門どざえもんでも待っているように」

「どれ」

寝転んでいたほうもムクムク起きて、腹匍はらばいのまま櫛子れんじへ顔を乗せたものだ。これだか

ら女の巢を食う町に無用な顔はして立ち止まれない。

「ね、どっちもギスギスした侍だろう」

とお品が今の鬱憤うつぶんに、朋輩の共鳴を求めると、獄門首ごくもんくびのように櫛子うしこへ顎あごを乗つけた顔は、見当違いなほうへ眼をすえて、

「あら。品ちゃん」と、袂たもとを引ツ張つた。

「ごらんよ、向うから来るのは、お十夜さんじゃない」

昼中ひるなかにお月様でも見つけたような声を出したので、ひよいとそのほうを見ると、なるほど、去年の春から夏の初め頃は、甲比丹かびたんの三次とともに、この界限かいわいによく姿を見せた孫兵衛が、きまじめな顔をして、前を大股に通つて行く。

「あら、素通りはないでしょう」

素頓狂すつとんきやうな声で、馴染なじみの男の足をとめておいて、お品は帯を猫じやらしに振りながら、孫兵衛の側へかけていった。

「や、お品か」

「ずいぶん永いこと姿を見せないで、その上に、涼しい顔で素通りをするつもり？」

「連れが待っているのだ。また会おう」

「いいじやありませんか、連れがいたって」

「そうは行かねえ。ことに近頃は遊びどころの沙汰じゃなくて、ある人物を探すために、毎日血眼ちまなこで歩き廻っているのだ。ウム、お前もうすすは知っている筈だが」

「誰？ 探しているのは」

「法月弦之丞のりつきげんのじょうという者だが、その名前では覚えがなからう。そうだ、ちようど去年の

夏ごろ、この立慶河岸をよく流していた、一節切ひとよぎりの巧みな虚無僧といえは思いだす筈：

…

「あ、川長のお米さんが、たいそう血道をあげたツてね。その虚無僧が、いったいどうしたというんだえ」

「まだほかに二人の奴を、木曾街道で取り逃がしたため、ずいぶん行方をたずねたが、どうしても見つからねえのだ。しかしいろいろな事情から推して、この大阪にまぎれこんだには違いないのだから、ひよつとしてこの辺へでも姿を見せた時には、すぐにこの孫兵衛の所へ知らしてきてくれ。いいか、もし突き止めたら、礼は幾らでもするからな」

「だって私は、お前さんの宿というものを、聞かして貰ったことがないのに」

「俺か。おれは二、三日前から、安治川岸の阿州屋敷に住んでいる」

「阿州屋敷というと？」

「勘の鈍い女だな、阿州屋敷というのは蜂須賀家の下屋敷、そこのお長屋にいるというのよ」

すると、その時、ふたりの側をすりぬけていった往来の女が、蜂須賀と強くひびいた今の言葉に、ハツとしたかのようにふりむいた。

女は、いぼじり巻に、珊瑚の粒をとめている年増だった。しかし足を止めるとすぐに、孫兵衛の鋭い注視がすわったので、そのうろたえた目をお品にそらし、愛嬌よく笑みあつて、何気ないさまに行き過ぎる。

お品へ目で挨拶して行つた珊瑚の女を、孫兵衛はジツと見送っていたが、やがてその年増の姿は、同じ河岸筋の川長の店へ入つていった。

「誰だ！ 今の女は」

こうお品に訊いているところへ、さつきからあなたにいて、待ちくたびれていた旅川周馬と天堂一角が、苦々しげに近づいてきた。そして、

「お十夜、まだ話がすまなのか」

と皮肉れば、一角も尾について、

「売女ばいたじゃないか。そんな者と、往来中で、何をしているのだ」と、唾つばを吐く。

「はい、大きにお世話さま」

孫兵衛を楯たてにしているので、お品はツンと強くなる。それに、さっきのこともあるので、
こういつてやった。

「売女だろうと、あなた方に、買って下さいとは申しませんよ。お十夜さんは私の情人いひひと、
地べたで話をしよう、屋根へ上がって相談をしようとも、お他人様のご心配はいら
ないでしょう」

こういうのが、いわゆる悪女の深ふかなき情けと称するのであろうと、かなり面皮めんぴの厚い孫兵
衛も、ふたりの手前、処女みたいに赤くなつたが、「う……なに、今少々、解げせぬ女につ
いて、問ただい糺ただしているところなんだ」と、テレた顔をまぎらわせる。それを周馬は意地悪
く、

「ほ、解げせぬ女が、どこへ」

と追求して行つた。

「誰といつたつけなあ、今、川長へ入つて行つたやつは？」

「あれは、元あそこの店に、仲居をしていたお吉きちさんという女」

「仲居がどうしたと？」

なをを、ばかばかしいというふうに、一角が嘲笑するので、孫兵衛はいよいよ何かあの女を意味づけなければならなくなった。で、今の挙動を箇条かじょうにして、なおお品を問いつめてゆくと、偶然、かれの口から、そのお吉が、目明し万吉の女房であるということが洩れた。

と——なると、周馬も一角も、にわか顔の筋を突ツ張らせて、無智な女と何気なくしやべることが、今彷徨ほうこうしつつある、大事を占うものと聞かれずにはおられない。

「間違いじゃあるめえな」

と、孫兵衛は女の肩へ手をかけた。

「あの人とは、もう古い顔馴染み、誰が見そこないなんぞするものかね」

「そうか、じゃ、あれが目明し万吉の女房だったか——」

「おい、お十夜」

と、周馬はソツと袖を引いて、お品の側から、二、三步離れながら、一角と共に何かヒソヒソ相談を交わした。

「う、なるほど……」と、うなずいて立ち戻ると、こんどは孫兵衛の口から、何か別な言葉が女のほうへささやかれた。そして、三人はすぐに、お品の入ったいろは茶屋の暖簾口から、家の中へ姿を隠してしまった。

奥では酒となつていているらしいが、お品は時々門へ出てきて、川長のほうを眺めたり、また、そこらにいる朋輩へ、お吉が戻つて行つたかどうかを聞いたりしている。

ふたとき 二一刻程もたつたらう、花は散つても、まだ春の気分は去らないこのあたりに、宵めく絃歌と共に、ぼつぼつ人が雑鬧して来た。

門から門へ浅黄暖簾の裾を覗いて歩く木刀や、船から上がる客や、流しや、辻占売りや、そして艶かしい灯の数々と、春の星とが、どつぷりと黒く澱んだ堀の水によれあつて美しい。

やがて、その夜景の人をかき分けてゆく、孫兵衛たち三人の影がたしかに見えた。しきりと気を配っていたお品が、ただちにそれと、三人へ告げたのだらう、何かの用をすまして、今、川長から出て行つたお吉の後ろ姿が、かれらの十数間前にある。

お吉が、久しぶりに川長を訪ねたのは、何かお米の身についてのことらしかった。そして、今日もお米の母の涙まじりなくり言を、身につまされるほど聞いてきたので、人浪の

中を歩きながら、今もお吉は、そればかりを考えてゆくふうだ。

まもなくお吉は桃谷ももだにの自分の家へ帰り着いていた。

誰もいない家なのに、行燈あんどんだけはどうもついていて、お吉はそれを不思議にも思わないで、帰るとすぐに、女らしく、襷たすきをかけ、途中からさげてきた買物の風呂敷ふろしきをつみを解いて、勝手へ運んだ。

薄暗い流し元で、瀬戸物を洗う音や、米をとぐ音がしばらく聞こえている。裏の小溝こみぞへ白いとき水がひろがった。溝の向うに菜の花ながみえ、その先は桃畑だった。

そして、なおその向うには、藪やぶや、同心屋敷の灯や、城ともみえぬ御番城の巨大な影が、山のように空の半ばなかをふさいでいる。

垣隣りは、城勤めの黒鋤くろくわの者か、足軽のような軽輩けいはいな者の住居すまいらしい。その境の掘井戸へお吉がなにげなく水桶みずおけをさげてゆくと、家の横に三人の侍が、黒い影をたたずませていたので、思わず、胸を騒がせた。

「誰だろう？」

気味の悪さに、手桶をそこへ置いたまま、お吉は流し元へ戻ってきてしまった。男のな

い家——主人あるじのいない留守の家は、ともすると、こんなおびえに襲あられる。

まして、万吉がああいう身の上でいる場合。

「妙な素ぶりの侍が三人まで？ ……今、私の帰るのをつけてきたのかしら」こう思い惑ごつて、身を縮ちぢめたが、気をとりにおしてカタカタと香この物を刻きみ始めた。だが、妙に、動悸どうきがしずまらずにいたので、庖ほう丁ちようの端で小指を切った。

血の出た小指を吸いながら、あわてて座敷へ駈かけこんだお吉は、針箱ひきだしの抽斗ひきだしをかき廻まして、小布こぎれを探たづねているふうだったが、その物音を聞きとめたものらしく、誰か、中二階の腰窓はしごをあけたかと思うと、梯子はしごの上から、

「おばさん」

と呼ぶ声こゑがした。

若々わかしよしい女のあたりをはばかりる声こゑだった。

指こぎれを小布こぎれで巻まきながら、お吉はそれへ上眼うわめを送うつたが、黙もつて、顔かほを振ふつてみせた。

すると、中二階ちゆうにがいの女おんなは、ソツと腰窓はしごの小さな障子しょうじを閉しめかけたが、また思い出したように、前まへよりは低い声こゑをして、

「今帰いまかへつてきたのかえ。そして、家うちの方は？ ……」と訊きいた。

「しつ……」

と、こんどは手を振って、お吉の眼がきつくそれを抑えた。ピタリ、ピタリという無気味な足音が、さつきから家のまわりを廻っていたが、お吉が針箱を置きに立つと一緒に、

「ご免——」

といいながら、上がり口に、ぞろりと三つの影が立ちふさいだ。

「はい」

おそろおそろ手をつくど、

「ここは目明し万吉の家だな」

端にいる編笠あみがさの男がいった。

「はい……」

「お前はその万吉の女房だな」

「さようでございます」

「万吉は帰ってきたか、江戸表から」

「いいえ、まだ戻っておりません。けれどあなたがたは？」とお吉が、三人三様の風態ふうたいをながめて、何者かしらと疑っていると、それには答ええないで、

「何か便りがあつたらう」

「少しも沙汰なしで、只今どこにいることやら、それすら存じておりませぬ」

「嘘をつけ！ 女房であつて、亭主の居所を知らぬという筈はなし、また主であつて、家へ居所を知らせてこないという筈はない。たしかにその万吉は、四、五日前に、いちど此家へ姿を見せたらう、イヤ、たしかにこの大阪へ歸つてゐる訳だ。有態ありていにいえツ」

「でも、只今申し上げたことには、少しも偽りがございませぬもの。それにもう家の良人うちは、出たが最後、居所などを知らせてきた試しのない人でございませぬから」

「こいつめ、あくまで吾々を愚うにしているな」

という畳の上へ、笠をぬいでほうりだして天堂一角、土足のまま跳び上がった、

「泥を吐かねば、こうしてやる。さ、万吉は只今どこに隠れているか、また、法月という虚無僧に旅の女も、一度はここを訪ねたであろう。その居所をいえ、さ、ぬかさぬか」

と、お吉の腕をとつて、いきなり後ろうしろへねじ上げたかと思つと、続けざまに、二ツ三ツ撲りなぐつけた。

女ひとりと見くびつていたので、一角がお吉をぞんぶんにいじめつけている間に、才氣

走つた周馬の眼が、ジロジロと家の中を睨め廻して、これも屋内へ上がりこんでくる。

そして、それが当然に、自分のする役割でもあるかの如く、方々の戸棚をガラガラと開けたかと思うと、行李こつりのふたをあけ、文庫をぶちまけ、果ては、長火鉢から針箱の抽斗ひきだしまで引つかき廻して反古ほごらしいものを片っ端からあらためはじめた。

たちまちにして、つつましやかな世帯の中を屑間屋へ大風が見舞つたようにしてしまつたが、さて、万吉から来たらしい手紙もなし、またその後の消息をうかがうような反古ほごは何ひとつとして見つからないので、周馬が小才こさいも骨折り損となり終ると同時に、一角も、やや張合いを失つて、吾ながら少し大人気おとなげないとも思いなおもしろい。

お十夜はというと、立慶りつげい河岸からお吉をつけてみようと言いだしたのは彼自身なのに、ここへ来ると、横着に腕ぐみをしたまま、二人の狼藉ろうぜきへ、むしろ冷蔑れいべつな目をくれている。

なにも、もちの木坂じやあるまいし、女ひとりを取巻いて、そう大見得を切ることはあるまい。いつも一角ときたひには、田舎いなか剣豪の強がりばかり振り廻すし、周馬はイヤに才智を見せようとする。どっちもきざで鼻持ちがならないのみか、凄味すこみというものが不足だから、これっぱかしのことを糺ただすにもこの騒ぎだ——と見ている態度だ。

「おい、周馬も、一角も、いい加減にしようじゃねえか。万吉も戻っていず、手がかりもねえとしてみれば、いつまでもここに邪々張じゃじゃばっているのも無駄骨だろう。それよりや、またちよいちよいとこの辺を見廻ることにするさ」

「ウム、引き揚げよう」

「お吉」

と、一角は、孫兵衛の尾について門を出ながら、捨すて科ぜり白ふを投げた。

「そちの亭主の万吉なり、また、法月弦之丞なりお綱という女なりが、やがてここへ姿を見せたら、よく申し伝えておけ。たとえばこへ姿をくらしめていようとも、きつと、この三人が、命を貰こらしいに出なおして行くぞ——と。いいか！」

荒つぽく格子こうしを閉めて外へ出ると、三人の中でお十夜らしい声が、
「——年増だが、万吉の女房にしちや、もつたいたいような女じゃねえか。一角に撲られて、キツと、溜ためなみだ涙でこらえていた姿が、なんとも俺にや色つぽく目に映うつった」

「いやな奴だ！」

と、天堂一角の笑い声がする。

「じゃ、お十夜、吾々はひと足先へ安治川屋敷へ帰ってやるから、貴公、これから一人で、

お吉を慰めに戻ってやったらいいではないか」

周馬の猥みだらな声など——ふぎけあいながら、だんだん遠くなつて行つた。

嵐の去つた跡のように、シーンとなつた万吉の留守宅には、狼ろう藉ぜきに取り散らかされたものの中に、お吉が箆か笥んの鑲かんによりかかつて、ほつれ毛もかき上げずに、いつまでも今の口惜しさにおののいていた——が、氣丈な女、泣いてはいない。

「み、みておいで！ 今に……」

真ツ青になつた頬に、一角の打つた手形だけが桃色になつていた。その口惜しさと痛みにおののきながら、こうつぶやいて、お吉が、脚の折れた珊瑚さんごの珠を目の前に見つめていと、

「おばさん……」

静かに呼ぶ者があつて、中二階の梯子はしご段だんに、緋縮緬ひぢりめんの燃える裾すそと、白い女の足もとだけが見えた。

家探しをして行つた周馬や一角が、遠く立ち去つた氣配をみすまして、中二階から、ソツと下へ降りてきたのは、川長のお米よねであつた。

天満てんまの河岸で、やつと、うるさい紐ひもをきつて逃げたお米は、あれからすぐに、お吉の所へ頼たのつてきていた。

太郎助橋で声をかけられた時に素知らぬ顔をして行き過ぎたのも、宅助をまいた後では、お吉の家よりほかに、身を匿かくまつて貫うところはなれど思つていたので、わざと、あはした狂言をしたことで、いわば、今日あるための下したころ心であつた。

「——じゃお嬢さん、私が口添えいたしますから、とにかくお吉と一緒に、川長の実家うちへお戻りなさいましな」

その時、事情を聞いたお吉が、当然に、そういつて勧めたけれど、お米は、どうしても首を振つて、家へ帰ることを肯がえんじない。

阿波へ帰るのもとより死んでも嫌いや——川長へ戻るのも嫌——大津の叔父の家へ行くのも嫌——というお米の意志は、いったいどこに本心をすえているのか分らないが、お吉も捨すておく訳にはゆかない。

「ではまあ、物置みたいな所ですけれど、しばらくの間、狭いのはご辛抱して、家の中二階に遊んでいらつしやいませ。ですけれど、その宅助とかいう仲ちゆうげん間まがそのまま毒が廻まわつて死んででもいればよいが、息を吹つかえしていたら、また血眼になつて、お嬢さんを

探しだそうとしているでしょうから、当分は、決して家の外へ出ないほうがようございませう」

何かへ、一途になつてゐる若い心に、無理な、逆らい立てをしてもよくあるまいと、世馴れたお吉は程よく足止めをしておいて、今日はそれとなく川長へ行つた。そして、かの女の母にその始末を相談してみたのだけれど、お米の母は、大阪へ来ていながら、家へ帰らぬ娘の放埒に腹を立つて、とりなししようもない怒りだった。そのくせ、ともすると、涙まじりになりながら――。

そんな者は子とは思わぬ、もう亡いものと諦める。という母親と、家へ帰るのは嫌だ、と駄々をこねている娘との間に立つ、お吉の心遣いは無意義に帰した。で、しかたがないから、当分は空いている中二階へ世話をしておいて、お米の駄々とわがままとに飽きる日を待つよりほかはないと、道々考えながら戻つてきた――今夜。

計らぬ悪侍が三人までも押しかけてきて、存分に家の中を荒して行つた。しかもそれらの者は、阿波の浪人か家中らしく、良人の万吉の命や、法月弦之丞という者や、お綱とかいう女をつけ狙つている口ぶり。

「また出なおすぞ」

「きつと命をとりに来るぞ」

こんな、凄文句すこもんくも、言い捨てて行つた。

お吉も、女でこそあれ、目明しの女房、よつぽど、かれらのするままに任せまいとは思つたが、中二階には、やはり阿波の家中に事情をもつお米をかく匿まっているし、留守を預かる大事な女の本分をも顧みて、ジツとその狼藉ろうぜきにこらえていた。

「おばさん——」

と今の乱暴を見て中二階から降りてきたお米は、お吉を慰めてやろうとする前に、足の踏み場もなく散らかっている小抽斗こひきだしや反古ほごなどを片づけ始めた。

「お嬢さん、ほうつておいて下さいまし。後で私が始末いたしますから」

「いいよ。私も手伝つてあげるから、お前もその釵かんざしなんか拾つて——気を持ちなおした方がいい。こんな物が散らばっていると、いつまでも腹が立っていてしやうがありやしない」

「ああ、男がいないというものは」

「ほんとに、さびしい、辛いものだね。さだめし口惜しかつたらうと思つて、私も二階で、しみじみと察していたよ。だけど、ひよいと覗のぞいてみると、あの三人の中には、私の知っている天堂一角という者や、お十夜孫兵衛という浪人がいたので、出るには出られず、ど

うなることかと、息を殺しているばかりだった」

「じゃ、あの侍たちを、お嬢様も知っておいでなさいましたか」

「森啓之助などと一緒に、よく川長へ来たことがあるのでね」

「見つからないで俵しあわせでした」

「けれどお前……いったい万吉さんはどうしているの？」

「ああして阿波の侍が、居所を探し廻っている様子をみれば、どこかに、命だけは無事であるのでござんしょう」

「けれど、一人じゃないのだろうか？」

「え……何が」

「法月弦之丞様と一緒に歩いているような口ぶりだったじゃないか。——おばさん、私も今では弦之丞様の素姓や、お前のご亭主の万吉さんが、何をもくろんでいるのかぐらいは、うすうす知っているのだから、その法月さんの居所を、私だけに、そつと教えておくれでないか——ね、後ごしやう生だから」

弦之丞の居所を教えてくださいという、そのお米の様子が、いつになく真剣なのに、お吉は

ひそかに妙に思つて、

「さあ、それは私にも……」

と、口を濁すと、たたみかけて、

「知っているのだろう、え、お吉」

お米の眼が粘りこく追求してくる。

「存じませぬ。——なんでお嬢さんにまで、そんなことを隠しだてするのですか」

「だって、さつき、家探しやさがをして行つた侍たちが、万吉も弦之丞も、たしかに、この大阪へ来ているはずだといつたじゃないか」

「それはそう申しましたが、自分の亭主の居所さえ知らない私が」

「いいえ、そんなことはあるものじゃない。この大阪へ帰つたなら、たとえ人目を忍んでも一度はこの家へ来たに違いがない……。いいよ、お前は私までを、阿波の廻し者だと、疑っているのだから」

「そんな訳ではございませぬ。まったく、お吉の知らないことでございますから」

「いいよ、いいよ……」

また、理由のない駄々をこねて、人困らせをするのかと、お吉がよい程に扱あしらっていると、

すねて後ろ向きになったお米の目に、涙がいつぱいに溜っている。

「お嬢さん」

肩へ手をかけると振り落して、

「いいよ、もうお前に、私の身のことは、相談もしなければ、頼みもしないから……」

「まあ、何をおっしゃるやら、お吉には、よくわけが分りませぬ」

「分つていても、教えてはくれないじゃないか」

「じゃ、その弦之丞様とやらに、いったいお嬢さんは、どういう用があるんですえ」

「用ということもないけれど、私はどうしても、あのお方に、もう一度お目にかからなければならぬんだよ。——それで、その一心で阿波から逃げてきたのじゃあないか」

「じゃ、お嬢さんは、その人に？ ……」

今はお吉にも、お米の本心のあるところが、よく分った。

それにつけても、癆咳ろうがいという病気があるため、わがまま気随きずいにしておいたのが悪かった、と涙まじりに悔くいていた、お米の母の言葉が思い起こされて、お吉は、溜息ためいきをついて、その人の姿を眺めた。

「——そうですか、そういうお心持であつてみれば、なんとかして、お引きあわせして上

げたいのは山々でございませうが」

というと、お米は腹を立てたように、パイと立って、

「もう、お前に心配をかけないから」

中二階へ上がってしまった。

お吉は、ほうっておくつもりで、また、勝手へ来て、膳ぜんごしらえにかかった。それも、自分は川長で馳走になってきているので、お米ひとりのための支度であつた。

「お嬢さん——」

梯子はしごの下から呼んだけれど、答えがない。

「——遅くなつてすみませんでした。御飯をお上がりなさいましな。お好きな物がござい
ますよ」

「……………」

「機嫌をなおして、降りていらつしやい。え、お米さん」

「……………」

「お嫌いや？」

「ア、私かい、私なら今夜は食べたくないから」

それつきり、何をいつても返辞がなかった。

たださえさびしい女住居ずまいな上に、宵には、あんないまわしい乱暴をされ、その後で、慰めてくれる立場のお米がこんどは地位をかえて、妙にすねてしまったので、お吉は立つ瀬のないような寂寥せきりように衝うたれた。

気をまぎらわすため、縫物ぬいものを出して、行燈あんどんの下もとに針を運びはじめたけれど、夜が更けても、上と下との気まずい沈黙がよけいに家の中を陰気にするばかり。そして、滅入めいりがちな心の奥で、

「先せんからわがままなお米さんではあつたけれど、元は癆咳ろうがいを苦しめていて、沈みがちな気性だったのが、わずかの間に、どうしてアア捨鉢しだらくに変わってしまったのだろう。家へ帰りたくないというのも、自分に、目的があるからには違いないが、あのまま自墮落じだらくになつて行つたら、女の一生を末はどうするつもりなのだろう」と、考えたりして、他人事ひとごとながら胸を痛めていると、また不意に、トントントンときつきよりは荒い足どりで、お米がそこへ降りてきた。

黙つて、勝手へよろけてゆくふうなので、

「そら、やつぱりお腹がすいてきたんでしよう」

とお吉が、つとめて、冗談に話しかけると、お米は手桶の中から水柄杓みずびしやくを取って、「おばさん、私、気ばらしに、お酒を飲んだの」

ポツと目を妖艶に赤くして、あられもなく柄杓びしやくへ唇くちを寄せていった。

「えっ、お酒を」

あつけにとられて、お吉は座敷のほうから目をみはっていた。

しどけない姿で、流し元に立って行ったお米は、上気して、襟元まで桜色になっていた。そして手桶から取った柄杓びしやくの水を飲んで、

「……ア、おいしい」

水をはねかして柄杓びしやくを投げこむと、ひよろひよると戻ってきて、梯子段へよりかかった。

「おばさん——」

ただ気を吞まれて自分をみつめているお吉を、そこから冷やかに見て、

「どう？ 私の顔……」

と笑った。

だが、お吉には、笑えなかつた。

「私の顔——ずいぶん赤いだろう……、昼間、そつと買っておいたのさ、自分でね。——
だつて、お前、お酒でも飲まなければ、私、生きていられやしないものねエ」

梯子段へ^{ひじ}肱をのせて、こういう調子なり^{しな}姿態なりが、毒婦のように妖美であつた。

お吉は、それが川長のお米ではないように見えた。

あの、^{うつき}気の弱い、すんなり^や痩せ^{ほそ}細つた容^{かたち}で、^{せき}咳にまじつて出る血を、人目に隠しながら、いつも^{うつき}鬱氣でいたお米——それと目の前の人とがどう考えても、同じだと思われなかつた。
「どうしたの、お吉」

「お嬢さん……」

「よしておくれよ、お嬢さんなんて、私はもう、^{きむすめ}生娘じやない、男のために、さんざんになつた女だよ。おまけに、^{ろうがい}癆咳もちで、長生きのできない、女なんだよ。——だから、いつそもう、したいことを、どんどんして行かなけりや損だと、考えなおしたのさ。いいやね、お前、毒婦になつたつて。——^{あざみ}薊の花だつて、捨てたもんじやないからね、黙つて泣いて、踏みにじられたまま、終つてしまふ野菊より、^{とげ}棘をもつても、口紅をつけてパツと強く生きている^{あざみ}薊のほうだ」

「まあ、お米さんとしたことが」

お吉が、あきれて、何かいおうとするその口を抑えて、

「いいよ、ほうつといておくれ。私は私で、弦之丞様をたずね当てるんだから」

「そのことじゃありませんが、あなたはまあ、体のお弱いくせに、なんだって、飲めもしないお酒をそんなに上がったのですえ？」

「いいじゃないか、私の体だもの」

「せっかく、ご丈夫になりかけているのに」

「よけいなことをいっておくれでない。私が、頼むことも教えてくれないくせにして」

「だって、知らないことを」

「知っていたら、後であと怨むうらよ。いいかえ、わたしは明日あしたから、きつと、その人を探しにかかるつもりなのだから、ね」

酒のせいではあろうが、お吉を睨むように見流して、スルスルと、二階へ裾すそを匍はわせて行った。

そぼそぼとすすり泣くような小雨の音が、晩春の夜をひとしお心細く降ってきた。翌朝も、細かい雨が煙っていて、竹の樋との裂け目から落ちる雫しずくに、勝手の板の間がびしょ濡れ

になつていた。

ゆうべ、寝しなに、ここを固く閉めて床についた筈なのが、開け放しになつていたので、お吉は、起きるとすぐに、あたりのさまを疑つた。みると、この間、齒を洗つて隅においてあつた、高足駄が見えないし、壁に吊るしてある雨傘のうちで、一番新しい^{しじや}洗蛇の目^めがそこに見えない。

「おや？ ……」

中二階へ上がつて、もしやと、そのの襖^{ふすま}をあけてみると、牡丹唐草の赤い蒲団^{ふとん}は敷きばなしになつてあつたが、どこへいったか、お米の姿は見えなかつた。

自棄酒^{やげざけ}をのんで、血の逆^{あが}つたようなことを口走つてはいたが、まさかと、たかをくくつていたお吉は、びつくりして、夜具のまわりや押入れの中を見たが、お米は、もう帰らぬつもりで、すっかり支度をして出て行つたらしく、帯^{おび}揚^{あげ}ひとすじ残つていない。

「いくら若いにして、捨鉢になつてゐるにして、この雨が降つてゐるのに、どこへ……」
お吉は、二階の小窓を開けて外を眺めた。そぼ降る雨の中に、洗蛇^{しじや}の目^めをさして^{あて}的もな
く出て行つたお米の姿が目の前にちらついた。

そして、何の気もなく窓の根元になつた屋根の上をみると、小さな鬢^{びんだらひ}盥^{らい}が出してあ

つて、その中に、唇を拭いた紙と、緋撫子をしばったような、鮮麗な色の血が、あふれるほど吐いてあった。

「あ……」

お吉は、袖口を鼻に当て、怖ろしい、そして悲しむべき、お米の遺物に、寝起きの肌を寒くさせた。

けれど、みつめているうちに、その鮮麗な紅は、病をうつすという恐怖も、穢ないという感じをも、お吉の脳裡からとり去つて、ただ、ひとりの美女が、血みどろに、目ざす所へ、脱けて行つた殻のように見えてきた。

「——今のような場合でなければ、弦之丞様の居所を、ほんとに教えてあげたいのだけけれど」

こうつぶやいて、ほろりとした。

流々 転住
るるてんじゅう

ここに哀れをとどめたのは、紐の男——仲間間の宅助だった。

おのれの使命に、あまり自信をもち過ぎた結果、鼠薬ねずみくすりを舐めさせられて、もろくもお米にまかれてしまったが、どうにか、命だけを取り止めて、ひよろひよると、場末の木賃宿からよろけだしたのが、お米に離れてちようど七日目。

持ちあわせの小遣こづかいも尽きて、もう一晩の旅籠はたごせん銭さえなくなったため、まだヨロつく足をこらえ、時々、渋るように痛む腹をおさえて、青い顔をしながら宿を出た姿は、笑止でもあるが、気の毒でもあった。

「見ていやがれ、阿女あまめ」

腹の渋りだすたびに、口惜しさが新たになってくる。そして、まだ腹の中に残っている鼠薬よやくの余薬に、火でもついてくるように、かれのまつらずい面が歪ゆがんでくる。

「覚えていやがれ、タダおくものか」

こうつぶやいては、宅助、ペツ、ペツ、と生唾なまつばを吐き、目ばかり鋭く動かして、よろと道を泳いだ。

無論お米を見つげだす気で――。

どこをどう歩いたか、何を的あてに探したか、自分でも夢中らしい。なにしろそれから二日の間に、かれの姿はいっそうみじめなものとなって、生霊いきりようのように、ふらりと現れた

のが二軒茶屋——玉造の東口なのである。

大阪から南都へ出る街道口、そこには、伊勢や鳥羽へ立つ旅人の見送りや、生駒の浴湯詣で、奈良の晒布売り、河内の木綿屋、深江の菅笠売りの女などが、茶屋に休んで、猫間川の眺めに渋茶をすすっている。

そこへ来ると、宅助は、空いている床几を目がけて、ドーンと腰をおろしてしまった。ふう……と吐息をつくとき、何か、訳の分らぬことをつぶやいて、こんにやくのように体ぐるみ、フラフラと首を振っていた。

晒布売りの女がクスクスと笑った途端に、あたりに腰を掛けている旅の者が、声をこらえて吹きだした。で——宅助は、初めて自分が、衆目の中を知って、思いだしたように、とつぜん、一回へお辞儀をした。

「へい、皆さん、わっしや女に逃げられてしまったんです、女にね。おまけに、毒を吞まされたので、少しこのウ……頭の芯がフラフラとっていて、向うの山も、この家も、人様の顔も、動いて見えるくらいですから、少し様子がおかしいでしょう……。ですが、狂人じゃございませぬから、笑わないでおくんなさい。可哀そうです、わっしの身になつてごらんませえ、笑いごつちやありませんぜ」

まじめに釈明したのである。

宅助がきまじめで何かいうほど、初めのうちは、みんないっそうおかしがったが、その眼色、顔色がよく分つてくると、誰も笑わなくなつてしまった。

「女といつても、わつしの情婦じやございません、主人から預かつてまいったお部屋様な
んで——。どなたか、ご存じでしたら教えておくんせえ、どうしても、そいつを取つ捕
まえなくちや、国へも帰れませんし、第一わつしの無念がおさまりません」

と、宅助、茶店の中の者をいちいち白い眼で見廻した。

誰も返辞へんじをする者がいない……。

いったいこれは氣狂きちがいかしら、それとも本当に、ああまで一念になつて、女を尋ねてい
るのかしら？ と誰もが心のうちで判断を下しかねている態さまだ。

「そう、そう。女といつたつて、ただ女だけじゃ人様にや分りますまい。その女というの
は、この大阪にれつきとした店を張っている、ある料理屋の娘でして——へい、ですが、
そこには帰りません、とにかくこの三郷さんごうの土地をうろうろしているに違えねえので、年は
二十四、五だろが、それよりはグツと若く見えて、癆咳ろうがい病みですから、色はすきとお
るほど白く、姿は柳腰やなぎこしというやつ。へエ、服装なりですか、服装なりはもちろん襟掛けの袷あわせで、

梅に小紋のおわがら大柄こやなぎじゆすを着、小柳繻子こやなぎじゆすを千鳥に結んでおりました。そいつを尋ねておりますんで——そいつをネ、どうでしょう、誰かの中で、そんな女を見かけた方はいますか、名前はお米という奴で、お米、お米、知っていたら、どうか教えておくんさい」

と、言い終ると、こんどは誰ともなく、ワハハハと笑い出して、それをしおに、茶店中の者が、宅助を余興に見て、腹を抱えてしまった。

あまり真剣にすぎる身振みぶりは、他人ひとの目に滑稽こっけいとなつて映るのに、まして、宅助の尋ねものが美人というので、誰もが笑わずにいられない。宅助もそれまでは、見得みえも何も忘れていたが、こう笑われた上に、誰も相手あつちにしてくれない様子を見ると、いささか間まが悪くなつて、またこそそと茶店を歩きだした。

すると、その中にも、たつた一組、思いがけない知己ちぎがあつて、かれが茶店を離れると一緒についてきた者がある。

「宅助さん。もし、宅助さんたら」

二軒茶屋の床しやうぎ几しやうぎへ茶代を置いて、こういいながら、あわてて、後を追つてきた手代てだいふうの男と、そして、三十がらみの商家の御寮人ごりやうにん。

それは、四国屋のお久良と、手代の新吉だった。

「おーい、お待ちつてば、宅助さん。おーい、森家のお仲間——」

妙に眼ばかりを光らせて、前かがみにあるいていた宅助は、やっとその声に気がついて、
「え？ ……ああ」

気のない顔で立ち止まった。

「これは、四国屋のお内儀さまに新吉さんで」

「どうしたんだい、宅助さん」と、新吉が肩を叩くと、宅助はふらりとよろけて、

「どうにもこうにも、まったく弱ったことができましてね」

「その話は、今向うの茶店で聞きました、森啓之助様の匿し女、お米という人がいなくなつたとか」

「この大阪で、姿を消してしまやがったんで、それを見つげださねえうちは、国元へも帰れません。あ、そして、お店の船は、もう近いうちに阿波へ出ることになりやしようか」

「荷の都合で少し遅れたから、多分、この月の内には出ないだろうよ」

「とすると——五月の中旬なかごろになりますな。じゃ、まだだいぶ間があるから、それまでに、お米の奴を捕まえて、一緒に乗せていただきます。四国屋の船に便乗して帰れというなあ、

初めから、旦那様のおいつけだったので」

「ほかならぬ御家中のお方、船はどうにもご都合をつけますが、そのお米様とやらが、見つからぬうちはお困りですなあ」

「いまましい畜生でさ。だが、宅助の一念でも、きつとそれまでには、お米の奴を取っ捕まえます。ああ、それと新吉さん……まことに面目ねえ頼みだが、少しばかり、当座の小遣錢を合力ごうりきしておくんなさいな……、恥を話すようだけれど、路銀ろぎんはみんなお米のやつが持つていたので、今朝からまだ一粒の御飯も腹に入っていねえありさまなんだ」

「ええ、ようござんすとも」

お久良が気の毒がつて、五、六枚の南なんりょう 簾すだを、手の上へ乗せてやると、宅助の飢うえた心は、銀の色にわくわくとおののいた。

「あ、ありがとうございます」

幾度となく辞儀をした。

そして、思いがけなくありついた南簾なんりょうを懐ふところ中にして、お久良と新吉に別れて行こうとする、猫間川ねこまがわの堤どてに添よって、柔やわい草を踏んで、何か語らいながらこっちへ来る男女がある。

男は——若い浪人である。

形のよい編笠に、黒奉書の袷くろほうしょを着ている。スラリとした中肉に、袷あわせの肌着はだつきがよく、腰には落し目に差した蠟ろうけし消の大小、素足すあしに草履、編笠をうつ向き加減に、女の言葉を聞いていた。

その人に寄り添ってくる道づれは、小股こまたの切れ上がった江戸前の女で、赤縞あかしまの入った唐棧とうざんの襟付きに、チラリと赤い帯揚を覗のぞかせ、やはりはにかましげな目を、草の花にそらしながら歩いていった。

手代の新吉は、それを見ると、あわててお久良の袖そでを引きながら、

「もし、お内儀かみさん」

とあごを指した。

「あのお侍の側にいるお女中は、少し風ふうが変っているが、いつぞや、木曾路で私たちを助けてくれた、あの若い旅のお方じやありませんかね」

「ほんに……」と、お久良も目をみはった。

向うでは何気なく、新吉の側をすれちがって行きそうになるのを、お久良がしかとその人を見届けて、前へ廻って行くなり、ていねいに小腰をかがめた。

「もしや、あの……失礼でございますが」

「はい、私？」

「さようでございます、お見忘れかも存じませぬが」

「ああ、あなたはいつか木曾街道で」

「よい所でお目にかかりました。その節は、私たちが途方に暮れていたところを、ご親切に救っていただきまして、ろくにお礼も申さずお別れ致しましたが、いつもこの新吉と、よそながらお噂ばかりしております」

「なんの、親切だのお礼だと、そうおっしゃられては困ります。ただほんの旅先での面白半分……」

「いいえ、ぜひ一度はお目にかかって、しみじみと、お礼を申し上げたいと思っておりますところ——少し船が遅れましたので、今日は、高津のお詣りから黒門の牡丹園へ廻ってまいりました。これも高津のお宮のおひきあわせでございますよう」

「では、まだ、阿波へは？」

「はい、船の都合で、少し帰りが遅れております」

「とおっしゃると、なんぞ次により便船でもお待ちなさるのでございますか」

「いいえ、手前どもの持ち船で、御城下へゆく積み荷の整ととのい次第に、港を立つ都合になり
ますので」

「そうですか——」と深くうなずいて、

「では、四国屋という、お店の持ち船でござんすね」

と、それに気を惹ひかれて、連れの浪人と目を見あわせたまま、ジツと考えている間に、
その浪人の編笠のうちを覗いた宅助が、あつ、とびつくりして走りかけた。

——と思うと、浪人の、黒奉書の片袖が、乙鳥つばめの羽のようにひるがえって、真まつ白かい腕な
に電撃の速度がついた。

脾腹ひばらへ当身あてみ！ たつた一突き。

「ウウム——」という、不運な宅助、またここでも、駈けだすはずみを横につけて、向
うの草むらへ、逆さかとんぼを打って気絶した。

宅助が氣を失つたのを見すましてから、侍は、おもむろに、突きだしていた拳こぶしを納め、
その指先を笠かさべりにかけて、

「——不ふ作さ法ほう。平ひらに」

と、軽く、またにこやかに、お久良と新吉へ、初めての会釈をする。そして、静かに、笠を払った。

今の、早技はやわざにも似ず、鬘かつらをつけたような五分月代さかやきに、秀麗な眉目の持ち主。あつけにとられてする二人の目札をうけて、どこかに微笑を含んでいる。

「お綱」

と、側にいる唐棧縞とうざんしまの女をみて、

「あれは森啓之助の仲間ちゆうげん、拙者の顔を見知っているゆえ、当身あてみをくれておいたのだが、しかし、四国屋のお内儀、さだめし驚いたことであろう。そなたからわけを話して、その後、例の……船の便乗びんじよう、頼んでみられてはどうか」

「私も、そう思っております」

「是非に、承諾して貰うように」

「はい、ひとつ、話してみることに致しましょう」

「うむ」

と、目くばせ。

法月弦之丞のりつきげんのじようは、猫間川の堤つつみに上つて、往来の人影を見廻した。

木曾の刃圍じんいを切り破つて、お綱と万吉を助けながら、あの夜、からくも裏街道の嶮路けんろへ脱した弦之丞は、それから数日の間に、夜旅を通して大阪表へまぎれて来ていた。

かれが着馴れた普化宗ふけしゅうの三衣えを脱いで、ちようど、花から青葉へ移る衣ころもがえの機しおに、黒奉書の軽い着流しとなつたのも、ひとつは、阿波の詮せん索さくをのがれる当座の変装である。しかし、その仮の着流しが、ひどく弦之丞を色めかして、猫間堤に腰をおろし、四方へ目をやっている様子なども、決して大事を胸に抱いている鋭い武士とは思われない。

「四国屋様——」

お綱は、改まつて、小腰をかがめた。

「はい……」

とは答えたが、その時、お久良も新吉も、少し気味の悪そうなたじろぎをみせて、

「なんぞ、改めて御用でも」

「折入つてあなた様に、お願いをしてみたいと向うにいる連れの者が申します。なんと、お聞きなされて下さいませようか」

「それはもう……」と、お久良は愛嬌のある口元から、鉄漿おはぐろの艶つやを見せて、

「御恩のあるあなた様のこと——自分たちに来れますことなら、何なりと……」

「わずかな御縁につけ入って、あつかましいお願いをするやつと、こうお思いなさるかも
しれませんが」

「どう致しまして、それどころか、私どもこそ、お住居を尋ねても、いちどはお礼に出た
いと存じておりましたくらい。そして、お頼みということとは？」

「お宅様の持ち船が、阿波の国へ帰る時に、乗せていただきたいのでございます」

「えっ、阿波へ？」

「連れば三人、ぜひともあちらへ渡りたい用が」

「ま、お待ちなさいまし」

お久良はこうさえぎりながら、少し道傍へ——堤の裾へ寄って行った。

鴨野の花圃か、牡丹園へ行った戻りでもあるかと思える、派手な町駕が五、六挺、
駕の屋根へ、芍薬の花をみやげに乗せて通り過ぎる。

その白い埃が沈むのを待つて、

「阿波へお渡りなさろうとは、何ぞよほどな御事情でござりますか。ご存じの通り、御領
地塚は、関のお検めがきびしい国で、めったな者は、みんな船から突っ返されます」

「さ、その禁制を知っておりますゆえ、四国屋様のお情けで、積荷の中へでも、隠してい

ただきたい、と思ひまして」

「では、お役人の目をぬすんで」

「ごく内密に、渡りたいのでございます」

「さあ？ ……」

にわかには暗い顔をして、お久良は、当惑そうに、胸へ手を差し入れたまま、しばらく、立ち思案に暮れてしまう。

後ろにいた手代の新吉は、心配そうに、主人の袖へ合図を与えた。秘密に渡海する者をあきないぶね商船に乗せて、それが発覚したとなれば、いうまでもなく、四国屋の身代は、根こそぎからけつしよ闕所になる。木曾街道での恩はあるが、そんなあぶない頼みは引きうけないほうがよろございます——というふうにかれの手が知らせていた。

「どうぞございましょう。四国屋様」

「……………」

お久良は、まだもくねん黙然と、迷っていた。
やわ和らかな微風が、堤のとて緑を撫でてゆく。

「嫌といわば？ ——」

すでに、秘密の一端をもらした以上、不愆ふびんではあるが、お久良と新吉とを、このまま放してやることはなるまい——と、法月弦之丞の眸は、いつのまにか、炯けいとして、一脈の凄す味ごみを帯び、お久良の返辞を、待たぬふうに待ちすましている。

「もとより、こういう無理なお願いをする上は、私たちが、秘密な大望をもつ者ということとは、もうお察しでございましょう」

お綱は、相手の遲疑ちぎする色を見ながら、迫るように、お久良の決意をうながしていった。「けれど、四国屋様」

つとめて、自分の言葉を、平静よそおに装いながら——

「決して、後に、そちら様のご迷惑になるようなことは致しませぬ。よしや、禁制破りが露あわれて、領主の蜂須賀家から、お店みせへ科とががかかりましょうとも、その時こそは、幕府の御威光をかざしても、きつとお救いする道みちが……」

パチンという鐔つばの音に、お綱は、口を迂すべりかけた言葉を切つて、堤つつみの上の弦之丞と眼の光をからませた。

「あの……お綱さん」

お久良は、何か思い切った様子で、やっと顔を上げながら、

「なにしろ、ここでは、深いお話も伺えませぬ。それに、船の荷都合ものびておりますから、それまでの間に、いちど、私どもの寮へおいで下さいませ。その時には、何かとゆるゆる御相談もいたしましょうから」

巧みに、逃げ口上をいって、はずすのではないかと、弦之丞の懸念も、お綱の眼も、そういう相手の顔色を、天眼鏡の向うに置くように見つめたが、お久良の素振には、少しもやましいものがなかった。

「弦之丞さま——」と、お綱は上をふりかえって、「どうしたものでございましょう」

「四国屋のお内儀」

お綱に代って、こんどは、弦之丞が居場所から声をかけた。

「そちらの寮へ来てくれとの言葉、大きにもっともには思われるが、何せい、人目を忍ばねばならぬ吾らの身の上じや。ことに、蜂須賀家には仇も多い……」

こういつて、ジイト、堤の上から見おろした。新吉は、何となく身がすくんで、これは、いよいよ容易なことではないと、生唾をのむ。

「よろしいか」

念を押すと、お久良はさすがに、大家の御寮人らしく、うなずいて、

「お身の上も、およそ」

と、片笑かたくぼでいった。

「それ故、いらざる邪推も廻るといふもの」

「ご無理のないお話でござります。けれども、町人ではござりますが、私とて、四国屋のお久良、御恩人の、あなた方をおびき寄せて、蜂須賀様へ密告しようなどと、そんな、卑怯な、恩知らずではござりませぬ」

「うう、きつとな」

「固く、お誓い致します」

「その一言を信じるぞ」

「はい」

と、明晰めいせきに答えた。

弦之丞は、お久良の性根を見こんで、

「では、四国屋の寮とやら、どちらでござるか、お所を伺っておこう——」と堤とてを下りた。

「どうぞ、お出まし下さいませ。場所は、農人橋のうにんばしの東詰ひがしづめ、そこは四国屋の出店でござ

ざりますが、東堀の浄国寺じょうこくじに添った所が、大阪へ来た時の住居になっております」

「そして、また会う日と時刻は」

「そちら様のご都合のよい時……、したが、昼は人目もありますから、なるべくは夜分のほうが」

「いかにも、では、明後日」

「きつと、お待ち申し上げます」

「ことによると拙者はまいらずに、このお綱と、万吉と申す者が、お邪魔に伺うかもしれぬ」

「あの万吉様なら、木曾路でいろいろな親切にあずかりましたお方、ぜひ、お目にかかりとう存じます。それでは、今日はこれで……」と、新吉をうながして、お久良は、玉たまつく造りの並木のほうへ帰って行った。

弦之丞とお綱は、ふたりの姿がはるかになるまで、そこを動かなかつた。

「法月様——ここでしたか」

と、その時、川の底で呼ぶ声がある。

ふりかえると、猫間川の水が、大きな波紋を描かいて、苦とまをかぶせた小舟が一艘そう、斜ななめに

漕すべつて、水禽みずとりのように寄つてきた。

乗つてきたのは、万吉である。

棹さおをしごいて、水玉を降らし、舳へさきをザツと芦あしへ突つ込むと、無言のまま弦之丞が飛び乗つた——そしてお綱も。

「あぶない……」

と、手をのばした弦之丞の胸へ、お綱はよろけ込むように抱かされた。

苦とまをかぶつた過書舟かしょふねは、気永に、猫間川の淵ふちを上つて行つた。

秋ならば、さだめし、虫聴むしききの風流子ふうりゆうしが、訪れそうな所である。上かみへすすむほど、川幅も狭くなつて、岸の両側から青あお芒あおすすきや千種ちくさの穂が垂れ、万吉の棹さおにあやつられる舟の影が、薄暮の空を映した滑なめらかな川面を、水馬みずまのように漕すべつてゆく。

苦とまの隙間から、白い煙が、静かに揚がつていた。

小さなこんろや土鍋どなべが見える。

お綱の白い手が、舟べりから水へ伸びて、二つ三つの瀬戸物を洗つていた。

ささやかな舟世帯ふなじよたいで、夕餉ゆうげの支度ができるらしい。

かかる間に、舟は玉造村たまつくりむらからズツと奥へ入って、とある土橋の橋杭はしぐいへ結びつく。その頃、もうトツプリと日が暮れて、猫の眸ひとみに似た二日月ふつかつきが、水の深所しんじよに澄んでいた。

「じゃ、弦之丞様、今夜はちよつとお暇をいただいて、家の様子を見たり、また、当座とうざの食い物を少し仕入れてまいりますから——」

舟をもやうと万吉は、こういいながら、陸おかへ上がる支度をしていた。

「お、行くのか——」と苦とまの中から弦之丞。

「わつしが帰るまで、どうぞ、ここを動かないように」

「今夜はここで舟泊ふなじまりじゃ。ゆるゆる用をすましてくるがよい」

「へえ。なにしろ大阪へ来てからも、まだろくろく顔を見せていねえ女房、ことによると今夜あたりは、向うへ、泊りたくなるかもしれないせん」

「うむ、そうしてまいるがよいではないか」

「ありがとうございます」

と万吉、弦之丞のまじめさと、お綱のはにかましげな様子を見くらべて、

「いつそ、今夜ひと晩は、この万吉の帰らねえほうが、そちら様にもご都合がいいかもし

れませんね。え、どうですな、お綱さん——」

と、冗談のようという。お綱は、顔を赤くして、

「なるべく、早く……、ね」

と、いったが、万吉は、その顔を指さして、

「嘘ばツかり……」

と、笑いながら、ひらりと陸^{おか}へ上がってしまった。

そしてまた急に、思い出したようにふりかえって、お綱のほうをジツと見ながら、

「ほんとに、今夜は、帰るまでも、少し遅くなりますから……、どうか、そのつもりで、

後をよろしく……へへへへ。ようがすかい、お綱さん、あの約束をネ」

と、目に物をいわせるそぶり。

あの約束？——と意味ありげに。

それは、駿河台^{するがだい}の墨屋敷^{すみやしき}で、固く、お綱と万吉の間に交わされた、あのことを指し

たのに違いない。あのことは、無論お綱の心の奥に、言いだせずに秘められている、恋である。

だが、弦之丞には、すでに、愛人として、お千絵^{ちえ}様という者がある。それを知っている

万吉の立場では、いかにお綱の心を汲んでも、弦之丞へ向って、今日まで、どうもその二重の恋を取次ぎにくかった。

だから。

今夜は狭い小舟の苦とま、わたしもいないし、人目もなし、ちようどいい水明りに、ちようどいいこの折に。

「あの約束をネ」

と、万吉が、いったのである。

打ち明けてごらんなさい、と粹すいをきかして、目知らせしたのだ。

そこで万吉は、堤どてを上がると土橋を渡つて、スタスタと、宰相山さいしやうやまの木立を目あてに、そこから遠からぬ桃谷ももだにの自分の家へ急いで行つた。

この大阪表へ来て以来、阿波の原土はらしや例の三人組が、手分けをして自分たちの居所を探しているという風聞なので、その詮索せんさくの目をのがれるため、弦之丞、お綱、万吉の三人は、ひそかにこの過書舟の苦とまをかぶつて、浮草のような幾日を過ごしていった。

そして、一方には、阿州屋敷の動静をさぐり、かねては、阿波へ渡るべき、好機会を狙

っている。

ある日は、終日舟から上がらぬこともあるので、それに要る手廻りの品は、いつか、万吉が真夜中に自分の家を叩いて、お吉に、そつと運ばせたものである。

で、ささやかな舟世帯は、三郷の川や掘割を縫つて出沒し、夜は、人目の立たぬ芦の中に、浮寝の鳥と同じ夢を結んでいた。

そうして幾夜を送るうちに、弦之丞も、お綱の生い立ちや、またその性質を、充分に理解してきた。ことに、お綱と世阿弥とが、不可思議な血縁につながれていることを知ってから、彼は、もう阿波へ共に行くことを拒まなかつた。

そして、わずかな間に、深い親しみをもつようになつた。

けれど、それが、恋の進展とはならない。なぜならば、お綱はまだ、胸に秘めているそれをきょうまでの間に、弦之丞へ対して、言葉の端にも、ふれてみたことがないから――。

といつて、お綱の思慕は、人知れずに、募りこそしてきたが、さめてはいない。

こうして、狭い小舟の中に、ひとつに暮らしていればいるほど、悩ましい恋情を理性で伏せることができない。それは、誰としても当然に起こる苦悩であろう。

恋人と共に、苦くの中に隠れて、胸の奥に燃えさかっている恋を語りださずにいることは、その人の側にいるという甘いよろこびを越えて、むしろ、切ない忍苦だった。

ある夜は、木枕をならべ、薄い褥しとねを臥ふしかつぐ五更ごこうに、思わず、指と指のふれあつて、胸をわかすこともあるう。

やすらかに眠るその人の寝顔が怨めしげにみつめられて、明日あしたの朝、瞼まぶたの腫はれの恥かしいこともあるう。

その心持を、万吉はよく知っていた。

だが、万吉にも、弦之丞へそれと口を切ることができないので、ただ、お綱の心根こころねを、蔭かげで、不愍ふびんと思いやつていられるばかり……。

「そりや、お千絵様と、誓ったこともあるだろうが、あのお方は、癒なるかどうか分からない程ほどな、氣狂きくるいという病氣びやうきになつていられるのだから……。」と、こう、自分で理由をつけて、どうかして、お綱にこの恋を遂とげさせてやりたい——とそのたびごとに考えている。

「——決して、それが不倫な恋とはなりやしまい。お千絵様とお綱さんとは、義理ぎよの姉あね妹いには違ちがいが、妹のほうだいが乱心らんしんになつて、弦之丞様との恋が失せてゆくものとすれば、お綱さんがそれに代かつたつて、ちつとも、悪い話わじやねえ。むしろ、まことにけつこ

うなことだろうと思うんだが、なにしろ、法月様ときた日にや、そこになると、まったく融通が利かねえからなあ」

いつも、この二の足で、弦之丞の顔をみると、彼もお綱も、そんなことは、おくびにも出せないのである。

そこで、万吉。

今夜は、お綱に粹を利かせた意味と、実は、自分も、久しく会わない女房のお吉に、ちよつと優しい言葉でもかけてやろうか、という気持から、舟を上がって行つたものだ。

お綱にとつては、粹な万吉の姿へ、両手を合せて拝みたいほどのな機会である。

こんなよい晩なんて、決して、今まで、ありはしない。

けれど、万吉が、そこから抜けてみると、なんとなく取りつく島がなく、せつかくのいい晩が、息ぐるしく、口もきけずに、過ぎてしまひそうだ。

思えば、もう一年前の夏になる。

大津の打出ヶ浜で、あの雷の落ちた晩に、雨宿りをしていた瓦小屋で、ゆくりなくこの人を見て、お綱は初恋を知つた。

片恋のまる一年——、今もまだその恋は片思いかもしれないけれど——。

顧みると、涙のにじむ一年であった。

身をもやつし、心も痩せぬいた、月夜の風邪。

その一念が届いて、やつと今夜のような、たつた二人でいる機会に恵まれてきたのだ――
―と思い躍りながら、かれの心は、まだ昔のはにかみを、どうしても脱けないらしい。

小舟の隅に寄って、もじもじと苦の藁を抜き、抜いてはそれを輪に結んで、水の中に流している。

お綱がそうしていれば、弦之丞もいつまでも黙然として、舟べりへ片肘を乗せ、ジイト、水に映る二日の月を見つめている。

「少し、寒くなりはしませんか……」

やがて、お綱がいった。

「だが、もう晩春、苦を垂れこめては、むし暑かろう」

「そうですねえ」

後を次ぐ言葉を考えながら、いつか、つぎ穂を失いかけて、また胸苦しい沈黙がつづきそうになる。

「あ、今のは」

「何かの？」

「時ほととぎす鳥すではありませんでしたか」

「あれは五位いさぎ鷺」

「まあ」

「えらい違いじや。は、は、は、は」

また話の緒いとぐち口くちを失つて、お綱は顔へ血のほを上せた。

またしばらく、手持ちぶさたに、もじもじしていると、

「お綱、今のうちに、髪をなおしてくれぬか」

と、弦之丞のほうから渡りに舟の頼みが出る。

普化ふけの宗衣しゅうえを着ていれば、髪も切下きりさげでなければならぬが、黒くろ紬つむぎの素す裕あわせを着流はらしして、髪だけがそのままでは、なんとなく気がさすし、そこらをウロついている原土はらしの眼を避ける上にも、容かたちを変えたほうがよかろうと、昨日も話していたことである。

「つい忘れておりました。では、ちよつと梳すきなおして差上げましょう」

「どうか、願いたい」

「おやすいことでございます」

と、自分の黄楊つげの櫛くしを抜いて、弦之丞の側へ寄つたが、高鳴る血のひびきが、その人の肌へ感じられはしまいかと、左の手で、右の袂たもとと乳の辺を軽く抑えた。

「あいにくと、鬢びんだらひ 盥びんがございませんが」

「なに、これでよかろう」

と、かれは背中を向けたまま、無造作に、舟のアカ汲くみを取つて、手を伸ばし、川の水を掬すくつて、お綱の側へ置いた。

「それに鏡も」

「いや、鏡は要いるまい」

「何もかも、ないものだらけでございます。ちようど、あの……新世帯きよよがみたいに」

「流々るるてんじゆう 転てん 住じゆうの舟住居ふなすまい。ここしばらくは、思いがけない、気楽な境きようが界がいになつたもの……」と弦之丞も、ほほ笑えまれる。

四、五枚の苫とまをはねてあるので、細い眉形の月と星明りが、お綱の手元をほのかに見せた。

弦之丞が汲んだアカ柄杓びしやくの水に黄楊つげの鬢櫛びんぐしを濡らして、

「あの……」

まぶしそうに、横顔を覗きこんで、

「月代は、このままにしておきますか」

「浪々して以来の置物、同じ剃るなら、大望を遂げての後、サツパリと落したい」

「では、たぶさだけを」

「何かに結びなおしてくれ」

「はい」

女房のような返辞の為方。

お綱は、自分の声に動悸を打ったが、弦之丞は無関心に、五分月代をかく梳く櫛の歯ざわりに、こころよげな目をふさぐ。

「元結を切りますから、笄でもお貸し下さいまし」

弦之丞は、無言で、刀の小柄を抜いて渡す。根を切つて、それを返し、ふさふさとした黒髪を幾たびも梳いて、女用の松金油は、やや香りが高すぎるが、それを塗つて、形よく銀杏に折り曲げ、キリキリツと元結を巻いて、根締めのを唾を舐めてつける。そして、「どうぞございますか」と、甘えるように、櫛を拭く。

「よかろう。いや、ご苦労であった」

「お気に召さないかもしれませんが」

櫛にからんでいた男の毛を、指の先に巻きながら――

「けれど、たぶさに結んだ髪も、ほんに、よくお似合いなさいますこと」

流し眼に、ジイト、燃ゆる思慕を。

離れがたなく、居なりのまま、精いッぱい、心の一端でも、洩らしてみようとするのだが、眼元ばかり熱くなって、咽喉のどはいたずらに渴かわいてくる。

「ああ……」と、思わず、火のような吐息。

そして、がつくりと片手を落した途端に、お綱のフツサリした黒髪が、投げけるように、男の膝へかぶさった。

弦之丞は、はっと驚いた面持をして、その背中へ、手を迷わせた。

と急に、嵐のように。

「法月さん！……」

こらえぬいていた涙の堰せきを切ってお綱は、強く身をふるわせた。

「か、かんになんして下さい……、私は、泣きたくなりました。泣かして……泣かして」

きようまで、無理にいましめていた理性と羞恥しゆうちを破つて、片恋の涙は、いちどに、男の膝を熱く濡らして、今はもう止め途とどもない。

雨に叩かれた花かとはばかり泣きくずれた女の体が、弦之丞には、どうにもならぬような重さだった。お綱は、泣けるだけ泣いた。心ゆくばかり、泣くよりほかにない恋である。

船はゆるい川波に揺れ振られている……。

男の胸に食い入って、しやくりあげている姿は、やがて、寒気にでも襲われたように、ワナワナとふるえだした。乱れた着物の裾すそから、お綱の足の拇指おやゆびがはみだして見える。——弦之丞は、ギョツとこわばってゆくその白い足の指を見つめたまま、黙思していた。

「どうしたのだ……お綱」

と、弦之丞は、衝うたれた驚きから、やがてさめて、お綱の体を、起こしかけた。

涙に濡れた女の顔は、重たく粘ねばく、やさしい力では、容易にひしとすがった男の膝を離るべくもない。

「泣いていたのでは、理由がわからぬ。わけを申せ、これ」

と、なだめるように訊きかれる言葉が、何とはなしに、またかの女の新しい涙を誘った。

ひとつは、かかる夜舟の泊りに、ひしひしときびしみの迫る、旅愁というような気持も、この夜、お綱のわれとわが恋を、極度に、いとしませたものかもしれない。

人一倍、苦勞もし、世間の浪にもまれているお綱、男を男とも思わぬ筈であるお綱が、不思議と、弦之丞の前にある時は、いつも柔順で無垢むくな一処女であった。恋というものの力が、こうも、女性の性格まで左右するものかと、万吉は、よくひそかにそれを眺めていた。

けれど、お綱は、自分で自分という女が、あぶない女だということを知っている。ひとつ、駒の手綱が狂ったら、どう走ってゆくか分らない。打出ヶ浜で、この人に恋することになかったら、今の苦悩がない代りに、もう抜くことのできない悪事の沼にすべにすべりこんで、女すり掬すり摸すりの兇きよう状じよう持もちを、一生、肩に背負って、十手の先を逃げ歩いていたかもしれない、と思うことはいくたびであった。

しかし、お綱のこうなってきたすべての動機が、恋の力であつたから、その炎は、消ゆべくもない力で、燃えている。弦之丞の側にいればいる程、それが熾烈しれつとなるのは、当然だつた。

もう、お綱は、たえられなくなつた。

片恋の炎を、思慕の人へも、燃え移さずには、たえられない。

今、弦之丞が、優しい言葉で聞いてくれたのを幸いに、鬱結うつけつしていた血の塊りを吐くように、この一年、思いつめていた心のたけを、とぎれとぎれに、打ち明けた。

「さだめし、はしたない女、身の程を知らぬ女と、おさげすみなさいましょう。……ですけど、あの法月さん、わたしは、どうしてもあなたを思いきることができません。かなわぬ恋と知つていながら——なんとという因果な女でござんしょう……」

やっと、膝を離れたが、またガツクリとうつぶした襟えり脚あしが、夕顔のように、ほの白しろい。二日月に隈くまどられた弦之丞の横顔は、鑿のみで彫つたように動かなかつた。眉の毛も動かさないという態さまだつた。なんとという冷たい、無表情な顔だろう。

夕雲流せきうんりゅうの剣のごとく、また、今見る顔のごとく、この人の心もこんなに冷たいのかしら？ ……と試つてみると、その動かない顔の鼻柱のわきを、ポロポロと流れてきた涙の条すじが、月明りに光つてみえた。

「もし、法月さん……」

自分に、与えられた涙を見ると、かの女じよは、もうそれだけで、限りないよろこびにふるえた。

「私が、女だてらに怖ろしい渡世とせいをしていたことは、いつか、万吉さんから話しました。また、私の口からも、幾度となく懺悔ざんげ話ばなしをしてあります。けれど、もうお綱は、きれいに足を洗いました。そして、人並な女になりたいともがいてるのでございます。……助けるとおもって、弦之丞様、どうか、お綱を、お綱を……」あとはいえずに、すがりついた。女が、男にすぎる力は、ある場合に、命がけ以上である。

「——恥かしいのを抑えて、こうお願いするのでございます。あなたはお武家、大番組の御子息様、私の前身は、あられもない女掏摸すすり。それだけでも、きつと、お嫌いやなのは分つております。けれど、お綱は、あなたがなくては、生きておられぬ女なのでございます」

「——その心もちは——」

と、かすかにいつて、弦之丞は、眼がしらの露を払った。

「お分りなされて下さいましたか」

「——分つてはいるが……ああ」

いかにも苦痛な一句。無表情にみえる姿、冷徹にみえる眸、その奥には、麻のごとく、かき乱れているものがある。でなければ、なんで弦之丞の睫毛まつげにあの涙がういてこよう。

かれも、お綱の心情を、よく知っていたのではあるまいか。しかし、江戸表には、いち

ど誓った愛人のお千絵が残っている。弦之丞としては、そのお千絵をまだまったくの廃人とは思っていない。いや、狂気して、ふたたび癒えぬ人であればある程、それを昨日きのうの人に、お綱の恋を、今すぐにうけいれる気にはなれないであろう。

「では……」と、息の弾むはずのを隠して、お綱は弦之丞の側へヒタと寄りついた。もう、羞し恥うちというようなものを超えた懸命である。

「——あなたを思い詰めている私の心、それは、わかっていると、おっしゃるのでございますか」

男の手を握りしめて、お綱の美わしい眸まゆが燃え迫っていった。なんとという純情な眼だろう、強い魅惑だろう、若い、ことに多感な、弦之丞の血をおのかさずにはいない力だ。かれの手は、あやうく、何ものも忘れて、お綱のしなやかな体を抱こうとした。一瞬の煩悩ぼんのうが、くらくらとするばかり、黒い炎をあげてかれの情血をかき乱した。

「わかつてはいます。——だが」

「だが? ……なんでござんす」お綱の手は汗あせに粘ねばって、もがれても、離そうとはしなかった。弦之丞は悩ましい肉感に怖れた。彼の武士的な理性も、強い髪かみの香りと、弱い女の

哀訴に、息づまりそうだった。

「——わかつてはいるが、私はお嫌いなのでございましょう……弦之丞様、ほんとのこと
をいつて下さい、どうか、ほんとのことを」

女は真剣である。必死である。男は恋を生活の一部とするが、女はそれが全生命である
という——恋を観^みる人の言葉のとおりに。

だが？ ……といひ濁した弦之丞の理性も、こう必死に迫ってきたお綱の前には、しど
ろになって、懊^{おう}惱^{のう}の息をついた。

「ほんとのこと！ 弦之丞様」

「……………」

「ほんとのこと、聞かせて下さい。お嫌ならば、お嫌と」

もうお綱の目に涙はない。生死の境に立つような、森^{しんげん}厳^{げん}な覚悟をもって、こう問いつ
める。五体には、ただ恋の血が高い脈を打っているばかりだ。

弦之丞は答えに窮した。こうまでの真心をささげてくる女性に、一時のがれの嘘をいう
ことは、気がすまない。いや、かれの心の奥を割ってみれば、かれの心も、決してお綱を
忌^{いと}つてはいないのだ。むしろ、弦之丞もいつかお綱を好もしくさえ思っている。

まして、いじらしい、熱感な涙を流されれば、かれの若い心も知らず知らずに、恋のつぼに溶かされてくるのが当然だ。けれど、お綱に恋をし、お綱の恋をうけいれていかどうか、その思判力を失わないだけが、弦之丞の無表情に見える内悶の苦しきであり、お綱には、齒がゆい悶えであった。

「思い違いをしてはならぬ。この弦之丞は、決してそちを忌うてはいない」
かれは、遂に、こういつてしまった。

「おお！」ふるえついて——「それは、真実でございませうか」

「真実、わしはそなたを、憎めない」

「う、うれしゅうございます……」

ザブリと、船と苦とが揺すぶれた。

真つ青な川面を、まぐれ波が一条白くよれてゆく。そして、後に風の音があつた。

「しかし、お綱、わたしの言葉もきいてくれ」

「はい……」

お綱は、やさしく男の手にもたれた。

いつか弦之丞は、そのふところへ恋すまじき女を抱えていることには気づかず、つとめ

て、たぎる血をしずめようとした。

「——そなたの心を話されてから打け明けけるは、つらい事情であるが、わしには遠い以前から、誓いをした仲の女によしよう性がある」

「あ……」お綱は不意に、胸へ氷をあてられたように、

「それをおっしやつて下さいますな……そ、その人の名を聞かされれば、私はすぐにも、あなたの側を去らなければなりません」

「では、そなたそれを、知っているか」

お綱は返辞をせずに、激しい痙攣けいれんを起こして、またすすり泣きに泣いていた。

弦之丞とお千絵様との仲は、きょうまで、万吉もかれも、決してお綱に話してなかったことだが、伶俐れいりなお綱は、墨屋敷すみやしき以来の事情を総合して、明らかに、心のうちで、それと察していたのである。

「弦之丞様、なんで、お綱がそれを知らないでおりましよう。思うお人に向つては、女は、怖ろしいほど細い心こまかを配っております。けれど、義理の妹の恋を奪つて、それで、私ひとりしあわが伴せになろうなどは夢にも思やしませんの。ただ、私の恋はある時期まで……。あの時期までの、その、間だけなんでございます……」

嗚咽おえつしながら、常々心にわだかまっていた悩みを、いつぺんにぶちまけた。

「——時節というのも、ほんのわずか。あなたと一緒に阿波へまいって、首尾よく、目的を遂げるまで——。その道づれの間だけ、どうか、お綱のはかない恋を、あなたも妹もゆるして下さい……。そして、その日が来ましたら、私はすべてを忘れましょう。義理の妹に倅せをゆずって、自分ひとりの身をどうなとします……。仲にはさまった身にとれば、ずいぶん無理なと思うでしょうが、あなたが妹と約束のあるお方とは、夢にも、知、知らなかつたお綱ですもの……」

思わずむせばす声こゑが、愁々しゆうしゆうとして腸はらわたを搔かきむしるように、小舟の内からあたりの闇へ洩れて行つた。

するとその時、声を探りながら雑草を払って、ばらばらと水ぎわへ降りてきた六、七人の黒い影。

「それツ、苦くるしみをはねろ！」というと、一人の侍、繫綱もやいを取って舟を引寄せ、あとは各《めいめい》、嵐のように、狭い舳みよしへ躍り込んだ。

さては、阿波の原土はらし！

天堂一角か、お十夜か。

もちの木坂の手なみにもこりず、またもここへ来てうせたな——と、刹那に弦之丞は直覺して、胴まの間の隅に身をかがめ、お綱の体をうしろへかばった。

理りふしん不尽にも、土足のまま、小舟の中へおどり込んできた者たちは、たちまち、苦とまをはねて、川の中へ蹴けち散らかし、

「お改めだ」

「神妙にしろ！」

飛び寄つた一人、弦之丞の片手を取り、ズルズルと前へ引きずりだそうとすると、足をすくわれたか、その影が、猫ねこがえ回りに、舟ふなべり縁を越えて、時ならぬ水音、ザアーツと、一面の飛沫しぶきに、川面かわもを夕立のようにさせた。

「やつー！」

ひるみ立つ影がいつせいに端へよると、船は中心を失つて、覆くつがえりそうに水を噛んだ。

「手ツ、手むかいいたすか！」

鋭い声を放つた者の拳こぶしに、キラリと光つたのは、銀みがきの十手——「東奉行所」と印しるした提灯ちようちんの明りと共に、ズイと迫つて、弦之丞の眼を射た。

「才才？ ……」

唐突の驚きと、常に、それと心を措く思い違いで、ひとりふたりの者を投げたが、さては、阿波の侍ではなかつたかと、弦之丞、少し居すまいをなおしながら、

「これは、東奉行所の御人数でござつたか」

というと、先はいつそう力味りきみを入れて、

「きくまでもないこと。これが見えぬか！」

「しかし、それにしては腑ふに落ちぬ御作法、上役人かみやくにんともある方々が、なんで、吾らの繫く

り舟へ、会釈もなく踏みこみ召された」

得て、お上の者という面つらへ、よい程な扱あしらいをして見せると、ツケ上がりたがるものなの

で、ひとまずさかねじをくれてゆくと、

「こいつ、ひと筋縄ではゆかない奴だ」

と、舌打ちを鳴らした奉行同心、

「面倒くさい、現場は見届けたのだから、構わずにシヨツピいてゆけ」

目配めくばせをして、自分は先に、ヒラリと陸おかへ身を交わすと、残された配下の者が、いちど

にかぶつて、弦之丞とお綱の手をねじあげ――、

「とにかく立てッ！」と、ののしった。

「どこへ？」

腹立たしげに反問すると、

「知れたこつた、東奉行所までまいれというのだ」

「不思議なことを申される。なんで拙者が、東奉行所へ行かねばならぬか」

「四の五の申すな、立て立て」

「イヤ、立たぬ」

「なにッ」

険しい目が、いちどに爛らんとして弦之丞の身に集まる。

「すなおにせぬと、貴様の不為になるばかりだぞ。現場を見られた以上は、言いのがれはなるまい。また、いうことがあるなら、奉行所へ来てほざけ」

「いよいよ心得ぬことを。現場とは何を指しているのか、とんとこのほうには思い寄りが
ない」

「エエ、太ふてぶて々しく白しらを切る浪人だ。女はあのように怖れ入っているのに、思い寄りがな
いとは、人をばかにした奴」

何をいっても耳をかさずに、両手を取って手先の者は、お綱と弦之丞をムリ無態むたいに舟から揚げて、東奉行所へ引つ立てて行こうとする。

たかが七人や八人の手先、斬つて払うになんの手間暇は欠かぬであろうが、阿波以外の奉行所から、つけ狙ねらわれる覚えのない彼であれば、こないささかの間違まちがいごとに、夕雲流をふりかざすのも無用な殺生であるし、また、はなはだおとなげない。ならばできうる限り、尋常に話しあつて、どういう誤解ごか溶けあつてみたい。

こうした場合に、非礼を咎とがめあつたり、いたずらに反抗するのは、愚であると悟つたので、弦之丞は、かれらのなすがままに、土橋の袂たもとまで曳かれてきたが、そこで、

「もう一応お伺いいたすが」

と、手先の中でも、物の分りそうな、同心を顧みて、静かにいった。

「なんじゃ」

「奉行所へまいれとあらば、決して拒みはいたさぬが、われら、夜盗にもあらず、また兇き状ようじょう持もちちでもござらぬ。どういう理由でお引き立てなさるか、その儀だけを承知しいたしたい」

「売女ばいたの狩立てじや」

「えつ、売女の？」

「みれば、貴公も武家ではないか。それくらいなことは、自分でも分っているであろう。身分を隠してくれとか、見遁みのがしてくれとか、神妙に詫びるならとにかく、手先の者を投げこんだり、吾々の改めに楯たてつく口ぶり」

「しばらく」あわててそれをさえぎりながら、

「これはいよいよ解げせぬお言葉。売女とは、何の意味——イヤ誰をさして仰せられるか」
「いわずと知れている、その女じや」

と、したり顔の同心が、お綱の姿を指さしたので、弦之丞はあまり笑止な上役人かみやくにんの勘違いに、笑うまいとしても笑わずにはいられなかった。

「何がおかしい」

とまた、一同が尖り立つのを制して、じつとふたりの姿を見くらべていた同心が、ははア、これは間違とがいかな？ とやや気がついたらしく、

「近頃、岡場所のお取締りがきびしいため、大阪の川筋に苦舟とまぶねをうかべ、江戸の船鰻ふなまん頭じゅうやお千代舟などにならつた密売女かくしばいたが、おびただしい殖え方ふかたをいたしおる。それゆえ

に手を分けて、毎夜、川すじの怪しい舟をあらためているのじやが、只今、この土橋どばしのほとりへまいったところ、下の小舟の苦こまのうちで、甘やかな、女の密め語ささやくことが洩れる……」

「あ、なるほど」

苦笑しながらも、うなずかざるを得なかつた。

「それで、一途いちずに、舟売女ふなばいたと思われましたか」

「場所がらといい、舟のうち。そう思うのが当然でござる」

「いかにも、当然なお話である。しかし、それはまたお間違いでもあつた。素姓は申しかねるが、吾々は江戸表の者、仔細あつて大府たいふの御秘命をうけ、某地へ志す途中、さる藩邸の目を避けるために、わざと苦舟に身を潜ひそめております。決して、浮かれ遊びに夜を更ふかす者でないこと、また、この女が、さような闇の花でないことは、化粧のさま、髪かたちの容かたちなお、つまれぬものは人の品位ひんいというもの、それをよくよくごらんあれば、くどく申すまでもなく、おのずからお疑いはとけるでござろう」と、明白にいつて聞かせると、さすがウトい役人の頭にも、大いにうなずけるところがあつたらしいが、こういう時に、分りきつていながらも、すぐにウンということはすこぶる彼らの尊そんげん厳げんが忌いみ嫌きらうことであつて、

「では、何ぞ、証拠をお持ちか」と、ケチな面目を頑執がんしゅうしてくる。

「明らさまにこう申す態度こそ、何よりの証拠でござる」

「それだけでは困る……ウム、して、あの過書舟かしぶねは、どこで手に入れてまいったな」

「連れの万吉という者が、京橋南詰づめの鯉屋こいやと申す船宿から借りうけましたもの」

「では、そこへ一緒に行つて貰いたい」

「拙者ひとりではよろしかろうな」

「いや、そのお女中も」

お女中といいなおすほどに、誤解であつたことが分つているのに、事面倒な言い草と思つたが、奉行所へゆくよりは幾分かましである、と思いなおして、ふたりは、そこから京橋口まで、思いがけないムダな道を歩くことになつた。

それも、計らぬ災難であつたが、ここに、なお重大な異変に遭遇したのは、ふたりの舟をはずして、久しぶりに、自分の家を覗のぞきに帰つた天満てんまの万吉。

待ちわびているであろうお吉きちの笑くぼが、かれの目先にもうれしくチラついて、墓谷はかだにから寺町横の道の暗さも苦にならなかつたが、とうとう万吉、その夜、おのれに伏せられであつたわなの壺つぼに、まんまと足をかけてしまつた。

禍わざわいはいつも幸福の仮面めんをかぶって待っている。

疾風しつぷう

その後、安治川屋敷あしがわにとぐろを巻いていた天堂、お十夜、旅川の三名は、何らの急報を得てか、十数名の原士をひきつれ、押おツとり刀で桃谷ももだにへ駆け向った。

かねて、弦之丞の居所を知る唯一の手がかりとして、人をもつて万吉の留守宅を見張らせておいたところ、その万吉が今宵こっそりと帰ってきて、中二階のかぼそき灯ともしにお吉と声をひそませているという——早耳。

急げばとて安治川尻しりから、三郷東端さんごうはすれの桃谷村、やや一刻とときはかかったらう。横堀を越えて寺町の区域をぬけると、もう大阪らしい町家の賑わいは影を滅して、幾万坪ともない闇に、数えるほどな遠い灯あかり。

細い二日の月は足元の頼りともならず、所々の古沼や水溜りたまたりが、ただそれと知られるくらい。このあたりに多い瓦焼きの土採り場つちとや植木屋の花畑など、どことも嫌きらいなく突っ切つて、やがて、目ざす家の裏手から、灯かげの洩れる中二階の気配をうかがいます。

裏の水口も表の戸も、固くどぎしてあって、節穴から覗のぞいてみても、万吉の穿物はきものまで用意ぶかく隠してあった。けれど、耳を澄ませば、きわめてかすかな話し声の中二階でしていることはたしかである。

「いるな」

「いる」

「では……」

目と目が険けわしくうなずきあう。

シトシトとその人数、遠く離れてしまったきり、あとはあたりにもその影を見せない。

ややしばらくたつと、中二階から行燈あんどんをさげて、お吉が階下したへ降りてきた。

土間へ降りて、細目に戸を開けた。

そつと顔だけ出して、かれがあたりを見廻した時も、どこにも怪しい人影も気配もない。

「——じゃお前さん、またこれぎり、当分は別れ別れでございますね」

土間へ穿物はきものをそろえる時、お吉の胸に、ひしと、淋しさが迫った。

「ああよ」

万吉は、わざと、銭湯へでも行くように口軽く、

「しばらくは帰らねえ」

「ずいぶん、体だけは、達者にして下さいね」

「心配するなしんぺえってことよ。それよりや、てめえの頭痛もちなでも癒おすがいい、灸きゆうでもすえてな」

「はい」

「じゃ、頼むぜ、留守を」

「あ……あなた」

「忘れ物か」

「………」

「ばかッ」

「………」

「泣くねい！ 縁起でもねえ」

「わ、悪うございました。ツイ」

「笑ってくれ、頼むからよ。笑っておれを出してくんな。お——、弦之丞様が待っておいでなさるだろう」

戸を開けて出ると、ふりかえりもせず、万吉は、また猫間川ねこまがわの岸へ急いで行つた。そして、ふたりが待つている筈の所へ来てみると、そこには、船も繫綱もやつてなければ、お綱と弦之丞の姿も一向見あたらなひ。

「どこへ行つてしまつたんだらう。あれ程、ここを動かさずに、待つていてくれといったのに」

土橋の上に立つて、腕うでぐみをした。

ふと、妙だな？ と思つて見たのは、葭よしの間に投げ散らされてある苦とまの菴むしろ——そして、その時初めて気がつく、綱を解かれた捨小舟すておぶねが、ゆるい猫間川の水に押されて、はるかの下へ流されてゆく。

だが万吉は、それが主ぬしなく漂ただよつて行くものとは思えないので、見つけるとすぐに口へ手を当てて、

「弦之丞様ア」

と呼んでみた。

「おうツ」

と、うしろで、返辞があつた。あツと驚いてふりかえると、抜刀ぬきみを持った天堂と旅川が、

いきなり目前へ跳びかかってきた。

「野郎ッ」

と叫んで、天満の万吉、土橋の欄干を飛び離れたが、その一方には、眼を爛とかがやかして身を屈している者がある。

かれの姿が躍るやいな、待ちかまえていた柄の手は鞆を離れて、横に走ったそばろ助広、ザッと、万吉の腰車を斬った。

「ううツ……」と一声。

人間断末の呻きをすごくあげて、爪先立った万吉の体は、キリキリと弦に締められてゆく弓のように空をつかんで後ろへそる——。

そして、したたかに腰へ食い入った助広の手元へ引かれて、ドーンと、土橋の上へ仰向けにぶツ仆れた。

「斬ッたな！」

と、面を衝いてくる血の香に身をかがめながら、こう賞めたのは周馬である。黒々とあなたに潜んでいた原土と一緒に、命脈の名残をピクリ、ピクリ、とふるわせている万吉の

影をジツとみつめた。

「……ひと太刀だ……」とお十夜は、胸がすいたように、また、その快味の消逸しょういつを惜しむように、斬つた刹那の構えをくずさず、白い刃の肌にギラつく脂あぶらと、のた打つ影とを等分に眺めながら、ニイ……と唇くちをゆがめて笑う。

と——もう天堂一角の方は、それには一顧のいとまも与えず、抜刀ぬきみをあげて川下かわしもを指し、

「あれだ！」と叫んで走りだした。

「あの小舟を追え、あの小舟を！ あれにはたしかに弦之丞が隠れている」

「ウウ、なるほど」

周馬もつりこまれて、橋上にあたふたした。

そこから見ると、今たおお仆れる刹那の前に万吉が、弦之丞様ア——と呼んだ小舟の影、見るまに遠くうねうねと、流れに乗って下つてゆく。

「おお、弦之丞だ、弦之丞だ。お十夜、早くせい」

「あれが？ よしッ」

とどめのかわりに周馬とお十夜がまたひと太刀ずつ万吉へ滅茶めっちゃうちを浴びせた。どこを

かすつたか、周馬の刀はピクリとしたかれの満顔を紅くれないにしてすてて行つた。

「ばかッ。舟の者を追うのに、みんな片岸へばかり駈け出して行ってどうするんだ」

とお十夜は、一角の尻尾しっぽについて、同じ川岸へ向つた周馬をのしりながら、自分は、原士の四、五人を拉らして反対の向う岸へ廻つた。

で——一陣の黒風こくふうは、橋上からふたつに別れ、広からぬ猫間川を中にはさんで水の方かたに添つて疾走する。

「あれだ、あれへゆく船だぞ」

「逃がすなよ」

「見のがすな！ 今夜こそは」

向う河岸がしとこつち河岸がし。

声をかけあわせながら韋駄天いだてんと宙ちゆうを飛ぶ。

駈けるほどに、行くほどに、たちまち小舟に近づいた。けれど——見れば小舟さおに棹さおを取る者はなく、たたみあわせた胴まの苦とまも、半ばむしり取られている狼藉ろうぜきさ。

だが最前、万吉が声をあげて呼んだのに早合点して、てつきりこの舟にいるものと思ひ込んできた面々は、それでもそれが、主ぬしなき空船からぶねとは受け取れなかつた。近づけば近づ

く程、敵が舟底に身を伏せているものと、疑心はさらに暗鬼を生んで、汀へ寄るとも躍りこむ者はなく、出る、自滅しろ、姿を出せ、と兩岸から、空声ばかりで影を追う。

血眼な数多の人間どもと、振りかざす白刃を擲擲して、すこぶる皮肉きわまるものは、人なく水に流れてゆくその空舟——。

「ええ、意気地なしめッ」

先に首尾よく万吉を斃したお十夜は、その氣勢に乗って、舟が岸近く流れよった所を狙つて、向う見ずに単身ポンと身を躍らした。

そして、茫然としたことは、いうまでもない。

心なきものに、からかわれたと知って、腹立ちまぎれに、そこらの物を、手当り次第に河底へほうりこみ、揚句にそれを渡し舟に利用して、兩岸の人数が一ツ所へ集まったのは、この夜、なぶり斬りに逢つた万吉の悲劇と対比して、お話にならない、一場の笑劇。

自然の冷蔑にどやされて、眼がさめてみると、今さらのように、ものものしい引ツさげ刀も、急に気恥かしくなつたか、銘々、ひとまず光り物を鞘におさめて、猫間堤のかげへ寄つた。

で——がっかりした拍子抜けが一致して、誰からともなく、夜露をおぼえる土手草の上

へ、ごろごろと転がりだし、ムダに疲れた足を東西南北に向けあつてしていると――、

「もし……助けてやっておくんないさ」

あわれな声をだして、露ッぽい雑草の中からかまきりみたいに、ゴソゴソと匍はいだしてくる男がある。

「なんだ、こいつは？」

と思う好奇心が、むくむくと一回の膝を起こして、草むらの間から匍はつてくる男を見ていた。

すると、天堂一角が、いきなり、前に足を投げだしているひとりの原土はらしをまたいで、その男の側へすすみ、穢むさいものでもつまむように、グイと襟えりがみを引き起こした。

「こりや」

「へい」

「貴様は、お国元ちゆうげんにいる、森啓之助の仲間ちゆうげんではないか」

「あ。よくご存じで……」

「宅助たくすけだな」

「左様でございます、じや、あなた様も阿波の……」と、怖る怖る見あげたが、びっくりしたように手をふるわせて、

「やあ、天堂様でございますか」

「どうした態だ。また悪いことでもしおつて、啓之助の屋敷から追ン出されでもしたのか」
 「情けないことをおっしゃいます。世の中に宅助ほど、御主人へ忠義な者はないつもりで……。ハイ、まったく私は御奉公のためにこうなりました。忠義というのもやり過ぎるのは善し悪しで——どうか、助けてやっておくんなさい」

いかにも、物乞いじみている調子に、向うで眺めている者も一角も、思わず苦笑いを洩らしたが、宅助は必死だった。

「嘘ではございません、天堂様」

「嘘とは思わんが、どういう事情じや」

「ひと口に申しますと、実はその、ただし、これは内緒でございますが」

「かまわん、啓之助のことなら、秘密を守つてやるから、話してみろ」

「昨年、殿様がお帰りの時に、啓之助様がソツと、ある女を、脇船の底へ隠して、お国表へ、持つて帰りました。イエ、連れて帰りましたんで」

「ふん……そして？」

「ところが、そのお妾めかけが、旦那の甘いのにツケ上がって、すっかりやんちゃになりやした。今考えると、半分はふてくされていやがったんで、なんでも、一度は大阪へ帰してくれ、とこういつてききません」

「ははあ。すると、その女と申すのは、川長の娘ではないか」

「旦那も、ご承知でいらつしやいますか」

「大阪話づめでいた頃には、足繁く、啓之助が通ったものだ」

「それじゃスツカリ申し上げます。お察しの通り、女はそのお米よねなんで」

「で、大阪へやってきたのか」

「わつしはお妾の鬼目付おにめつけで、一緒についてまいりました。ところが旦那、太え女ふてもあるもんで、この人のいい宅助に鼠薬ねずみくすりを舐めさせやがって、プイと、途中で姿を隠してしまいました」

「それは、無理もない話だ」

「ですが、それじゃ宅助が、旦那へ顔向けがなりません。それに、毒を吞ませやがったのも業腹べごうはらなんで、実は、お恥かしい話ですが、小遣銭こづかいせんも空ツぼのため、この二日ほどは

食わず飲まずで、お米のやつを、探し歩いておりました。——すると、悪い時にや悪いところが重なるもんで、今日はやつとこの近くで、四国屋の御寮人様に逢い、いくらか、当座のお小遣いがありついたらと思うと、そこへ、ぶらりと来た奴が、……エエト……そうだ、法月弦之丞という、いつか大津の時雨堂しぐれどうに潜もぐっていた虚無僧なんで」

「なに、弦之丞に逢った？」

おうむ返しにいつて、向うの土手にゴロついていた者が、いつせいに起き上がって来たから、宅助は尻込みしりごみして、あとの言葉を忘れ、ただ目ばかりをしばたたいている。

「どこで逢った？」

「連れはいたか」

「どんな姿で——どう向ってまいった？」

八方から矢のような質問が降るので、これでは当人も答えられまいと、一同の言葉をとめて、お十夜と周馬だけが側へしやがみながら、

「嘘や人違いではあるまいな」と駄目を押した。

「たしかに、弦之丞でございました」

「して、それから、いかがいたした」

「さあ、その後に、また大変なことがあるんでございませが……アアいけねえ、なにしろ旦那、腹が空すきぬいているもんですから、胃袋がクウクウ泣いて、もう、これ以上は、お話ができません」

「意気地のないことをいうな……どうした、それから」

「駄目です、ああ、もう一口ものをいっても目が廻りそうだ」

「しようなない奴じゃ」と、一角も、ぜひなく引つつかんでいた襟えりがみを離して、周囲の者を見廻しながら、

「誰か、何ぞ、こいつにくれる、食い物をお持ちあわせはないか」

と訊たずねると、原土の中のひとり、

「短銃の火薬は用意してまいったが、あいにくと、食い物の用意はござらん」と答えた。

みんなは笑ったが、宅助の胃袋は涙をながした。

芍しゃく薬やくの駕かご

源内の誰に縫ぬわせし袷あわせかな

その晩、真言しんごん坂ざかの上の、俳諧はいかい師し荷亭かていの宅では運座うんざがあつた。

高津こうつづの宮の森が見える閑素な八畳間に、四、五人の客が、ささやかな集まりをして、めいめいが筆墨を前にし、しずかに句を作つていた。

みんな、口もきかずに、苦吟くぎんしている。

障子紙を細く裁たつて、短冊たんざくに代えた紙きれへ、誰かが、こんな句を、いたずらに書く。いたずらにふと書いた句だが、ひとりで黙笑しているのも惜しく、黙つて隣の者へ示すと、その人も、黙笑して、興があつた。

見ると向うに、平賀源内がいる。細い顎あごへ片手をかけて、自分が句に作られているのは知らずに、しきりに短冊を睨にらんでいた。

まだ独身で、九条村の百姓家に間借りをしている医書生で、夏は唐人扇子とうじんせんすをパチつかせ、冬はぼろ隠しの十徳を着て、飄々ひょうひょうこ乎ことしている源内が、仕立ておろしの初はつ袷あわせをつけて、いつになくこぎつぱりしていたのは、季題はずれのように衆目をひいた。けれど、のちには、この一介の医師が、世間の好奇心をしきりにあおつて、鴻こうの池いけや大名屋敷へ取

り入って、花柳界へ源内櫛げんないぐしを流行はやらせてみせたり、物産会をやり舶載物はくさいものの売りひろめを試みたりなどして、おそろしい金持になった。

そこで、「源内は俳句よりも金儲けのほうがうまい」と、のちには人がいったものだが、まだ、そうならない時代のかれは、運座へ来ても器用な句を作って、俳諧ざうきなんて、造作ぞうさくもないもんだ……というような顔をしていた。

で……さっきのいたずら詠よみの句屑くずが、どうかした拍子に、自分のほうへ飛んできたのに気がついて、ふと、その句を読むと、

「やあ、これはひどい」

と、磊落らいらくに笑った。

そして、上五かみだけを書きかけていた短冊を下へ置いて、

「この源内にだって、親切を運ぶ女が、ひとりや半分ぐらい、ないことはありません。今の句は、ちとひど過ぎる」

と、味噌せんべいを一枚とつて番茶を注ぎながら食べはじめた。

「そうですとも」

柳りゅうじよ 絮じよという新地の芸妓屋げいこやの主あるじが、相槌あいづちを打った。

「お医者さんですからな、役得やくとくというものがありません。若い美人が診みて貰もらいに来たら、そこで、ほら、あとは源内流に、いわずもがなのことになるんで……」

「は、は、は。なおいけない」

と源内は、みんなと一緒に、しばらく諧かいぎやく諷ふうを交かわしていたが、今の言葉の端から、かれはフイとお米の姿を思い浮かべていた。

実は今夜——かれがこの運座へ誘われて、九条村を出てこようとする、その途中で、久しく姿を見なかった、川長のお米に出逢であった。

女中も連れずに、九条の渡船わたしのほつりを、しょんぼりと歩いてきた。

——先生、血を吐きました。

とお米は細い声でいった。そして、

——わたし、どうしても、まだ死にたくはありません。それで、またお薬をいただきました。——わたし、どうしても、まだ死にたくはありません。それで、またお薬をいただきました。……

源内は、そこから戻つては、句会へ遅くなるし、急病ではないことと思つて、明日あしたなら宅におります、といつて別れてしまった。

そのお米の姿を目に描えがいた。

非常に好い句想をとらえたように、かれは、にわかにならまた筆と短冊を取りあげて、それへ、

癆咳ろうがいの――

と五文字だけを書いてみたが、こう冠かぶせてしまうと、どうも、陰惨な連想ばかりが湧いて、自分でも、俳味に遠い不快をおぼえたらしく、バタバタと塗り消して、短冊を丸めてしまった。

そして、ただちに次の紙へ、

やがて死ぬ――

と書きなおして、下の句を考えていると、そこへ、たけのこめし 筍飯にすまし汁をそえた、遅い夜食が運ばれてくる。癆咳の女の姿と、食欲をそそる筍飯の香りを、頭の中に錯さく綜そうさせながら、源内はサラサラと後をつけた。

やがて死ぬやまいつくころも病美し衣がえ

これでいいと、ひとりで読みなおして、ひとりで悦えつに入っていた。

運座の帰りは遅いものときまっているが、その晩も例に洩れないで、源内や四、五人の
 俳友たちが、真言坂をだらだらと降りてきたのは、かなり夜更けであった。

源内と柳絮とは、荷亭の宅できつて貰った芍薬の花をブラさげていた。

その中で、狂風という男は、蔵屋敷へ勤める遊蕩家で、これからまだ明るい街へ
 行つて、たつぷりと夜を更かすつもりでいる。まじめなのは黙蛙堂、猫間川の近くに住
 んでいる彫刻師だが、遊蕩家の狂風が、今頃からあんなほうへ帰ると辻斬りに逢うぞ、お
 れと一緒に来たまえ——と誘惑するのをていねいに断つて、家内がやかましゆうございま
 すから、とお先にスタスタと失礼して行つた。

「あんなのはないね」

と狂風は面白がった。

高津の宮の鳥居を出ると、坂下に、駕鉄という油障子が灯っている。もう自分だけ浮
 かれ機嫌になつている狂風が、

「三挺！ 三挺！」

と叩き起こした。

「駕ですか。駕ですか」

と、わらじばきのまま、うたた寝をしていた駕かきが、土間の葭簀よしずをめくって飛びだしてくると、

「舟はあるまい」

と、またからかった。

「どちらへ」

「三人別々だよ」

源内は貰ってきた芍薬しやくやくのきり花を駕の屋根へ乗せて、

「わしは、九条村へやって貰う」

糸しんの蠟燭ろうそくが、駕の棒鼻へブラさがると、三ツの提灯ちようちんが黄色い明りを浮かして、

一、二町ほどひとつ道を流れだしたが、そのうちに、四ツ辻から、三方へ別れ別れになつて行く。

夜更よふけの駕ほど快いものはない。

雑音もなく埃ほこりも立たない大通りを、揺られながらウツトリともたれて、ズンズン流れてゆく地の上を細目に見ていると、駕屋の足音も一種の諧調かいちょうをもって気持よく聞こえる。

四ツ手でかご駕月の都をさして駈け

柳やなぎ樽たるにこんな句があつたことを源内は思い出していた。

「旦那」

走りながら後あと棒ぼうがいった。

「なんだ？」

「時ほととぎす鳥なが啼なきやしたぜ」

「うむ……」

時鳥は九条村でも珍らしくないから、ツイそつけない返辞をしたが、武骨な駕屋が、せつかく教えてくれた風流心に対して、悪かったような気がする。

それから、ほととぎす、ほととぎす、と考えるともなく句を練っていると——やがてのこと。

後ろのほうから、何者かが声を張りあげて、

「おおーい、おうい、その駕——」

呼んでは駈け、呼んでは駈けてくる者がある。

「なんだい、後棒」

「いけねえ、変なやつが飛んできやがる」

どうせ、時鳥を教えたくらいな駕屋だから、善良で弱いのはきまっている。少し、足なみが揃わなくなった。

「旦那、どうしましょう」

「ちよつと、駕を降ろしてごらん」

「だって」

「なに、聞き覚えのある声なのだから」

まごまごしている間に、後ろうしろの者は、宙を飛ぶように駈けてきて、源内の姿を見るより、息をぜいぜいいわせながら、言葉は半分、手ばかり振って、こういった。

「先生……先生。は、早く、その駕のまんま、後あとへ帰って下さい、後——へ。急がないと、とてもだめです。なにしろ、めちやめちやにやられているんで、血が、血が……」

誰かと思うと、先に別れていった黙蛙堂もくあどう。

どんな大変に遭遇したのか、わけも呑みこめないうちに、独り合点をして、またもと来

たほうへ駈け戻った。

わけをただ糾たしている暇もない急せき方なので、源内は、とにかく駕かえを回かえして、先へ急いでゆくもくあじう黙蛙堂もくあじうについて行いった。

高津の前を越えても、まだ走り続けるので、いったいどこまで行くのかと思おもっていると、
龍珠院りゆうじゆいんの外の外を過ぎてやがて一面の草原。

野中の観音と、産湯清水うぶゆしみずの別れ道を東へとつて来た様子だが、なおも止まろうとはしない。

この平地へ出てから、低く傾いた二日の月が、ほのかに照らしていることに気がついた。そして、駕の中から野末のすえをすかしてみると、すぐそこに、一条の流れが、銀流のように見える。

源内は驚いたさまで、

「猫間川じゃないか、ここは？」

と訊ねたが、黙蛙堂は耳に入らないで、駕屋が、

「小橋おぼせと玉造村たまつくりむらの間です」と答えた。

「おい、おい、黙蛙堂さん、いったいどこまで行くのだい？」と、源内が、たまらなくなつてこう叫ぶと、黙蛙堂は、やつとその川べりの、土橋の袂たもとに立ち止まって、

「こ、ここでもいいんです」

と息をはずませた。

駕を降りてみると、源内すぐにその傍かたわらに仆れている男の影が目についた。

「や、斬られている」

駕屋は、草鞋わらじの底へ粘ねばった血を、気味悪そうにすかしている。

「わしを呼び回かえしに来る前に、お前さんが血止めをしておいたかね」

「なんしろ、ここまで来ると、この人が仆れていたんで、どうしていいか分かりませんでしたが、袖や帯を引つ裂さいて、血の出る所だけはギリギリ縛しばっておきましたので」

「そうか。どれ」

と、源内は、もうよけいな事情などを聞いていなかった。両りょう肌はだを脱いで帯のうしろへたくし上げ、抱きつくように寄つて、血まみれな怪我けが人の傷を診みにかかった。

「あ……オオ」

そのとたんに、胆きもを潰つぶしたような声を出したので、黙蛙堂もハツとしてどもりながら小

腰をかがめ、

「ど、どうしました？」

と、のぞ覗きこむ。

「これは、わしの知っている者で、天満の万吉という男」

「えッ、ご存じの方ですって」

「先頃、木曾の旅先で、会ったばかりだが……どうしたということだ。ア……やっぱり阿

波の」

思わず、ぶるツと、胴ぶるいが出そうになったが、口をつぐんで、懸命に手当てをはじめた。

「まだ、息が、ございますか」

「ない！」

「じゃあ、もう駄目なんで？」

「そうともいえない」

「水を掬すくってきて、吞ませましようか」

「とんでもないこツた」

「腰ですか、斬られているのは」

「一番の深傷ふかではここだ。けれど、この深傷は大したことにはなるまい」

袂たもと落しという懐中袋から、針を出して、返辞をしながらグングンと傷口を縫って行

った。

長崎じこみの技わざだけあって、そのテキパキとした始末と早さには見ている者が感嘆させられる。源内はわき目もふらずに、次に、万吉の顔の血を押し拭ぬぐった。

満顔朱に見えたところから推おして、顔面のどこかを斬られているなど思えたが、そこには太刀傷がなくて肩先の返り血だった。

そこを縫いにかかると、源内が自信のある声で、

「こりや、助かる！」

といいきった。

黙蛙堂はホツとして、自分が宙を飛んで源内を呼び戻してきたことが、徒勞でなかったのをよろこんだ。

黙蛙堂の家は、川向うの近くなので、すぐに、万吉はそこへ運ばれた。そして、源内の懸命な手当ても、夜ツびて、離れることがなかった。

明方に近づいた頃、かれは、かすかに意識づいた万吉の容態を見ると、もう大丈夫と見
きわめをつけて、夜来の疲れもいとわずに、ゆうべの駕で、九条村へ、薬を取りに帰って
行つた。

菱しほんだ芍しゃくやく薬を駕の屋根へのせて、こくり、こくり、と居眠りをしながら、朝の町を
担になわれてきた源内は、野中の観音で、狐にでも化かされてきたかと、往来の者にふりかえ
られた。

起こされて、びっくりしてみると、いつか、九条村の家へ着いている。

「ホイ、ご苦労だった」

と、渋しぶい目をこすりながら、柴折しおりを開けて中へはいると、そこには、きのう途中で帰し
た川長のお米が、ひとりで、ぽつねんと待つていた。

待ちくたびれていたらしいが、源内の姿を見ると、お米は、愛あい嬌きょうのいい顔をして、

「先生、お留守でしたが、どうせ朝のことですから、じきにお帰りであろうと思つて」

「はあ」

と、源内は、だるそうに、座敷へ上がつて、

「——待つておいでたのか」

「ええ、きのうもムダ足をいたしましたから」

「そうそう、昨日はとんだ失礼を」

「こんな早くから、どちらへおいででございました。先生も、なかなか隅^{すみ}へおけませんのね」

「朝帰りではございません、妙に気を廻されては困る」

「でも、ずいぶん眠そうな顔じゃございませんか。ホ、ホ、ホ、ホ」

おや、この娘は、いつのまにかたいそう男に馴れてきている。すっかり、羞恥^{しゆううち}というものが取れてしまつて、あべこべに男のはにかみを眺めようとしている——と源内はちよつと驚いた。

すると、お米は笑つたあとで、

「まあ……」

と、大袈裟^{おおげさ}に目をみはりながら後ずさつて、

「血がついておりますよ、先生」

「どこに？」

と手をあげると一緒に、かれも、

「やあ、これは」と、にわかには狼狽しながら、自分の袖や裾すそを撫で廻した。

「どうなすつたのでございます」

「なアに。実はゆうべ、運座の帰りに手当てをしてやった男の血だよ、どうして斬られたのか、下手人も分らないが、万吉といって、少し知った男だから、捨ててもおけず、とうとう徹夜でさ、朝帰りという次第。もつとも、血は赤いから、色つぽくないことはないが、どうも、今朝はなはだ眠い」

と、衣服を着かえて、手洗ちようずを使い始めた。

お米はその間に、ひとりで何か考えていたが、

「先生、その万吉というのは、もしやあの天満てんまにいた、目明しじやありませんか」

「よくご存じだね」

「あ、じゃ、やつぱりその人なんですか——その万吉さんが斬り殺されたんですか」

「なに、命はわしがうけあつてきたよ。しかし、かすり傷じやないから、ちよつとやそつとでは癒なおらない」

聞いているうちに、お米はソワソワとして、容態を話すことや、薬のことも忘れたよう

に、せかせかして、

「そして、その弦之丞様は、今、どこにいるのでございましょう」

「エ？ 弦之丞様って、そりや何だい」

「ア、イイエ……あの、万吉さんのことなので」と、ひとりで言い間違えて、ボツと顔を赧める態を見つめながら、源内は、

「いる所を？」

「はい。教えて下さいませ」

「知らない」

ばかにそツけなく首を振ってしまった。

そして、さらに怪訝けげんそうに、なんだってこの娘が、こうソワソワとするのか、急に居所を知りたがるのか、と不思議にたえない気がした。

腑ふに落ちないうちは、話さぬほうが無事だと思ったので、後はよい程に話をボカしてしまつたので、お米も取りつきようがない。

薬ができる、源内は木枕を取って横になり、お米は礼をいって外へ出た。

だが、かの女じよは萎なえかけた自分の体を、その薬で癒いやそうとする希望より強く、今の話

が胸の底にいろいろな想像の渦うずを起こしていた。

万吉と弦之丞とが、一緒になつて、この大阪へ来ているということは、お吉の口裏や、いつか、天堂一角が万吉の留守宅を探りに来た時の言葉でも分つている。だから、その万吉に逢いさえすれば、もう、弦之丞の居所を知つたも同じわけである。

こう考えながら、いつか、本田堤づつみの辺までくると、とある居酒屋の軒下に、一挺の駕かこが置いてあつた。

駕の屋根に、源内も忘れ、駕屋も忘れてしまつた芍薬しゃくやくの花が、露もひからびて乗せてある。それを見るとお米は、さつきの見覚えを思いだして、

「あ、あの駕屋さんに聞けば、分るに違いない」と、居酒屋の中を覗のぞいてみた。

遠眼鏡

表鳥居うへの参詣道さんけいみちをまっすぐに上のぼつて、岩船山いわふねの丘、高津の宮の社頭に立つてみると、浪華ななわの町まちの藁いらかの上に朝の空気が澄みきつて、島の内から安治川辺の帆柱の林の向うに、武む

庫の山影も、行くところまで見晴らされる。

石段へかかると、女は日傘を畳み、男は菅笠の紐を解いて、清々しい新緑を仰いだ。参詣をすまして戻つてゆく御寮人の手には、名産の花塩がたいがい提げられている。

そのゆるい足音が流れてゆく石畳の道を、目に立つ自来也鞆と、十夜頭巾と、異風な総髪が、大股に、肩で風を切つて行つた。

お供はひとり、仲間の宅助。

三人の後について、これもせかせかと石段を踏み上つた。

なんのことはない、この四人だけは、真つ向に、神殿へ向つて楯を突きに来たような歩き方だ。だが、上までのぼりきると、拝殿のほうには一瞥も与えないで、額の汗を押し拭つている。神の存在を認めないのではなく、この人々には、落ちついて、神さびた気韻に浴する余裕がないのだ——とすれ違つた老人が、あきれたようにつぶやいた。

「今歩いて来た猫間川の方は、あれに見える流れだろうか」

「いや、もつと東のほうになるだろう」

「ずいぶん、歩いたな。御両所、腹は減らないか」

「うむ。だがこの辺には、何もあるまい」

「あります——」と宅助が口を入れた。

「田楽か」

「いいえ、湯どうふ屋というんで、高津の名物。たいがいなものはそこで休みます」

「葉桜頃になって、湯豆腐は少し感服しないな、何かほかに茶屋はないか」

「看板は湯どうふでも、木の芽料理、焼蛤、ちよつと飲めるようになっております」

「まあよいわ、朝からぜいたく好みでもあるまい。どこだそこは？」

「舞台のそばでございます」

宅助のあとについて、三人は境内の湯どうふ屋へ入って行った。まだ午前だが、掛座

敷にも床几にも客がいつぱいだ。そこを縫って、奥の張出し、見晴らしの小座敷に席を

とつた。

「腸に沁みるようだ」

天堂一角は、朝酒の一杯に舌鼓をうって、飲みほしながら、

「しかし、ゆうべは、痛快であった」

と、それを、お十夜へさした。

「まだまだ、あんなことじや気がすまねえ」

孫兵衛はホ口にがさかずきな杯を舐めて、

「万吉をぶつ倒したぐらいで、いい気持になっちゃいられない。肝腎かんじんなやつは弦之丞とお綱だ。仕事はこれから骨が折れるよ」

「さあ、その弦之丞とお綱を見つけるのが、これからの問題だが……今思うと、昨夜、万吉の死骸を捨て帰ったのは、かえすがえすも吾々のぬかりだった」

と、周馬は、枝豆を口へ弾はじきこむ。

「なぜ？」

「あの死骸をおとりににして、弦之丞を待ち伏せしていれば、必ず引ツかかってきたに違いない。その証拠には、今朝あの土橋へ行ってみれば、もう彼の死骸が片づけられていたではないか」

「下司げすの智慧は後からで、それならなぜ、人も乗っていない空舟からぶねをお手前、あわてて、追い駈けて行つたんだ」

「あれは一角が真つ先に調子づけたのだ。一角が悪いよ」

「あげ足をとるな。たまには犀眼さいがんにも見間違えがある」

「まあいい、またこんな所で、泥のなすりあいから仲間割れをしてくれるな。宅助の話に

よれば、なんでも、猫間堤で四国屋の内儀と弦之丞とお綱とが行き逢った時、非常に親しい様子だったというから、こんどは手をかえて、その四国屋のお久良とかいいう者を詮議してみりや分るだろう」

「ウム、拙者もそう考えているが……その時に弦之丞が、宅助へ当身をくれたということが、どうもよく呑みこめない」

「それは、お久良と密談をする必要があつたからであろう」

「しかし、お久良は阿波の者だし、四国屋もまた蜂須賀家の御用商人——どうして彼らと懇意なのか、それが不審だ」

「ここでは三人が、弦之丞の所在をさぐる擬議がてら、しきりと銚子の数を殖やしているが、誰も、宅助の存在を認めて、一杯つかわそうとはいってくれない。

ゆうべ安治川屋敷へ連れてゆかれて、飢えは充分に救われたけれど、仲間間の宅助にだつて多少の人間味はある、飯に飽満してみれば、自然、その次には酒が呑みたい。

「一杯ぐれいはい、おれにだつて、廻してよこしたつて、冥利は悪くねえだろう。四国屋のお内儀と弦之丞が話をしていたという種を、いったい、誰がおろしてやったと心得ているんだ。恩を知らねえ奴らじゃねえか」

と宅助は、あじけない顔をして座敷の隅に腰かけながら、心の底で不平を鳴らした。

宅助の仲間根性が、喉をグビグビさせて怨んでいるのに、三人は朝酒の酔いを顔に発して、さいつおさえつ話の興に入っている。

「じゃ、四国屋の店は、この大阪にもあるんだな」

「農人橋の東詰じゃ。そこにはたしか、住居もあつたように思う」

「すると、お久良という内儀を訪ねようとするには、そこへまいれば会われるな」

「店の船が出るまでは、多分住居に泊っているだろう」

「ふ、そうか。じゃひとつ三人連れで、その四国屋へ出かけてみようじゃねえか。この雁首をそろえて行けば、たいがい泥を吐いてしまうだろう。それに向うは御用商人、こつちは蜂須賀家のお名前をかざして、あくまで脅しの詮議と出る。証人には宅助という者があるから、弦之丞とお綱の居所を、知らないとはいわせない」

そんな話を小耳にはさむにつけて、宅助は癪にさわった。酒一杯飲ませないで、人をダシに使うことばかり考えていやがる。そこへゆくと、俺の旦那の森啓之助様は、侍とちやろくでもないほうだが、話は分る。こんな奴らのお先に使われているより、早く、お米

を捕まえて、国元へ帰った方が、どんなにましだかしれやしねえ——と腹の中で啖呵たんかをき
った。

とうとう我慢ができなくなった。

賤いやしい手つきで、ふところから、かますの貰入れたぼこを出して、わざと煙管きせるで粉をハタきな
がら、

「旦那、すみませんが」

と頭をかいた。

「なんだ、宅助」

「申しかねますが、こいつが空からになつちまつたんで……、汲くんでのむほどの粉煙草もござ
いません」

「煙草錢がほしいのか」

「へ、へい」

「しばらく我慢している」

と天堂一角はまた飲みはじめている。

「ちツ……」と、宅助は舌打ちをして、いよいよ心が楽しまない。そして、わざと突つか

けている草履の緒を切つて手にブラ下げた。

「旦那、旦那」

「うるさい奴じやな」

「あいにくと、草履も切れてしまつていますから、それも一つ買つていただきませんと、もうお供ができません」

「いろいろなことを申しおる奴、休んでいる間に、緒をすげておいたらよいではないか」「一角」と横から、さすがに少し聞きかねて、お十夜が、

「まあ幾らか遣るがいいじやねえか」

「仲間ちゆうげんという奴は使い方があるのじや、金をやりつけると癖くせになつていかん」

「人の仲間をこき使つておいて、そんな一酷こくをいつたつてしようがねえ。オイ宅助」

「へい、ありがとうございます」

銭ぜにの飛んでこないうちに、先に如才じよさいなく礼をいった。そして、お十夜が、投げかけてくれた南なん 鐐りょうを手に握ると蛙のようにピョコピョコして、草履をかうといつて湯どうぶ屋の外へ出た。

その剩銭つりせんで、どこかで冷酒ひやざけの盗み飲みをした宅助は、やっと虫が納まつて、ふらつ

くのを、無理に口を結んで帰ってきたが、周馬や一角や孫兵衛は、まだ湯どうぶ屋の見晴らしに、悠々ゆうゆうと落ちつきこんでいる様子なので、そのまま、境内の近くをぶらぶら歩いていた。

「おれなんざ、あそこにとぐろを巻いている三人侍にくらべりや、まったく、可愛らしい人間だぜ……」

ぽつと、どす赤くなってくる顔を撫でながら、宅助、自分で自分をいたわった。そして、
「いい日和ひよりだなア……」

とにわかには、あたりの参詣人の空気につつまれて、鳥居のわきの舞台にもたれかかると、すぐその側で、若い娘だの老人だの子供だのが、しきりに、顔を集めて興がっている。

「あら、道頓堀の伯母さんの家が見える」

「どれ、こつちへ、貸してごらんよ」

「もう少し……」

「そんなにいつまで、独りで見ているって法はないよ。さ、お貸し、お貸し」

「いやだ、この人は。今、野中の観音様を探していたのに」

「ほんとだ……まあずいぶん遠くまでよく見えること。梅ヶ辻のほうだの……それから桃

谷の大師巡りの人が、そろそろと歩いてゆく」

「どれ、母ちゃん」

「どれ、どれ。わたしによ」

子供につれて大人までが、大変な騒ぎ。何かしらと思つて、宅助がトロリと眼をすえて見ると、舞台の手欄にすえつけてある、遠眼鏡という機械。

その遠眼鏡を中心に、参詣の男女が、一家族のように楽しんでいるのを見ると、宅助は、平和な家庭の垣を隙見した継子と同じさみしみを感じて、自分も、仲間入りをしたくなつた。

口癖のように——大阪が恋しい、大阪が恋しい、と嘆いていたお米を嘲笑つて、

「おれなんざ、故郷も生れた家も、思ひだしたことさえねえがなア」

といったことのある宅助だが、こののどかな社頭で、娘を連れた母、孫を伴う老人、幼い者をよろこばしている年上の者などを見ると、やはり、家をもつ人、愛の持ちあえる人たちは、いいなあ、侍せだなあ、と涎が出るほど羨ましくなる。

「みなさん、お揃いでご参詣ですかい。へ、へ、へ、へ、へ、へ、……。いいお天気だ、こんな日

は遊べるね」

吾を忘れて、その側へ、いつか宅助はヒヨロリと寄って行つて――

「なにしろ、べらぼうにお日和ひよりがようがす。浪華なにかの町の繁昌ちかや千船ちふね百船ももふねの港口も、ここからはまるみえだ。ネ、そちらのお嬢じよツちゃん」

と、蟻ひきがえる蛙がが立つたような中腰なかこしでフーツと酒臭しゆい息を吹っかけたもので、遠眼鏡とんめんがに興じていた人たちの眼が、ちよつとそのほうへひかれたが、誰も相手にはしなかつた。

でも宅助は、すっかり仲間なかまになつた気で、

「――アア、無理だ無理だ、そのお嬢じよツちゃん、遠眼鏡とんめんがのほうせが背丈せいが高いや。オイ、そこにいるお若いめえの、お前めえ抱かッこして見せてやんねえ、な、なによけいなお世話せわだつて？

その後におれが見る番だからよ――。ほーれ、嬢じよツちゃん、見えただろう。一里いちりが一丁ちやうに見えるおらんだ渡りの遠眼鏡とんめんがというのは、これだ。何が見えた？ ……千日せんにち前まへの原はらッばで、比丘尼びくにが踊りを踊つてるだろう？ 嘘うそだ。じゃ、道頓堀みちとんぼりの川がわッぶちで、蔭間かげまが犬いぬに食くいつかれてるだろう。そんなものは見えねえッて。じゃおじさんが見てやろう、貸してごらんよ。ちよつとだ、ちよつと貸しねえ、オヤ、強ごう情じやうな子こだなあ……貸せつたら貸さねえか」

あたりの者は眼をしばたいて、変な酔ッぱらいが舞い込んできたわいと眺めている。で、だんだんと、眼鏡のそばを、人が離れてしまったのをよいことにして、宅助は及び腰で、

「さてな、どこを最初に、見物しようか」

と、小手をかざして、肉眼で見当をつける。

その形がふるッているので、女たちの笑い声があると、ほろ酔い機嫌の宅助は、おのれのお茶羅化が喝采を得たものと合点して、もつといい気になりながら、

「ウーム、見えるぞ」

と大げさに遠眼鏡へ目を当てた。

「こいつアすてきだ、淡路島が足もとへ来ていやがる、孫悟空様がきんと雲に乗って行つても、こう早くは淡路へ着くめえ。どれ、だんだん東へ歩こうか……見える見える天王寺が。五重の塔のすてツペンに、鴉があくびをしていやがる、その手前はどこだろう、なんにもねえや、真つ青だ、田圃と桃の木と原ッぽだ。田圃はいつこうおもしろくねえな、何かねえか、見るものは……オヤ駕が通つたよ、麦畑を。いやに近えと思つたら、すぐこの下の梅ヶ辻か、道理で道理で、よく見える筈だ」

と、自分の道化どうけに浮かれて、いよいよ調子づいてきた宅助、ひとりでしゃべりまくしながら、あなたこなた、見ているうちに、どうしたのか、

「あれ！」と、急に眼鏡から顔を離した。

そして、トロンとたるんでいた酔顔の筋までが、にわかに関むさぼきように覗のぞきなおして、こんどは独り言もいわず、笑わせもしない。怖ろしい真剣味まけんあじが、片目の皺しわにまで現れてきた。

と——うなるようなつぶやきが洩れて、

「ちツ、畜生……」

と、地だんだを踏んだものである。

「たしかにあいつだ！ 違ちがえねい！ 阿女あまめ、あんな所を、いけしやアしやアと通つていやる。見ていろよ。今、この宅助が、首ツ根くびねつこを捕まえてくれるから」

裾すそをはしよつて、真ま鍬くわ こじりの木刀ぼくとうをうしろへ廻した。見ている者には何がなにやらいつこうに分らない。ただ赤かった宅助の顔が青くなって、道化役者が撲なぐられたようにしか見えなかった。

「たわけめ！ 何をしているのじゃ」

そこへ、くわえ楊枝ようじの周馬とお十夜について、天堂一角が、姿を探し当ててくるなり、はなはだまずい面構えを見せた。

そこに、相手もないのに、宅助の血相が妙なので、三人も腑ぶに落ちないながら、

「なんだ、そのざまは。喧嘩けんかでもしようというのか」

宅助は、それどころか、という息まきようで、

「思いがけねえ獲物です。ぐずぐずしちやおられませんから、わっしや、ここでお暇いとまをちよくだいたします」

「これ、待て待て」

一角は怖い眉をよせて、

「そちにはまだ用事がある。勝手に吾々の側を離れては相ならん」

「相ならんとおっしゃったって、宅助の目の前には、今、一大事が降って湧いているんで

——ヘイ、今を遁のがしちや大変です」

「でも、このほうに用事がある。四国屋へそちを証人として連れてゆくまで、けっして暇いとまはつかわさんぞ」

「困りますね、天堂様、宅助には森啓之助様が御主人なんで、あなた様にや御奉公いたしておりませんか」

「だまれ。何でもよい」

「やりきれねえなあ。どうか、わっしの立場も、少し察してやっておくんなさい。今、この遠眼鏡とおめがねからえらい手がかりを得たばかりなんで……まごついていると、取返しがつきあしません」

「遠眼鏡から、何を見たと？」

「わっしに毒をくらわせて、天満河岸からドロンをきめたお米よめのやつが、日傘をさして、すぐ向うの梅ヶ辻を」

「そんな女ものはどうでもいい。捨てておけ、捨てておけ。貴様もまたばか正直に、啓之助を嫌って逃げた困かこい女ものを、なんでそう一心に捕まえたがっているのじゃ。吾々が眼色を変えているのとは違って、蜂須賀家になんらのかかわりもない雌めんどり鳥などを、血眼で、追い廻しているたわけ者があるものか、行つてはならん！」

「どうどなられると宅助もムツとした。お米には毒を吞まされた意趣もあるし、阿波へ連れて帰れば、たんまり啓之助から報酬をねじ取る寸法もあつてすることだ、野暮で分らず

やのてめえたちが、何を知ったことか、と業腹ごうはらを立てて、面つらをふくらませた。

「おい、天堂、そいつは少し因業いんごうすぎるだろう。宅助の事情も聞いてみればもつともなところがある」とお十夜が仲なかをとつて、

「おれが引きうけてやるから、行つてこい。その代りに、お米を捕まえたら、安治川屋敷へ歸つてこなくちやいけねえぞ」

「ありがとうございます。——じゃ」

「おっと、待ちねえ」

「早くしませんと、また姿を見失います」

「どこにいるんだ、そのお米つてえ女は」

「ちよつと、眼鏡これへ目を当ててごらんなさい。梅ヶ辻から野中の観音のほうへうねつてい
る一筋道を、桃色の日傘でゆく瘦せ形がたの女がおります。娘のような派手な衣裳いしやうで、鹿かの
子の帯揚、帯の色、たしかに、そいつがお米なんで」

宅助の説明を聞きながらお十夜がそれを覗のぞきこんでうなずくと、一角もつり込まれて後から入れ代りに顔をよせた。すると、すえつけの角度を動かしたとみえて、お米の姿は映らずに、坂下の鳥居筋を、ドンドン駆けてゆく男が見える。

おや……と思つて見ていると、それが、今そこでしゃべっていた宅助なので、
「きやつめ……もう行つてしまのおつた」

と、いまいましように、顔を離した。

「おそらく、宅助はもうあのまま帰るまい——」

そういったのは、旅川周馬。

「なぜ？」と一角が突ツかかるのを冷笑して、

「あまり貴公の人使いが荒すぎるもの」

「帰らなくては、四国屋をただす時に都合が悪い。ええ、押ツ放してやるのではなかつたのに」

「では、追いかけて、貴公も一緒に、お米とやらいう女を、捕まえてやるがよからう。さすれば義理にも宅助が帰つて来る」

「ばかなことを言いたまへッ、女情にょじょうにおぼれている啓之助の妾めかけなどを、誰が仲間ちゆうげんと一緒にひるひなかなつて、この昼日中、両刀を差すものが追ひ廻していられるものか」

「あはははは。面白い、また一角が怒つた」

とお十夜は哄笑こうしょうして、なお氣にして遠眼鏡のぞを覗いていたが、

「ふーむ、なかなかいい女だ。一角がそういうなら、おれが様子を見に行つてやるから、しばらく、向うの絵馬堂えまどうで待つていねえ」と、雪踏せつたをすつて、石段を下りはじめた。

辻堂があつた。

白藤の花がこぼれている。

野中の観音へゆく道のほとり。このあたりに多いのは、池と藪やぶと桃畑、でなければ墓場である。

だが、夏もやがて近い真昼まひるなか中、朗明ろうめいであつて陰湿がない。どこかで石屋の鑿のみの音がする、かツたるそうに刻きざんでいた。

お米はそこで日傘をつぼめた。ちよつと、辻堂を拝借する。辻堂というものは、いかめしい宮の拝殿などより、何かしら親しみ深いものがある。ことに、そのいぶせき縁の端は、疲れた足にすがられ、家なき子に夜をしのがせ、行旅こうりよ病者の寢床とまでなる。

悪いやつは悪用して、神まします眼の前で、盆ぼん蕙こぎをしいたり、女をかどわかしてきたり、果ては、絵馬えまや、御神体まで担かつぎだしてしまふけれど、辻堂は依然として存立し、草

ぶき屋根の朽ちるまで、道の辺の神としての功力を少しも失わない。

そこで、

「ああ、くたびれた」

と、お米は、軽く膝を叩いた。

もう猫間川はすぐそこだ。その川向うの小橋在に、万吉がいるということ、かの女は、とうとうつきとめてきたらしい。万吉は深く自分の境遇や心もちを知らないから、お吉のように、弦之丞の居所を知っていて隠すようなことはしまいと考えている。

「わたしも、こんどはずいぶん苦勞をした……。それで、あの方に会えないくらいなら、死ぬのは嫌だ、自暴になつて——アアきつと自暴になつて、どんな妖婦にでもなるだろうよ。酒、男、したいほうだいな世を送つて、血を吐いて、死ぬだろうよ」

白い花がハラハラと落ちてくる。桜のように、こびりつかない藤の花。

「嘘ばかりついている——まだしおらしい娘か、善人ぶっているからおかしい」とお米は、自分で自分を嘲つてみた。

「もう、わたしという女は、りっぱな妖婦になっているのじゃないか。啓之助をアアして、お吉さんをアアして、宅助をアアして、家へも帰らずに、男を探し廻っている女だもの」

小菊紙を出して、口をふいた。

軽い咳といっしょに、紅梅みたいなものがついた。見たくないものを、見るのが癖になつている。

「もう……どうなとおなり」

昼の月へ向いて、笑つた顔が、自分ながらあさましかつた。

そうして、うしろへ手をつけていると、辻堂の横に、野鼠でもいるような音がするので、ヒョイト、居形のまま顔を向けてみると、そこに、紐の宅助が、皮肉な面がまえをして、お米の気がつくまで睨んでいた。

「あらッ——」

と、さすがにぎよツとしたけれど、もう逃げだしても間に合う筈はない。

度胸をきめて、お米はジツと黙っていた。

ふところに、拳をこしらえながら、宅助も睨んだ眼を向けたまま、黙つて、女の姿態を見つめていた。

しかし、言葉は借りなくとも、その間のふたりの心は、剃刀のように研げて争っている。宅助の眉間には、殺してもあきたらないほどな遺恨が燃えているし、お米のくちびる

には、殺されるだろう、と胸にこたえているおののきがある。

「おい………」

と、だんだん寄ってきた。

「……………」

殺してみやがれ！ わたしだつて。

お米はこう覚悟をして、その瞳をそらさなかつた。

弥蔵やぞうをこしらえていた手をつン出して、紐の宅助は、ニヤリと面相を変えながら、

「エ。お米の御方おんかた——」

と、ポンと背中をひとつ叩いた。

「なぜ逃げねえのよ、逃げたらいいじゃあねえか！」

食い物と侍にかかると、カラ意気地のない宅助だが、お米の前に立つとズツと冴えてくるのは奇妙だ。相手の上手うわてにのしかかつてゆく凶太さや、悪党らしい余裕さえついてくる。女と思つて、先に呑んでかかるせいもあるうが、ひとつはこの宅助、啓之助がお米を知ると一緒に手がけているので、充分、コツというものを心得ている。

「エ、おい」

と、背中を叩いたのが、そのコツらしい。遺恨は遺恨だが、殺してしまえば玉なしだ。女に逃げられた女衞ぜげんが、たえず女を殺していた日には商売にならない、という道理から宅助らしい我慢なのだ。

「どうしましたえ、お米さん。たいそうすましているじゃねえか。ちよつと、久しぶりだから、きまりが悪くなつたとおつしやいますか。そうよ、天満の河岸かききりでお別れでござんしたね。ハイ、そのせつは、どうもいろいろお世話様で……」

言葉の刃やいばは、相手を片輪にさせないから、ここで存分にえぐるつもり。

たたんだ日傘を膝へのせて、お米は辻堂に腰かけたまま、いうことならいわしてやろうという顔つき。明るい昼を乙鳥つばくらが横ぎつても、睫毛まつげ一本動かさなかつた。

「ふーん……さすが口のうめえお米さんも、今日ばかりはグウの音ねも出ないとみえる。そうだろうよ、森啓之助様をだまくらかして、お付つけびと人を迷子まいごにさせて、影のような男の後ろを探し廻っているんだからな」

「……………」

「あ、もひとつ、お礼を忘れていた。よくもこの宅助に、鼠薬を食らわせたな！ なアに、

ああいう酒の味も、めつたにご馳走になれねえものだから、あだやおろそかにや思いませんよ。だから、このご恩は一生の間に、チビリ、チビリと、阿波へ帰った上でするぜ」

「知らないよ」

ツイと立とうとすると、

「おっと」

肩をつかんで、

「どこへ行こうツてんだ！」

「わたしの勝手だよツ」

さつきから、ひそかに固く握りしめていた日傘で、宅助の横顔を激しく打った。

「エエ、この女め！^{あま}よい程に、あしらっておけばつけ上がって、ふぎけた真似^{まね}をしやがると、俵^{たわらぐく}括^{くわく}りにして船底へほうりこんでも、阿波へ突ツ返^{けえ}すからそう思え」

ムズと髪^{かみ}の根をつかみにかかるのを、日傘で払うと、その日傘を引つたくられて、力まかせに打ちのめされた。

牡丹崩^{ぼたん}れにうツ伏したお米の手には、いつか^{あいくち}首^{くち}らしい光りもの。

「よくも——、ちイツ……」と死にものぐるい、迂濶^{うかつ}にのしかかった宅助^{たくすけ}の毛脛^{けすね}へ、芒^{すすき}の

葉で切ったほどな痕あとをつけた。

一方。

高津の上の舞台では、

「や……やや……」と旅川周馬が、しきりに遠眼鏡から宅助の居所をのぞいて、

「ウーム、これは面白い。宅助のやつ、あはははは、なんだあのざまは、女ひとりを持ってあまして」

ひとりで興に入っている。

「お十夜はどうした？」

つまらぬ暇つぶしにしびれをきらして、天堂一角は苦にがむし虫を噛んでいたが、つい周馬の独り言に誘われて、側からこうたずねだした。

「お十夜？ ……どうしたのか、かれの姿は見当らない。どうせ、例の癖で、ふところ手のぶらぶら歩きで行ったのだろう。ア、ア、ア……そのうちには、どっちかかたがついてしまいそうだ。女も死にものぐるいになると、あなどれぬ力がある。お千絵様でもそうだった。ましてや宅助、ヘタをやると始末に困るぞ」

「どれ、貸したまえ」

「見たまえ、あれだ」

「ウ、なるほど、お米に違いない、しかし、川長にいた頃は、あんなすごい女ではなかったが」

と覗^{のぞ}けば一角もつゝい気を奪^とられて、なかなか周馬にゆずる気色^{けしき}もなかったが、そのうちに、

「やッ、彼奴^{きゃつ}だ！」

と、ただならぬ声をあげ、眼鏡を離れて舞台から伸びあがった。

だが、遠眼鏡で見たものが、肉眼でたしかめられるはずはなく、ふたたび覗^{のぞ}いてみると、今、体で位置を狂わしたので、腹立たしいほど、見当ちがいな遠景が映った。

「ああ、いけない、どつちであつたかの」

「なんだ、なにを見たんだ」

「イヤ、まだしかと分らなかつたのだ。それで覗いてみると、もう以前の所が見えない」

「見えないはずだ、貴公、そんなほうへ向けておるのだもの。貸したまえ、こつちへ」

「早くせぬと、あるいは一大事になるかもしれぬ」

「なんだ、宅助か」

「いや」

「お米か」

「いや。まあ、そつちを早くなおしてくれ」

「そう、側そばで急せいては困るな」

周馬が代つて、覗き覗き、前の所へ向け戻そうとしたが、今の一大事といったのが胸を騒がせて、容易に角度が定まらない。

おんおんおんな
女男女

のりづきげんのじょう
法月弦之丞の胸もとへ、誰か、いきなりぶつかってくるなり、うしろへ身をちぢこめて、

「——お侍さまッ」

と、かれの体を楯たてにしながら、すがりついた者がある。

ふいに、帯へ重みをかけられたので、

「あ」

思わず、足をとめて、うしろの者の手くびを握った。

やわらかい、きやしやな女の手であった。そして、絹か髪の毛か、ひんやりとしたおののきが腕に触る……。

かれはつばの広い編笠をかぶっていた。一方の手をそれへかけて、自分の背なかへ隠れた女の姿を見ようとしたが、同時に、

「この武士め」

と、何者かの骨ばった拳が、襟をつかんでねじあげてくるなり、

「野郎ツ、な、なんで、その女をかばいだてしやがる」

と、目をいからせている。

弦之丞は呆然とした。

何がなんなのか、わけがわからぬ。

ことにかれは、きよう船宿の鯉屋の二階へ、お綱をのこしておいて、ただ一人、猫間川の岸からこのあたりへ、ゆうべの船と、あのまま帰らなかつた万吉の姿をたずねてきたところなので、歩みつつもおのずから、心のうつつなところがあった。

今、なんの気もなく、向うの百姓家で道をきき、森に添ってこの辻堂のわきに出てくる

と、その途端に、これなのである。

まったく、思いがけない言いがかりだ。

「こやつ、少し血迷っているな」

と思ひながら、グイト、あいて相手の押してくるのをこらえきると、男は、馬のような前歯をかみしめて、

「ウ、邪魔をしやがると、承知しねえぞ。さ、女を前へ出せ、女を！」
力りきみ立って、ねじこんでくる。

弦之丞は、迷惑きわまる様子をして、勝手に、襟元をつかませていたが、笠の目堰めせきから、つらつらその男の顔を見ると、これはまたまんざら縁のない者でもない。

いつぞや、猫間堤で、その時の都合から、当て身をくれて捨てて行つた、森啓之助の仲ち間ゆうげんだ。

「ウーム、そちは宅助」

こういわれると、ぎよつとして、

「な、なんだと」と、ふりあおいで――

「あつ、てめえはツ？」

と、泳ぎだしたが、すかさず伸びた弦之丞の右手が、ムズと襟がみをつかんで、「待て」

ズルズルと引き戻した。

そのもがいてよろめく足もとから白い土埃つちぼこりが舞うのを浴びて、宅助はうなるように、「ちえッ、しまった」

と、舌打ちをしながら、すばやく、三尺帯を引っぱらずして、対手あいてに着物をつかませたまま、スルリと脱ぎ抜けて、

「うぬ、見ていやがれ！」

グイと睨んで、捨て科白ぜりふをいったまま、後も見ずに一目散。

俱利迦羅紋々の素ツぱだかが、真昼の太陽に、蛇の皮のように光って、小気味よくも、タツタと向うへ逃げだしてゆく。

すると。

高津筋の辻から、お十夜孫兵衛、チラリ、チラリと雪踏せったを鳴らして曲ってきた。

周馬と一角をのこして、宅助の様子を見届けに来たのだが、まさか、入墨のすっぱだかで飛んでくる男が、今、眼鏡めがねの中に見えた宅助だとは思わない。

俱利迦羅紋々のいさぎよい逃げぶりを見送って、弦之丞は苦笑していた。

その編笠を、しずかにふりかえらせて、

「お女中、どこも、怪我はなかつたかの？」

と、後ろを見ると、四、五人の蚊帳売りが荷を担って、目の前をさえぎったので、少し離れて、その通りぬけるのを待っている。

お米は少し後ろへ戻って、その行商人たちの足にふまれて行った、自分のはきものや日傘をさがして、前の辻堂の縁のそばへ、後ろ向きにしゃがんでいた。そして、髪や襟元をつくろいなおしている様子なので、弦之丞は、あえて意にとめるところなく、そのまま森の片日蔭を辿って、ピタピタと先へ歩みはじめた。

かれはもう今のことなどは忘れて、

「万吉はどうしたのか？ どうして姿が見えなくなつたか？」

と、ただ、そればかりを思っている。

まさか、かれにかぎって、大志を曲げて変心するようなことはあるまい。

人は労苦をともしして、はじめて本心のよく分るもの、まだ彼と知ることの日は浅いが、

義にも情にも、そんな軽浮でないことはよく分っている。

ゆうべ、猫間川の土橋から、舟を出てゆく時にも、帰るまで、ここを動かないでいてくれ、とさえ念を押して行つたのに――。

と思うと、なんとなく胸さわがしい。

ふとして、そこらに、生々しい流血の痕はないか。なんぞ、万吉の持ち物でも落ちておりはしまいか。

森の日蔭のとぎれた所から、清冽な流れと小松の土手が、猫間川のほうほうねっている。この小松原は、さつき一度通つたような気もするが、念のために、かれはなお水辺の草むらを覗きながら、水の行くままにあるいてみた。

「もし」

お米は、そこで初めて、呼びかけた。かの女は、辻堂の前からここまでの間、黙って、後についてきた。宅助と争つた息の疲れが、容易にしまらないのと、また、一念に居所をさがしていた人の現れが、あまりに唐突で、あまりに路傍の人のごとくであったのと。そして、その人に、今の取乱した姿のまま会うことが、やはり女らしく迷われたのであった。

けれど、この折を逃がしてはならない、と思う心のほうが、より強かったのはいうまでもない。

「もし」

少し、小刻こきぎみに追いついた。

「おお、今のお女中か……」

「ありがとうございます。もう少しで私は、どんな目に遭あわされるか分らないところでござりました」

「まいりあわせてよかったの」

「はい、なんとお礼を申しあげてよいか、もう、こんなうれしいことは」

「無用じゃ。礼などと改まるには及ばぬこと、それよりはまた、やがて黄たそがれ昏くれにならぬうちに、早く家へ帰られい」

「法月さま」

「や？」

「お見忘れでございますか」

「どうして、そなた、拙者の名を知っておるか」

「弦之丞様、わたしの名を、思いだして下さいませ」

「ウム……」と、その時、はじめて彼はしげしげとおもはゆそうに、うつむけている女の顔の線を見入ったが、ハタと膝を打って、

「お、川長のお米であつたな。久しく見ぬせいか、見違えるほどな変りよう、うかと、思わぬ失礼をいたしました」

「あなた様も、その頃の、宗長流の一節切（そうちようりゆう ひとよぎり）を吹く虚無僧とは、すっかりお姿が
違い遊ばして……」

「ウム。ちと仔細がありましての——がしかし、そなたの家や叔父の半齋殿（はんさい）には、あの節、唐草銀五郎や多市などが、ひとかたならぬ世話になつた。その無沙汰も心苦しう思つておるが、時雨堂（しぐれどう）の騒ぎの後、半齋殿にもさだめし迷惑がかつたことであろう。あの人は、その後もつつがなくお暮らしであるか。また立慶河岸（りっけいがし）のお家もご無事でいられるか？」

「はい、おかげ様で、大津の叔父も、大阪の家も、みんな変りなくやつておりますが、ただ、変り果てておりますのは、この私だけでござります」

と、お米は、袖についている草の実（くさのみ）を、指の先につまんで捨てた。

変りました——とみずからさびしくいう女の前で、かれは、いつか自分が安治川屋敷へ忍びこんだ際に、お船蔵の闇で救いを叫んだひと声の悲鳴を、今ふと、耳の底に呼び起こしていた。

「その後そなたは、阿波へまいっていたそうだが、して、いつこの大阪へ戻ってこられたか」

「森啓之助という蜂須賀家の御家中に、無理に、かどわかされて行ったのでございますから、戻ってきたというよりは、逃げてきたも同様なのでございます」

「ほう、それである仲ちゆうげん間まが、無態むたいにそちを捕えようと致していたのか」

「私はもう阿波へ帰るのは嫌なのでございますけれど、執しゅうねん念ねんぶかい宅助が、あの通りつけ廻しているのです、川長の家へもウツカリ帰れませぬし、もうどうしていいか、路頭に迷っているところなのでございます」

と、顔に血をのぼせながら、そむいたまま、ソツと側へ寄りついて、

「で私は、ほんとに只今困っております。弦之丞様、どこかへ当分の間、私の身を匿かくまっておいては下さいませぬか」

「というても……」と、かれはいたく迷惑そうに、「この弦之丞自身すらが、流々に任す無住の浪人、定まる家もない境遇であれば、そなたをどこへ匿うてあげる術もない」

「家がなければ、あなたの袖の蔭へでも、また定まらぬ旅とおっしゃるなら、浮草のように、その旅先へでもよろしゅうございますから」

ふと、歩むともなく歩みだす人を追つて、お米は懸命にいいすがった。

「どうか、連れて行つて下さいませ。まだ阿波へ行かぬ頃から、私がどんなにあなたをお探し申していたかは、それはいつか九条村で、あの医者の源内様の帰り途に、使いに持たせてやった手紙の中へも書いた通りでございます」

と、あの時、弦之丞を待ちぼうけていた九条の渡舟場わたしばから、啓之助と宅助に捕まつて、脇船の底になげこまれた時のこと。また徳島の町端れに暮らしていた月日の間にも、たえず忘れ得ぬ悩みをもっていたことや、剣山つるぎさんの麓まで行つて、啓之助をたぶらかして、とうとうこの大阪へ逃げ戻つてきたことなどを、それとなく話しながら、燃ゆるような恋をほのめかした。

そして弦之丞の気色けしきを見たが、かれはその強い恋の言葉よりは、阿波、剣山、などという言葉の端々に、より以上な衝動をうけているらしく、何か黙思しながら、素げないうな

ずきを与えながら遅歩ちほをすすませている。

きよう偶然に会ったことはうれしかったが、それは、悲恋の幻滅を知る日であったか、とお米は相手の冷やかさに血を熱くして、

「弦之丞様、今申した私の願いは、おききなさって下さるのですか、それともお嫌とおっしゃるのでございますか。これ程までせつない苦勞をしても、それがあなたのお心に通じないものなら、いッそもう私は……」

「何をなさる」

ふりかえるとともに、弦之丞はお米の手くびを握って、固く脇の下へ抱えてしまった。

その指からポロリとヒあいくち首が落されて、松落葉まつおちばの土へ刺さったのを、お米はまた拾い取ろうとしてもだえながら、

「死んだがましてございます、私は死ぬよりほかにない女です」

弦之丞は女の激しいふるえを感じながら、黙ってお米の手を抱えていた。その肉感的な痙攣けいれんを感じた当惑のきわみに、かれはまだお千絵にもお綱にも持ったことのない悪魔的な考えにフト頭を濁していた。

この女の猥みだらな恋を利用してやろうか。

かれの切れ長な目が、そう思いながらジツと見ると、お米は温かい男の腕の下に自分の手を預けたまま、なんの反抗力も失つてしまった。気味の悪いほど白く透すく肌の下には、きわどい瞬間を楽しもうとする血がよろこび躍っている。

弦之丞は思った。

この女が自分に求めてやまぬものは、ただ強い抱擁ではないか。熱病のような本能の情炎が、またそれをあおる癆ろうがい咳がいという美しき病の鬱うつけつ血けつが、たまたま自分という対象に燃えているだけなのではないか。

剣山へ行きつくまでの難関を、お米に手びきさせることは、いい策には違いないと思つたが、目的のためとはいえ、果たして、そこまで悪魔的な気持がもち続けられるか、またこの放ほうしゅう縦じゆうな恋の病人を、それまであやつって行ききれるかどうかという点は、弦之丞の性格にはなほだ自信が乏とほしかった。

ジーと目をつぶつて考えた。

お米の手を抱えたまま——。そして、お米は、その手くびのしびれを忘れて、うっとり、弦之丞の顔を見まもっていた。

すると。

向うの小松林の間を、明るい帯の色がチラと通りぬけてくる。誰かと思うと、それは見返りお綱であった。

何かにわかな用でも起こつたらしく、船宿から弦之丞をさがしに来たお綱は、思いがけない男と女のたたずみを見て、はツとしたように、松の木のかけへ足をすくめた。

うつつなお米の腕を脇の下へ抑えたまま、弦之丞は横あゆみに数歩、人目のうれしいなき木蔭まで連れてきた。

女は、体じゆうを心臓にして動悸どうきをうった。

そのさびしい木蔭が、恐ろしいようなまたうれしいような。

「お米」

と怖いように射いる眼まなざし、

「いまの言葉に、よも偽いつわりはあるまいな」

と、念を押して締しめつける言葉が、かの女じよをいつそう熱じよッぽく必死にさせて、

「何で嘘や偽りにこんなことがいえますよう。まだそれ程にお疑いなら、見ている前で、私は死んで見せませす、ええ、今すぐにでも」

「では、真実、それほどまでにこの弦之丞を」

「思いつめておりました！」と、お米の姿態しなが白肌の蛇のように男の胸へからみついて、

「ですけれど、その懸命は私ばかり、あなたのほうでは、なんとも思つてはいらっしゃらない」

怨うらみがましく向ける目の針を避けて、

「いや」

面おもてをそむけた。

偽りは自分にある。かれは、お米をあざむき、己れの心をいつわる舌に重い苦澁をおぼえながら、

「何を隠そう、そうした心は拙者とても同じであつた。川長の離れ座敷で、銀五郎や多市などとともに、そちに匿かくまわれていた頃から」

「ええつ、もし、それはほんとでございますか」

「きようまで忘れたことがない」

と、強く細い手くびをつかんだが、体はお米の粘ねばりを解いて、抜けるように胸を離れた。

「では、私の恋を、あのお願いを」

「おお、かなえてはやろうが、しかし、そちの本心」

「ええ」じれったそうに身を振って——「まだ疑っているのですか」

「いいや違う。その本心が分ったので、ひとつの大事をそちに打け明けたいと思う」

澄みきつた双眸そうぼうがあたりへ動いた。

「でその上に、是非ともきいて貰わねばならぬ頼みがある」

「頼まれるのはうれしいことです。弦之丞様、水臭いご心配はなく、何でも打ち明けてみて下さいまし」

「ウム、では、必ず承知してくれるか」

「はい」お米はゴクリと唾つばを呑んだ。

「何でございますか？ そのお頼みとは」

「ほかではないが、もいちど阿波に帰ってほしい」

「えっ、私に？」

「嫌ではあろうが、森啓之助の所へ帰って、しばらくすなおを装よそおっていて貰いたい。いづれ近ちかぢか々には、拙者も阿波へ渡るつもりだが」

「それではいよいよ徳島城や剣山の奥へ、隠密にいらっしやるお覚悟ですか」

「これッ」

思わずけわしい目になって、弦之丞はお米の顔色をジツと読んだ。そして、この女はいつのまにか自分の素姓や目的までも感づいているなと思つた。

きようまでのいきさつを綜合し、また永らく森啓之助の側にもいたものであるから、自然それを知つたことは当然だが、思えばその大事を氣どつてゐる女の恋慕こそ怖るべきもので、ひとつ狂つてきたら自暴の火は手のつけられない狂炎となるだろう。

「静かに——」と声をおさえた。お米も木立の奥や小川の汀を見廻した。

昼を啼く小禽——木の葉のささやき——そんなものしかなかつた。弦之丞は静かに言葉をつづけた。危険性の多いお米の恋をなだめておいて、大望の手びきにあやつろうとする悪魔的な考えは、いつのまにか彼の心に自然な働き方をしていた。

「いかにもその目的のために、真つ先に、剣山の間者牢を訪れようと計つてゐるが、さて阿波へ入り込んだ上には、さまざまな詮議迫害がそれを拒むに違いない。ところでそれが啓之助に囲われておれば、身を隠すには上乘の便宜、また何かのことにも都合がよい。どうじゃお米、いずれその目的を遂げさえすれば自由になれる弦之丞だが、それまで時節を待つと思つて、もいちど啓之助の所へ帰つてくれぬか」

お米もさすがに少し考えていたが、

「ええ……」と、やっとうなずいた。そして、「それがあなたにご都合がよいならば、私は、目をつぶつて帰ります。ですけれどその代りに、きつと、あの……」と甘えるように男を見あげる――。

その間に、お綱は、わざと静かに、木立の細道を歩いていた。

もう少し、様子を眺めていようかとためらうふうであったが、お米の白い手が、人目もなく男の肩へ伸びたのを見せつけられると、かーつと熱い血がのぼって、吾にもなく、

「弦之丞様！……」

と呼んでしまった。

そして、飛び離れて白ける男女ふたりを冷やかに見捨てながら、苦しそうに微笑ほほえみをした。

あれ。そこへ来た女は？

どこかで見たような、とお米はすぐに考えついたが、妙なはめに立たされたまま、気まづい口をつぐんでいると、お綱は、わざとお米の方を見ないようにして、

「あの、弦之丞様」

と、涼しい目に、用事のある意味をふくませて、

「よろしかったら、ちよつと、お顔を貸して下さいな」

そのなれなれしさが、いかにも深い仲のあるように、一方の心へ映るのは是非がない。弦之丞は未練なく、そのお米を後ろにして、

「お綱ではないか、何ぞにわかなことでも？」

と訊たずねながら寄つて行つた。

「さつきお出かけになるとその後へ、新吉という人が見えました。あの、船宿の鯉屋に、私たちがいるのを知つて」

「新吉と申すと？ 才、四国屋の手代じやな」

「急に積荷がまとまつて、船の出る日取りがきまつたからと、わざわざしらせに来てくれました」

「使いがなくとも明日あすの夜は、こちらから四国屋の寮へ行く約束になっているのに」

「どういう早耳か、阿州屋敷の者がうすうす感づいているらしいから、その前に来るのは見あわせてくれという話」

「して、船の出る日は？」

「十九日の晩の五ツ刻どきに、木津きづの河岸から安治川へ。その夕方に、四国屋の裏まで、身装みなりを変えて来てくれたら、あとはお久良様がよいように手筈をしようとおっしゃいます」

「ウム、そうすると……」と指を繰くつてみながら、「あと残る日もわずか四、五日」

「万吉さんはどうしたのでしょうか」

「さ、その消息だが……」と声を低めて、話し話し歩いている間に、いつか弦之丞はお綱の歩みに連れていた。

お米はぽつねんと取り残された形。

どんな甘いささやきを交わしてゆくのかと、邪推されて胸は穏やかでない。

ちようど、夢みている楽しい枕を不意にはずされてしまったような、腹立たしさ、さびしさ、空虚さ。

「ひと、ばかにしている」

睨むように、お綱のうしろ姿を見ていたが、やがて自分もあゆみだして、

「弦之丞様、弦之丞様」

と呼びとめた。

そして、ふたりがふりかえると、呼んだ者は埒らちがい外がいにおいて、お綱の目とお米の目が

剃刀かみそりのように澄み合った。

「なにか御用？」

とお綱の声が冷たくいう。

「いいえ、お前さんじゃないんですの」

「おや、たいそうなご挨拶だよ。弦之丞様、いったいこの女ひとはどこのお方？」

「ハイ、私でござんすか」

一方の引き合わせも待たず、お米はむしゃくしゃまぎれに突っかけて、

「川長のお米というあばずれ女もの、エエ、法月さんとは、ずっと前からのお知り合いでネ」

「あら、お米さんといえば？」

「そのお米がどうかしましたかえ」

と、ツンとした。

「もうずいぶん前のことだが、関せきの明神みょうじんの森で、首くくを縊ろうとしているところを、私が救ってあげたことがある。だけれど、そのお米とかいう娘は、まだ初心うぶらしい優しさがあつたから、お前さんたあ人違いかも知れないねエ」

「あ……それじゃ」と、お米も初めて、自分のうろおぼえをはつきりさせた。

「私が叔父の家をぬけだして、関の森で死のうとしていたところを、抱きとめてくれたあの時の人は？」

「たしか、見返りお綱とかいう、おせっかいな江戸の女だったと思いますけどね」

「まあ」

といったが、お米の気持がすなおでなかった。

「お蔭様で、生きのびましたと、お礼をいいたいところですよ」

「どういたしまして。恩着せがましくいったなどと、悪く気を廻されちゃ困っちゃいます」

「助けられて不足をいうんじやあないけれど、あの時死んでしまわなかったお蔭に、まだ罪業ざいごうがつきないで、こんな姿をうろつかせておりますよ」

「といたったところで、私のせいじゃないからね」

「誰がお前さんのせいだと言いましたえ。私はただ、自分の輪廻りんねを怨むんですよ」

「それ程この世がお嫌なら、どこかそこらでご思案なさいな、こんどは私が手伝ってあげるから」

「おそろしいご親切、ありがたすぎて身ぶるいが出る。けれど私にも今日からは、弦之丞様というお方があるんですから、そんなお心こころづか遣いはご無用に願いまししょう」

と、お米も負けずにそういい返すと、弦之丞の右側へ廻って、見えないように、袂たもとの下で手を握った。

おのれの科とがは覲てきめん面にすぐおのれへ帰ってくる。

弦之丞は後悔した。

触れるやいな、火花を散らす女の妬心としんを眼まのあたりに見て、かれの臆病な悪魔的な考えは萎なえ惧おそれた。

けれど、秘密を知る狂恋の女。あざむかねば殺すのほかはなく、殺さねば、あざむくのほかはない。大事の万全を期する上に。

しかし、やがてお綱の怜悧れいりが誤解をとくであろうことは信じられるので、とにかく、弦之丞はお米の棘立とげつのをなだめ、こんがらかった二人の気持をほぐすことに努めながら、京橋口の船宿へ帰ってくる。

大阪表に潜伏している間、その鯉屋には何かの世話になっていたが、今も門かどまで戻ってくると、誰かひとりの客が、留守のうちに弦之丞を訪ねてきて、さつきから二階に待っておりますという亭主の告げであった。

「客が？」

といぶかしみながら、弦之丞、腑ふに落ちない様子で、

「はて、誰であろうか」

梯子はしじ口から見あげていると、その間に、お米は上がりがまちの日和下駄ひよりを見て、少し顔色を

変えたが、

「私は、そのうちにまた、あの、船が出るまでの間に出なおしてくることにしますから：

…」

と、意地でも側を離れそうもなく、ここまでついてきたお米が、ふいと、どこへか帰ってしまったので、弦之丞もお綱も少し案外だったが、そのまま小急ぎに梯子段を上がってみると、櫛くし巻まきに結ゆつて年増の女が、何か、物思わしげに、しよんぼりとうつつむいている。

万吉の女房であった。

お吉きちは今朝、平賀源内の使いにおどろかされて、初めて、良人おっとの凶きよう変へんを知った。

で、取るものも取りあえず、小橋村おはせの彫刻師の家に寝かされている万吉の容体を見に行つたのであるが、かすかに意識づいてきた万吉が、しきりと気にかけてやまないの、これの口から船宿の所をきき、ようよう尋ね当ててきたわけであるという。

「さては」

聞きつつも、弦之丞、無念そうに唇を噛みしめた。

「やはり、案じていたに違わず、お十夜や天堂の詭策に陥ちたのであるか。ウウム……」
と、暗涙をのんで愁然とした独りごと——「傷はとにかく、あの男の気性として、ここまで来ながら落伍しては、さだめし、それが無念にたえまい。ああ遺憾至極」

思わず拳が膝にふるえる。

おのれ、今に見よと、あらぬ方に耀くかれの眼に情恨ふたいろの血の筋が走る。

ともあれ一刻も早く慰めてやりたいと、あわただしく湯漬を一碗かつこんで、宿の亭主に小舟を頼み、京橋口から猫間川をのぼって、小橋村黙蛙堂の家へ馳せつけた。

静かな茅葺屋根の家に、万吉は仰むけに寝かされていた。

裏に梨の花が咲いている反映のせいか、かれの皮膚もそのように蒼白い。

「あまり本人の気を立ててはいけなないと、源内様がいつておりました」と黙蛙堂が心配している。

「……………」

皆、目でうなずくばかりだった。

お綱は涙をうるませていた。一月寺いちげつじにいた時のことや、旅途中のことなどが、そんな中で、思い出される。

相談の上で、万吉の体は、やがて蒲団ふとんぐるみ、そつと戸板へのせられた。そして、あいにじ哀あいにじ寂やくとした夕暮、その戸板を黙々として守る人々が桃谷のかれの家へ移つて行つた。

その晩、早速源内も来てくれた。

傷を洗い金創きんそうを巻きかえなどされて、幾分気がハッキリしてきたが、万吉は夜になつてしきりに昂奮きんそうしだした。

だが、深い話はできないらしい。弦之丞もなるべくそれを避けていた。無論、十九日の晩に、いよいよ四国屋の船に乗つて、阿波へ立つということなどはおくびにも出さない。

まだ未来にどれ程な艱苦かんくはくがい迫害はくがいが待ちもうけているかは逆睹ぎやくとしがたいが、その決定だけでも話してやつたら、さだめし万吉喜ぶだろう、耳に入れてやりたいのは山々で、聞かせてやれないのは辛いことだ。

それを知つたら、おそらく万吉の気性として、ジツと傷の癒いえるのを待つてはいまい。利きかない体を無理にでも寢床から這はいだすだろう。そして、憤死ふんしするかもしれない。

お綱は寝ずに看護をしていた。

弦之丞もその枕元を離れ得なかつた。けれど、船出の十九日は、もう明日あすの夜とまで迫つてきた。

所詮しよせん、万吉は残して行かねばなるまい。罪のようだが、ある時期まで、それをいわずに、黙つて立つよりほかに道はない。

何かの支度もあるし、留守の間に、また四国屋のほうから手筈の都合を知らせてきてあるかもしれないので、そのほうも気が気ではなく、弦之丞はお綱とお吉にソツと言いふめて、先にひとり桃ももだに谷から帰つてきた。

十八日の晩である。

明日の夜の今頃は、もうこの大阪を離れている。

阿波へ指して行く船のうちに暗い海風を聞いているのだ。

と思うと、かれの胸は躍つてくる。耳には紀淡きたんの潮ちようおん音がきこえてくるような心地もして。

「だが……」

とまた口惜くやしまれるのは万吉の落伍らくご。

ふり仰ぐと空いちめんに星がある。

六根清浄、六根清浄、そうして、人生の嶮路を互に手をとり合つてきた道づれが、途中で凍えてしまったようなさびしさを感じた。

蜘蛛かがり

重喜が居城へ帰つてから無人になつてゐる安治川屋敷は、大寺のように寂としていた。白髪のお留守居とお長屋の小者が、蜘蛛の巣ばかり取つて歩いている。

で、誰にも遠慮のいらぬこの侍部屋は、目下、天堂やお十夜や周馬にとって、またなきねぐらとなつてゐる。

三人よれば文殊の智慧というけれど、この三人、寄るとさわると酒なので、智慧の出るひまもなさそうだ。

ゆうべも酒。けさも酒。

その酒びたりに倦み果てて、やがてけだるくなると、お十夜は手枕をかい、一角は餚のように柱へもたれ、周馬は徳利を枕にして仰むけに寝ころぶ。

「鳴りをひそめているということは、何となく面白いな」

と、周馬がいった。

近ごろ新しくできた一個のニキビを疣いぼのように気にしながらする。

何か目算が立つて居きよちゆう中悠々としているものごとく、天堂一角が朗吟くちよう口調で、

「——山雨将さんうまさにいたらんとして、さ」

と、つぶやくと、お十夜が周馬の口を写して同じようなことをくり返した。

「そうよ、鳴りをしずめているツてやつあ面白れえ」

そこでまた、気けだるくみんな黙もくつてしまふ。

あくび、眠気、いやな鳴りをしずめたものだ。

だが三人のうなずいたのは、まさかそんな陶酔とうすい気分をいったのではあるまい。すでに、高津こうつの舞台から、法月弦之丞の姿さえ見ているのだから、いかな耽溺たんできか家にしても、なにか成算がなければ、こう悠々ゆうゆうと構かまえてはいられないはず。

そのうちに周馬、ニキビへ来る蠅はえをやりきれないように追つて、仰むけから腹はらン這はいになつた。

「もう飲まないのか」

「ああ、目にもたくさんになった」

「飲みちらした残肴ざんごうというやつは、まったく嫌なものだ。見ていると浅ましくなる、早く片づけてしまおうじゃないか」

と周馬は起き上がったが、孫兵衛は目をふさいで横になったまま、

「もてあそんだ後の女が、邪魔くさくなるのと同じだ」と、いった。

「お綱でもか？ あの子を手に入れても」

「さあ、そいつあどうだか分らないが、今まで手にかけてた女はみんなそうだった」

一角はまた猥談わいだんかというふうになんげすんで、

「片づけるなら、宅助を呼んだがいい」

「あいつ、そこらにいるかしら」

「最前、お長屋で門番と将棋しょうぎをさしていたようだ。その窓から大きな声をして呼んだら聞こえるだろう」

と一角が顎あごでいった。

周馬はちよつと癩しやくにさわったように唇くちをゆがめた。こんな時、いつでも一角の倨傲きよごうとお十夜の凶々しさから、自分が立ち用をさせられるのが不満なのだ。

(よし、おれも一角のように構えて、お十夜のように凶太くなっていよう)
 かれは常に心のうちで、そういう工合ぐあいに修養しようと要心ようじんしながら、ツイ自分から口をだしては、自分から用を求めてしまった。

(まあいいわ、今にだ、今におれの真価も分ることだ。旅川周馬様、それ程のご人物であつたかと、あとでこいつら、眼の玉を白くする時節があるんだ)

こう思つて、周馬はいつも不満をさすつた。で、今もちよつとむツとしたが、

「お、呼んでやろう」

気軽にいつて、切窓きりまどから邸内を見廻した。

通用門から御用口までの広い間に、きようは蜘蛛くもの巣取りのお留守居役も宅助も見えなかつた。で、かれは、そこからお長屋のほうへ向つて、

「宅助ツ——、宅助はおらんか——」

大きな声をくり返していた。

すると、通用門の袖そでから、ふたりの立派な侍が、邸内へ入ってきた。

ふたりの侍、門番がない門小屋をのぞいて、不審な様子をしている。

周馬はそれにかまわず、なお大きな声を送っていた。

やっと、それを聞き止めた宅助と門番は、さしかけていた賭将棋かけしやうぎの駒をつかんだまま、びつくりしてお長屋の端から飛びだしてきたが、

「あっ」

と、出会いがしらに、たたずんでいた侍にぶつかって、握りこぶしの持駒、金、銀、桂馬、バラリとそこへ撒まいてしまった。

「や……おや」

と、あきれた顔をして、侍のひとりのほう。

「貴様は宅助ではないか、どうしてこんな所にいるのだ」

と、ジロジロ将棋の駒と宅助の顔を見くらべた。

そこで宅助がしきりに恐縮している様子なので、侍部屋の窓に寄っていた周馬、一角をふりかえって、

「誰か知らぬが、見なれぬ侍がふたり、いやに横柄おうへいに邸内へ入ってきたぞ」と教えた。

「ふう……どんな奴？」

周馬と顔をならべた一角も、そこから向うを見てびつくりした。

「こりやいかん。早くそこらの皿小鉢を片づけよう、おいお十夜、掃除だ、掃除だ、その酒の徳利を隠しておけ」

「なんだ、たいそうあわてるじゃねえか」

「殿様の見目みるめかぐはな嗅鼻がやってきた」

「お目付か」

「なに、居候だ」

「居候？」

「ウム、いつか話したことのある、阿波の国の居候、たけやさんみきよう竹屋三位卿だ」

「ほう……」と孫兵衛も立って、

「もうひとりのほうは？」

「あれが森啓之助、宅助の主人だ。きやつめ、お米よねをうまくやっておきながら、いやにきまじめな顔をして宅助を痛めておるわい」

「門番も叱られているな」

「今に、ここへもやってくるかも知れない。居候だが名門なので、殿様へ向って何でもし

やべるから始末が悪いのだ」

「ふたりが揃ってやってきたのは、何か国元に急変でも起こったのじゃないか」

「なに、暇に任せて、ちよつと様子を見に来たのだろう。先日竹屋卿からの手紙を何げなく見ると、封には天堂一角先生などと書いて、中には、まだ弦之丞が討てぬのかなど、極端に拙者を辱めてあつた」

「皮肉なやつだな。しかし、公卿にしちやあ話せるほうだ」

「話せないのは森啓之助だ。あいつ何しに来おつたのだろう？ ははあ、お米のことが気になって、うまく竹屋卿の腰に取っついてきたな、いずれ、何か吾々の仕事にかこつけてまいったのだろう」

ささやいているうちに、竹屋卿は啓之助をつれて、脇玄関のほうへスタスタと入ってしまつた。

宅助は押ツ放されたように、こつちへ飛んできて、

「天堂様、ひどい目にあつちまいました」

と、侍部屋へいざりこんだ。

「どうした」

「まさか、やってこようたア思わなかつた」

「真ツ先に、お米のことを問い詰められたろう」

「いいえ、そいつア側に竹屋様がおいでになつていたので、口にや出しませんでした、イヤに言葉の端でこずりながら、グツと睨みつけられました。睨まれるのは怖くはねえが、ほれ、あとのご褒美ほうびてやつにかかわつてきますからね」

「は、は、は。だがお米の居所も、およそ弦之丞の周囲と見当がついているのだから、もう心配はあるまい」

「けれど、その弦之丞を、早くあなたがたの手で、眠らしてしまつて下さらねえうちは、どうにもはなはだ困るんで。エエ、いずれ今に、人のいない所へ呼ばれて、旦那からお米はどうした、お米お米と、お米の化け物みてえに責められるに違いねえ。ああ困つたな。どうしましょう、天堂様」

「啓之助の困かこい女ものなどを、拙者たちが知つたことか」

「おつしやるとおりでございます、他人ひとの樂しむお妾なんぞは、なるだけ逃げてしまつたほうが気味がようございますからね。ですが、わつしは追目おいめの賽さいで、この目がポンと出てくれないと、虻あぶ蜂はちとらずの骨折り損、ない身代をつぶしますよ。ひとつ、宅助を哀れと

思つて、なんとか助けておくんないまし。その代りに働きますぜ、エエどうでも、皆さんの顎次第(あご)にクルクル飛んで歩きます。先一昨日(さきおととい)だつてそうでしょう。高津(こうづ)の宮(みや)へかかった時、わつしがお米を見つけたからこそ、だんだん糸に糸を引いて、弦之丞の居所やお綱の様子も分つたというもんで……。いずれ皆さんが、それを知りつつ、手を下さずに、シンと鳴りをしずめているのは、さだめしもう彼奴(あいつ)を、殺(ばら)してしまう寸法がついたんでしようが、そのキツかけを見つけた手柄(てがら)者の宅助は、まだいっこう目鼻がつきません。その手がかりをつけた功に愛(め)でて、ねエ天堂様、ついでにお米も」

「おい、虫のいいことをいうな」

と周馬がからかうように、

「その手柄者は貴様ではない、高津の宮の遠眼鏡(とおめがね)だ」

「あ、なるほどネ」

と、頭をかいたが、如才なく、

「お願いしますよ、この通り、旅川様、お十夜様」

「うるさい奴だ」

苦笑しながら、皆ぞろぞろ次の部屋へ立ちながら、

「刷毛はけついでがあつたらなんとかしてやる。だから、そこをきれいに掃除しておけ」と襖ふすまをたたてた。

「けっこうです」

と宅助、不精ぶしようをいわずに働きたした。

「弦之丞とお綱を片づけるその刷毛ついででけっこうです。どうれ、おれも掃除の刷毛ついでに……」

と、二、三本徳利の目量めかたを計ってみて、残っている爛かんぎましを、鼻の先へ捧げてくる。

「あるな。もつたいない」

ごくり、ごくり、と酒の入ってゆく宅助の喉のどが、百足虫の腹のように太った。

「おい宅たくベエ、うまくやつてるな」

後ろで声が出たので、酒の雫しずくを拭きながらふりかえってみると、さつき賭将棋かけしょうぎをやっていた相手の門番、伊平いへいという老爺おやじである。

「どうだ、おめえも」

「爛かんぎましじゃ、承知ができない」

「冗談けんたんいうねい、あの将棋はこわしじゃねえか」

「それじゃないよ。オイ宅さん、お前もなかなか隅へおけないね」

「な、なぜよ」

「ちよつとおいで、いいものを握らせるから」

「いやだぜ、小気味が悪い」

「これでもかい」

と門番の伊平、今、使屋が届けてきた女文字の手紙を、宅助の鼻の先へ見せた。

「おや」

見ればお米の手筆である。

封へにじんだ口紅も憎らしいが、あの女が、宅助さまへ——とはどういう風の吹き廻しだろう。

お米から、あのお米から手紙とは、ちよつと思いがけなかった。

宅助はなんだか、寝返りを打った自分の情婦から来た文でも見るような気がして、封を切った。

だが、読もうとする前に、眉に唾をつけるくらいな戒心で、

「こいつあ、あぶねえ」

と小首をかしげた。

「おれに毒をのませてまで、振りきつて逃げた女が、宅助様へ——と猫撫ねこなで手紙をよこすというのは少し変だ。ははあ、この間から、弦之丞に会っていやがるんで、それでなんだな、何か計略をかけてきやがったな」

まず、気を締めしめてから目を通した。

さらさらと文字は軽く書いてあるが、宅助は眉しわに皺しわをよせて洩じゅうどく読どくする。

「ええと、なんだッて。——いまさらかような文を筆にするもまことにおはもじとは思ひるまれ候えども、逢うべき面おもてはなおさらなく。チエツ、何を寝言ねごとをいってやがるんで、おはもじ面づらが聞いてあきれら」

いい加減に間を飛ばして、ぱつぱとしまいのほうを読んで行つた。

「——そのため初めて人の無情つれなさをしみみ身に知り申し候、まったく一途いちずに思いつめて心の知れぬ人の許もとへ走り候ことはかえすがえすも私の過あやまり、薄情な男に会あうて今さら旦那様のお情けやそなたの親切も、はつきり夢のさめたるように分りたる心地——だッて、ふん、ざまを見やがれ」

と、ここで宅助、溜飲りゆういんをさげた。

「断られやがったな、弦之丞に、ポンと肘ひじを食やがったんだ。そこでおはもじながらと来やがった。かえすがえすもおいでなすった。逃げた女の出来合できあい文句よ、あっちへ行つて肘をくつたから、こつちへコロコロ戻りますなんて、そうは問屋でおろさねえ」

と宅助のひとりごと、いつか森啓之助にのり移つて、自分が旦那の腹になつてゐる。

「断られるにやきまつていら。法月弦之丞は今そんなことをしていられる場合じゃねえ。いや、弦之丞も人間だから、そりや、大望の途中にだつて、痴話や口説くせつもやるだろうが、お綱という女がついてゐる。ははあ、それでお米も目がさめたんだな。そうだ、そうに違えねえ。うむ、まだ、何か泣き言が並べてあるな。なんだつて、……死ぬ、おや、死……」

手紙にしがみついて、終りの二、三行を幾度もくり返した。

旦那様へのお詫びに死ぬ——と書いてあるように読める。墨がかすれていて読みにくい、おまけに最後の折目からサラサラと少しばかりの髪の毛が落ちてきた。

「おや、いけねえ」

宅助は少し寒くなつた。

「遺物かたみまで入つていやがる。死なれちや玉たまなしだ」

それをふところになじこんで、門番の伊平の所へ駈けてきた。この手紙を持つてきた使屋は？ と聞くと、返事はいらぬといつて、すぐに帰つてしまつたという。

「どつちへ行つたらう？」

「そいつは気がつかなくつたが、いずれ、この屋敷を出て行くからには、春日道か新堀の渡舟へ出るにきまつている」

「なるほど、で、服装は？ 年頃は」と仔細を聞いて、あたふたと通用門の潜りから飛び出した。

使屋の服装は目につくので、七、八丁行くと追いついた。その男に、この手紙はどこから頼まれたかと聞くと、松島の水茶屋に休んでいる年頃の女で、返事はいらぬといつたが、まだ駄賃は貰つてないから、私の帰るまでは奥にいるでしょうということだった。宅助は使屋と一緒に渡舟へ乗つた。

渡舟の中でかれはまた、

「待てよ、こいつが何かの策じゃねえかしら」

と、考えなおしてみた。

だがお米の平常を思うと、血の病を起こして泣いたり、わがままをいつて飛び出した

り、平気で帰ったりすることは、阿波にいた頃からありがちで、それに、こんな手紙をよこして、こつちを計る必要が考えられない。

「もう逃げているんだからなア——」

ゆるく体を動かされながら顎をおさえた。

自分は外に待っていて、その使いに、言づてをした。

水茶屋へ入って行つた使屋の男は、しばらくして、宅助の所へ帰ってきたが、

「あの、お目にかかるのが嫌だつて、どうしても出ておいでになりません」

「おれに会うのが嫌だつて」

「あ、違いました。その、面目ないというふうにいいましたので」

「そうか。駄賃は貰つたかい」

「エエ、ちようだいいたしました」

「じゃ、いいよ、ご苦労様」

と、使屋を帰しておいて、宅助は、水茶屋の青すだれから奥を覗いた。

尻無川を裏にした小粋な四畳半に、うしろ向きになっていたのがお米だった。

会わないというのを無理に、宅助はその水茶屋の奥へ通った。

「あら、わたし、どうしよう」

穴でもあつたら入りたいような姿態しなをして、お米は、袂たもとと一緒にうつ伏した。そして、
「宅助や。わたしは、旦那様にもお前にも合せる顔がない。すまなかつた……すまなかつたよ」

すすり泣きに泣きじやくる。

「お米さん。じゃお前は、ほんとに眼がさめたというのけえ。まさか、いつもの手管てくだじゃないでしょうね」

「もうそんな、痛い傷にふれておくれでない。わたしは、お前へやった手紙にも懺悔ざんげしたとおり、すっかり覚悟をしたのだから」

「ふうん……まったく、眼がさめた、悪かつたとおっしゃるんで」

「つくづく自分の浅慮あさはかさが分つてきたよ、こうしてお前にみじめな泣き顔を見られるのさえ、わたしは死ぬよりなお辛い」

「死のうなんて、悪い覚悟でさ。わつしも一時は赫かつとして、見つけ次第にと恨んでいたが、
そう優しくやさいう者を、なぶり殺しにするようなことはしますめえ。自分が悪いと気がつい

たなら何よりの話、わつしの役目もすむわけですから、一緒に阿波へお帰んなさいな」

「いくら私があつかましくても、あんなわがままな真似まねをしておいて、今さらお前に……」

「なに、わつしはかまやしません。別だん、旦那の見ていたことじやなし、どうにでも、この宅助が内密にしておきますから」

「ア、ありがとう……」と、身を起こしたが、袂たもとは顔へ当てたままで、

「……宅助、ありがとうよ。怒りもせず、お前が優しくいつてくれればくれる程、わたしや、あの時のことがキリキリと胸を刺して」

「もうお互いに、そんなことは言いつこなしさね。お米さん、仲なおりに一杯やって、ひとつさばさばしようじやございませんか」

宅助はまず九分までお米の悔悟かいごを信じた。

手を鳴らして女に酒を頼んだ。心得ている出合茶屋なので、酒を運んでくると、川に向つたほうの簾すだれをおろし、御用があつたらお手を、と行って仕切襖しきりふすまを閉めきつて行く。

廂ひさしに赤々とした夕陽が照っている反対に、部屋の中は薄暗く感じられた。

「——気晴らしの妙薬、さ、おひとつおやりなさい」

と、盃洗はいせんの水を切つて、お米に向けた。

「お酒かい……」

気のすすまない顔をして、

「よそうよ」

「そんなことをおつしやらずにさ。これにや、鼠薬は入っつていやしませんぜ」

「お前は、まだそれを遺恨に思つてゐるのだろう」

「こいつは、悪いことをいいました。自分から水に流そうと誓つておきながら……。もう決して申しませぬ、さあ酌つぎますぜ。くよくよは虫のお毒、すなおに阿波へさえ帰つてくれれば、もう何の文句もありません。さ、お持ちなさいよ、盃さかずきを」

「じゃ、ほんのポツチリ……」

銚子ちようしの口と、盃のへりがカチと触れた。

しばらくすると、宅助、少し居くすざんまいを壊くずしてきて、白眼を赤く濁にごしている。

ちびりちびり飲みながら、初めのうちは、微細な注意を払はらつて、お米の懺悔ざんげの真偽を観みぬこうとしていたが、そのうちにその眼が、かつて気がつかずにいたこの女の美を発見して、すっかり心をとろかせた。

顔にも襟にも、彫ほりの深い感じがある。青味の白粉おしろいに、玉虫色の口紅、ひどく魅惑的

で、そして弱々しい病的な美だ。それは、決して肉感的とはいえないものだが、なぜか、男にひどい力を思い起こさせる。

「——これだな」と、宅助に分った気がした。啓之助が、この女に引きずりひん廻される所以ゆえんのものは、旺盛な若さを病魔が彫り削けずつた美貌であった。さらにその病魔に手伝おうとする男の残忍性であった。

宅助は、今日まで戒いましめていた心を自由にあおつて、のびのびとお米を眺めた。

「あら……」

お米は部屋の隅へ、ズ、ズ……と押されていた。いきなりだったので、どうしようもなかったが、力の差では争えなかった。

「な、な。……旦那に内証ないしょうにしておいてやるからよ。俺にだって、いいじゃねえか」
抱きあまるほどの腕の中に締めつけられて、お米は顔を振り動かした。

少し醒さめた顔をして、お米と宅助は水茶屋の軒を出てきた。

松島田んぼの宵闇よいやみがひろびろと戦そよいでいた。

まだ蛩ほたるは出ないナ、と思うぐらいな風の味が感じられる。ふたりは疲れた歩き方をして

いた。

「お近いうちに」

送りだす声を後ろに聞いて、宅助はニヤリとお米の顔を見た。意味のこもった目なのである。だがお米は、たつた今のことを、忘れたように取り澄ましていた。

「ヘン、なにもしないような顔をして！」

はら
肚の中で宅助はつぶやいた。おかしい、くすぐつたいような気もした。

そして、女というものの持つ両面をすっかり観破したように思う。どうして、今あんなことをしながら、もうこういうふうに澄ませるものか、と感心した。

だが、俺にやもう駄目なんだ——その片面を見せちまったんだから——許してしまったのだから、ふふん。

「ああ、いいあんべいに酔いがさめてきた。じゃお米さん、俺は屋敷へ帰るからね^{けえ}」

「じゃ、私はこれから四国屋へ行つて」

「うむ、船のほうの一件を、よく頼んでおおきなせえ。そして、明日の晩こそ、時刻をたがえず、船の出る所へ来ていなくつちやいけませんぜ。わっしもそこへきつと行くから」

「大丈夫だよ。けれどねえ、お前……」

ふわりとお米が側へ寄つてきた。覚えのある肌の匂いである。で宅助、
「う？ ……」と返辞が甘くなつた。

「啓之助様が来ているつていうことだけれど、話しちや嫌だよ」

「なにをです？」

「あそこでのことさ」

「とんでもねえ、誰がそんなことを、自分からしやべるやつがあるものか。御主人様の思ものい女と、ちよつと、変になつて、何したなすべンておくびにも口をすべせようものなら、それこそ笠の台が飛びまさあ」

「じゃ、阿波へ帰るまで、何にも知らない顔をしてネ」

「万事は、わつしが心得ています。だがねお米さん、向うへ帰ると、もう小ぎたねえちゆう仲げんなんかは、ごめんだよつていう顔をするんでしょう」

「宅助、そりやあ、お前のことじゃないか」

「おつ、いてえ」

「行き過ぎわたしやしないかえ、渡舟わたしの前を」

「そうだ。じゃ明日の晩にまた——」

小戻りをして渡舟の中へ飛び込んだ。

そこで、宅助と別れたお米は、反対のほうへ足を向けて歩きだしたが、ふとふりかえつて、

「ちイツ……気色が悪い」と舌打ちをしながら襟前をかき合せた。

「あいつときたら、転んでもタダ起きないのだから嫌になってしまふ。人が狂言に涙をこぼせば、その弱音にツケ上がり、いい気になって、とうとう私にあんな真似をしやがつてさ……」

と、赤い唇を舐め廻して唾をした。

木津の水を越えて、いつか堀江の町へ入っていた。

その姿が、人混みにまぎれ消えたかと思うと、やがて、急いでゆく町駕の垂れから、お米の裾がはみだして見える。

「……これから四国屋の店へ行つて、明日の船へ便乗を頼んでおいてから、すぐに駕を急がせれば、今夜のうちに、弦之丞様に会う時刻があるだろう……。どうしても、阿波へ帰る前に、もういちどしみじみと会つて、何かの話をしなければ……。嫌な奴に身をまかせたり、嫌な所へ帰るのも、みんな、あの人のためと思えばこそ」

駕は、こんな考えを乗せて、廻船問屋の多い河岸ぶちを駈けていた。

四国屋の前へ着くと、お米は、阿波での顔見知りである、ここのお久良を思いだして、店の者に取次いで貰った。

「御寮人様なら、寮のほうにおいてでございませうから、そちらへお廻り下さいまし」

店の前で、荷造りをしていた者が、金鎚を指して、土蔵ならびの向うに見える黒塀を教えた。

宅助は、ふらりと、安治川屋敷へ帰ってきた。

屋敷の奥を覗いて見ると、三位卿を中心に、森啓之助、天堂、お十夜、周馬の五人が、ひどく厳めしい容態で、なにやらひそひそと密議をしている。

「いいあんばいに、お人払いの最中らしい。どれ、この間に少しお疲れを休めなくっちゃ

……」

仲間 部屋へもぐり込んで、牛のようにゴロリとなった宅助、天井の闇へ鼻の穴を向けながら、お米の頸の白さを描いた。

三位卿に呼びつけられて、その人を中心に、何やら額をあつめていた書院の席では、よ

うやく密議のけりがついたらしく、各 《めいめい》して、足のしびれをさすりながら立ち上がった。

有村の若い声は、例の調子で、

「では、明夜の手筈、ぬかりなく心得たであろうな」

と、立つた所で、四人の者を見廻した。

あだかも、自己の家来でも願使するように、

「こんどこそ弦之丞めを刺止めてしまわねば、絶大な恥辱じや。近く同志の公卿や、西国からも諸大名の密使が、ある打合せのために、徳島城へ集まろうとしている。この秋にこそは、いよいよ天下多端、風雲急ならんとしている時じや」

少し話がそれてきたが、有村の熱と気魄にひき緊められて、なんとなく森厳な気もちにさせられた。

「その大事を目睫にひかえて、先にもいったとおり、殿には無稽な伝説などに囚われて、心神衰耗の御容態、また折も折に、俵一八郎の死と築城中の出丸櫓の崩壊とが暗合したので、いよいよ気を病んでいられる。そんなことから、もし倒幕の鋭気がくじけるようなことになつては、一天のおんために、また悪政の釜中にあえいでいる下々の

ためにも、悲しむべきことといわねばならぬ」

こういう意味のことは、さつきから密議のうちにもたびたび聞いた。と四人は少しくたびれを感じたが、三位卿の話には、いちいちこの慷慨淋漓こうがいりんりが必要であった。

「せめて天堂一角。早く、弦之丞を討つたという快報でももたらしてくれば、少しは、殿の気色けしきも引き立とうかと、心待ちにしていたが、いつまで何らの沙汰もないので、もしもまかりまちがって、この場合に法月弦之丞が、阿波へ潜入することでもあつては大変と、実は心配のあまり、殿にも無断で、啓之助をつれ、ここへ様子を見にまいつた次第——」

と、恐縮している一角を見すえた。

「時刻もそろそろ遅くなりますから、なるべく、御簡単に、ここを切りあげて」

と啓之助が注意をした。

「うむ」と、三位卿はうなずいたが、

「とにかく、まことにいい潮時に出向いてきたというもの、明日の夜、四国屋の商船あきないぶねへその弦之丞めが何も知らずに乗りこむとあれば、魚みずから網へ入ってくるようなもの

じゃ」

「討つ機会はたびたびであつたが、必殺のところを狙つて、こんどこそは遁のがすまいと、わ

ざと鳴りをしずめていた吾々の苦心は、それこそ、門外漢にはうかがい知れぬものでござった」

一角は、三位卿の加勢に対して不快はないが、決してきょうまで無為むいにいたわけではないという意味をチラと、ここで釈明しておいた。

「大きにその必要もある」と、有村はうけいれて、

「せつかく、魚みずから網に入ってくるものを、騒ぎ立っては沖へ逸いっしてしまうだろう。

この上とも、せいぜい明日あすの船出までは、鳴りをひそめていることじゃ。ところで——手分けの部署は今いったとおり、一角は孫兵衛と周馬をつれて、お船蔵の川番所に、きょうから出てゆく船を油断なく見張っているように」

「承知しました。そのほうはお心おきなく」

「夜半よなか、明け方などは、ことに注意いたしてしてくれ。もっとも、わしはこれから啓之助を連れて、一応、四国屋の奥に身をひそめている。都合によっては、そのまま向うに止まつて、船の出る明夜まで屋敷のほうへは帰らぬかもしれぬ」

「で、万一小お帰りのない時は？」

「わしと啓之助とは、向うから四国屋の船に乗りこんだものと思っておれば間違いない。

そして、船が当家の川番所の前へかかった時に、そち達がいっせいに、船ふな 検めと称して、中へ乗りこんでいる者をはじめ、積荷から船底までくまなくただすことになる。その前に、十分わしも怪しい奴を睨んでおくから、万が一にも取逃がすことはなからう」

三位卿が兵書の中から理窟をひいて、これなら必ず弦之丞とお綱を刺殺することができるといふ蜘蛛くもかがりの妙策はそれであった。

なるほど、策はいい、天魔といえども、これなら断じてのがしつこない手配だ。

けれど天堂はもちろんのこと、周馬やお十夜にしてみれば、骨の折れたのは今日までのことで、何も今になって若いお公卿くげ様の指揮はいらざることと思つた。せつかく春夏たがやの耕しに汗水しぼつて、秋の収穫とりのいれを他人にされてしまうようなものだ。

そういう不平はあつたが、はるばる徳島から来た助太刀を断ることもならない。また、三位卿の手出しがあつたにせよ、いずれ弦之丞を刺殺すれば、その手柄は三人の上に認められるのだ。こう考えて、一角、周馬、孫兵衛の三人は、永らくとぐるを巻いていた侍部屋から、お船蔵の川番所のほうへ移つてゆく。

今夜から明日あしたの晩までは、交代で寝ずの川見張。

「また、酒がいるな」

と、お十夜が言った。

呉越同舟ごえつどうしゆう

隙を見て森啓之助は、あたふたと仲間ちゆうげん部屋を覗のぞきに來た。そして、真つ暗な中に正体もなく寝そべっている躰いびきを聞きとめると、

「宅助、宅助」

手荒く揺ゆすぶって、

「起きろ！ これ、起きろと申すに」

と、耳たぶを引ツ張った。

「あ、あ、むむ……」と、伸びをしながら身を起こした宅助は、喉のどの渴かわきと耳の痛さを一緒に知った。

「やつ、しまった、旦那様でしたか」

「拙者の目から放たれているのをよいことにして、また酒ばかり食らっているの」

「どう致しまして、なかなかそんなところじゃございません。あのお米に、いえお米様に

や、どれほどでこずったか知れやしません」

「そのために付けてやったそちではないか。だのに、何でこんな所にウロついているのじや」

「高津の宮で、天堂様にお目にかかりましたところが、やあ宅助か、ぜひ一日、安治川のほうへも遊びにこいとおっしゃったもんですから」

「たわけめ、あの一角などがそちにろくな智慧をつけおりはしまい。それよりお米はいかがいたした？ お米の身は」

——そうらおいでなすった、と宅助は肚はらの中でおかしく思いながら、お米は今夜大津の叔父の所へ暇いとまご乞いに行つて、明日の晩は、自分と四国屋で落ちあう約束になっている——と出まかせにいいくるめて、

「へい、ご心配にや及びません。この宅助が、はばかりながら、抜け目なく睨んでおります」

と安心させた。

「そうか、それならよいが、しかし、ここにちよつと困ったことが持ち上がっているのじや。宅助、何かうまい才覚はないか」

「お話しなすツてみて下さい、啓之助様のふところ刀、智者の宅助が頭をしぼってみようじゃございませんか」

「ほかではないが明日の晩あす」

「へい、明日の晩？」

「十九日だな」

「今日は十八日ですから、多分あしたは十九日でござんしょう」

「四国屋の商船あきないぶねに法月弦之丞が乗りこむことを知っておるか。かれのほかにもう一人、お綱とやらしい女も一緒に、それへ便乗しようとしている彼らの企みたくらを、存じてはおるまい」

「冗談いっちゃいけませんや」と、宅助は少し反そつて、

「それを最初に嗅かぎつけたのは、この宅助でございます。へい、わっしが探つて天堂様へ教えてやったことなんで」

「そうか、きやつめ、いかにも己れの手柄らしく話しておつた。でそのことだが、明夜そちやお米もともにあの船へ乗るとなると、三位卿や拙者と同船いたすことになるのだ」

「へえ、それじゃ、旦那や有村様も、あしたの晩阿波へお帰りになりますので？」

「いや、帰るが目的ではないが、弦之丞を取押えるために、今夜から四国屋へ潜ひそんでいて、そういう手段をとるかもしれないという相談になっておる。で万が一にも、三位卿と一緒になった場合は、なんとかしてお米をそれと知られぬように工夫をつけておかねば困る」

「なるほど、お米様やわつしが、三位卿様に見つかっては、その場合よろしくないとおっしゃいますので、ごもつともです、あのお公卿くげ様からまた殿様へでもしやべられた日には大事おおごとですからね」

「そうじゃ、そこを抜け目なく心得ておいてくれい」

「そもそもお米様のことについてちや、ずいぶん初まりから心得通しでございませぬ。お国元へ帰けえつたら、たツぶり……レコは……旦那のほうでもお心得でございませうね」

その時、通用門まで出てきた竹屋卿は、待たせておいた啓之助の姿が見当たらないので、

「森！ 森！」

としきりに向うで探している様子。

「はっ、只今、只今」と啓之助。

外の声に急せかれながら、紙入れを取り出して、せかせかと二朱金の粒よを撰り、

「それ、これは当座じゃ」

と宅助の手へ握らせたが、出し惜しみをした紙入れのほうから、チリンと、二、三枚小判が^{すべ}こつた。

「ほい」と宅助は腰を浮かして、

「この通りのお気前だから——」

如才なく土間へ下りて、その小判を踏んづけながら、

「命を投げて、御奉公のためならという気になつてしまいますよ。おツと旦那、^{じゅばん}襦袢のお襟が折れております」

追いつ出すように、^{ちゆうげん}仲間 部屋の戸を開けてやった。

あなたの闇には、三位卿の影が動いて、

「おい、森ツ、森はどうした」

と、待ちじれた声をしている。

「はっ、只今、只今」

と、それに答えながら、駈けだして行つたかれの^{さかやき}月代に^{まげ}鬘がおどつて見えた。

四国屋のお久良は、手代の新吉が心からの^{いさめ}諫言を決して^{うわ}上の空に聞いてはいなかつた。

新吉が心配しぬいている通り、こんどのが悪く発覚すると、店の土台へ亀裂ひびの入るような破滅になるかもしれない。

それはお久良も承知していた。また法月弦之丞やお綱たちが、何のために阿波の関を越えようとするのか、それもうすうすは察していた。

「けれど、あの方たちには、木曾路でうけた御恩があるのだからね」

今も寮の奥で、お久良はその新吉を前にしながら、深い吐息といきをもらしている。

「そりや恩はありますが、お家様のように、そう義理固くお考えなさらずに、店の船へ抜け乗りをさせることだけは、態ていよくお断りなすってはどうかと存じますが」

「私の気性きしょうとして、そんな恩知らずのまねはできませぬ」

「じゃ、どうしても、明日あしたの船へ」

「ああ、何とかいい工夫をして、阿波まで乗せて行ってあげておくれ。それだけのことさえして上げれば、後はとにかく、私の心だけはすむのだから」

新吉は口をつぐんでしまった。そしてもう止とめるような諫いさめはしまいと思った。お家様は恩を楯たもとにとつて動かないが、お久良が江戸の生れだということに気づいて、恩という以外に江戸鼯びいき鼠ねずみな、一種の加担かたんがその心にまじっているのを覚さとったからである。

「よろしゅうございます。それ程までにおつしやるなら、なんとか思案をいたしまする」
 「どうか、いいように、計らつておくれ」

「その代りに、お家様、あなたは大阪に止まつて、今度の船でお帰りになるのはお見あわせなすつて下さい。さすれば、すべてこの新吉が一存でしたこととして、万一の時にも、お店にはかかわりないように言い抜けまする」

「万事お前に任せておきましょう」

「ありがとうございます。そうお任せ下されば、私の方寸次第ですから、よほど気軽にやり抜ける気がいたします」

「ただ案じられるのは、安治川を出るまでの間。えびす島には御番所があるし、蜂須賀様のお船蔵の前でも、いずれ厳しいお検めがあるに違いない」

「さ、私も、それを頭痛にやんでいるのですが……」と、新吉は腕をくんで、顔をふところへ突つ込むように考えこんだ。

「もしも大阪を離れないうちに、露頭ろけんするようなことにでもなると、わざわざ恩を仇で返したような形になりますからね」

「荷物と違つて人間ですから、よほどうまくやりませんと」

「何か、いい思案がうかばないものかしら」

明日の積荷に目を廻している店の忙しさをよそにして、お家様の部屋は、いつまでも静かに閉めきつてあつた。

ところへ、お米が寮の小門から、お久良に会いたいといつてきた。

お久良は、別な者を会わせて用談をきかせた。なんとかいい思案のつかないうちは、そうしていられない氣持であつた。

お米の用向きは、自分と仲間との便乗を頼みたいというだけで、阿波の家中から貰つてきた船切手も所持しているとの話に、それなら明日の時刻までに、大川岸の船待小屋まで来あわせて下されば、取計らつておきます、と答えさせた。

それから、明日の船出について、絶えず細かい用事がお久良の耳へ届いた。まだ一日の間があるのに、もうすぐに迫っているような氣忙しなさが、つきつきにその部屋へ運ばれてくる。

「あ！ お家様」

さつきから黙然と腕をくんでいた新吉は、やがて、不意に膝を打つて、

「よい思いつきがございました」

と前へ乗りだしてきた。

「えっ、いい考えがうかんできたかえ」

「これよりほかに策はございませぬ。というのは、その……」とお久良のうしろを指さして、

「京都の梅うめ溪たに右うし少しょう将しょう様から頼まれしてある、その三つの荷に葛つづ籠ら……」と言いかけて恐ろしさに唾つばをのんだ。

差された指につれて、お久良の眼もうしろへうごく。

そこには、雪のせせ笹ささの金ぎん紋もんを印いんした三つの青せい漆しつ葛つづ籠らが山形やまがたに積たかみかさねてある。このつづらは、すなわち京の堂どう上じょう梅うめ溪たに家けから、徳島城とくしまじょうへ送おくるべく、四国屋しこくやに託たくされたものだった。

暗黙あんもくのうちうちに、ふたりの心こころがうなずきあつた。

新吉しんきちは合あ鍵いをかぎ探たづねして、そのつづらの一個ひとつへ手をかけた。

「お家様！ お家様」

その時、あわただしい足音あしなをさせて、小間使こまぢが知らせてきた。

その小女こめは、阿波あまの家中うちが見えた時は早く奥おくへ知らせるように、と前まへからお久良おきよらに言い

ふくめられていたので、

「あの、今ここへ、竹屋三位卿というお方に、森様という御家中が通つておいでになりま
す」

と、おどおどした声でいった。

「えつ、三位卿様が？」

ふたりは、自分が離れた合鍵の音にギョツとした。

白い光の紋もんりゆう流りゆうは五ごの目みだれに美しく沸にえあがつて、深みのある鉄かねいろ色の烈しさと、
無銘ではあるが刃際はぎわの匂においが、幾多の血にも飽あくまいかと眺められる。

はばきから鈍ぼん子しまで、目づもり三尺ばかりな関せきの業わざ刀もの。

それが、灯明あかりの前に横たわっている。

藍あゐのような刀身からチカツと一波はの光もよじれぬほど、静かに、それを持ちこたえているのは法月弦之丞であつて、その切きツ尖さきと行燈あんどんの向うに、息づまったように坐っているのは川長のお米であつた。

ここは、京橋口の船宿、鯉屋こいやの二階。

少し風が強くなってきたのか、或いは、さしも夜更けてきたせいか、ドボリ、ドボリ、という川波の音が灯皿ひびらの細い焰ほのおを揺ゆするかに聞えてくる。

お米は今この二階へ上がってきたばかりであつた。四国屋へ行って明日あしたのことを頼んでおいてから、すぐとその駕かじをここへ廻し、そして裏二階へ上がってみると、弦之丞がただひとりで燈下とうげに刀の手入れをしている。

かれの眼が刀の肌に吸いつけられたまま、自分の姿が迎えられもしないので、お米はやや不平がましく、前に坐つたのであるが、氷のような光を見ると、駕のうちから考えてきた恋の言葉や媚なまめきも萎なえおののいて、ジツと息をのんでしまった。

早く鞆さやに入れればよいのに――

こう思いながら耐えていた。

けれど弦之丞はいつまでも、刃斑はむらにとどまる過去の血の夢に見入っている。もちの木坂で斬つて斬つて斬り飽いたあの夜の空模様は、なおまざまざとしてここに影を宿している。これから先もこの無銘むめいの刀が、幾多の血を吸うべき運命をもつのであろう。法月弦之丞という持主の白骨となる日が来た後も、人手から人手へ転々として、愛慾の血にぬられて行くに違いない。

そんな想像をえがくらしく、かれの眸が、ふと、お米のほうへうごめいた。お米は、なんとすることもなく後へさがらずにいられなかった。

凄艶な癩^{ろうがい}咳の女と刀の姿とが、その美を研ぎ合^とつて争うように見られたが、弦之丞は刀をやや手元へよせて、軽く打粉^{うちこ}をたたいていた。

その手のひまをながめて、お米は少し気が休まったように話しかける。

「あなたのおいっつけを守って、私もいよいよ明日^{あした}は阿波へ帰ります」

「……………」

弦之丞はうつむきながら、膝のわきを探っていた。ゆうべ一晩中水に浸^{ひた}しておいて日蔭干しにした奉書紙が、綿のように揉^もんである。

かれはそれを掌^てにとつて、軽く、刃^{やいば}を嚙^くませた。

指を切りはしまいかと、お米は女らしく危ぶみながら、

「あなたは？」といった。

「拙者も」

右手の刀をしごき、あざやかに拭き抜いて、

「——明日^{あす}は大阪を立つつもりじゃ」

「すると、やはり一緒の船でございますね」

それには答えず、鞆さやをよせて音もなく刃やいばを納いれると、階下したから梯子はしごのキシム音がして、

「お客様」

と、亭主の顔が暗い中に伸びて。

「この間も見えた四国屋のお使いが、ちよつとお顔を貸して貰もらいたいと行って、裏に待つておりますが」と、いつて降りた。

救われたように後あとについて立とうとすると、お米は急いで、

「あの、弦之丞様」と側へすがった。

「船はご一緒でも、私には宅助といううるさい者が付いていますし、阿波むこうへ行つても、また落ちあえるまでは、しばらくお別れでございます」

「それは、ぜひもない辛抱ではないか」

「ですから……あの今夜だけ、ここへ泊めて下さいませ」

「明日の支度もあり、何かと忙しい場合、悠々ゆうゆうと話などしている間まはない」

「でも、もう遅くなつてしまったのですもの」

「いや、そちの乗つて来た駕屋の音が、まだ表のほうでしている様子。早くそれで帰つた

がよい」

素げなく立ち上がったが、なお念を押して、

「ことにこの家のまわりにも、宵のうちから原土らしい者がウロついている。万一そちの不覚から、これまでの手筈を破るような場合には、もうふたたびこうして会う折はないぞ」

と、少し語気を強く言った。

お米はしかたがなく、帰りそうにした。それを見て弦之丞はトントントンと梯子を降り、裏口から外の闇を覗いて見る。

水口から少し離れた所に、苔のさびた石井戸があり、その向うに暗い笹藪がある。縞の着物をきたひとりの男が、こつちへ手招きをしてみせた。

「新吉か」

と、弦之丞が闇を透かしてゆくと、

「へい」

両方から影が寄り合った。

「何か明夜のことですか……」

「さようでございます。いよいよ雲行きがあぶなくなりましたので、それでお家様の」

注意から、ちよつとあなた様のお耳へ」

「ではまた何か、明日の都合でも変つたと申すか」

「いえ、そういうわけじゃございませんが」

弦之丞とともに、鯉屋の裏に立つた四国屋の新吉は、さらに声を低くして、

「実は今夜突然、竹屋三位様が寮へお越しになりました。で明晩のことについて、お家様も蔭ながらひどくご心配いたしております」

「や、あの若公卿が見えたと？」

「だいぶお疑いをもつてるらしいお口ぶりなので」

「さては早くも下検分にまいつたの」

「そうとも明らかにおっしゃりませんが、困ったことには、その三位卿と森啓之助様が、やはり店の船へ便乗させて貰いたいとおっしゃるのでございます。これはどうも断るわけにはまいりませんので、胸ではギクリとしながらお引請けしてしまいました。そこで明晩の手筈ですが、なにしろそんな按配で、ただお身装を変えたくらいでは、とても露顕せずにはおりませぬ」

「ううむ……いよいよ難儀が重なってきたな」

「そこで、少々お苦しいかもしれませんが、ふた夜ばかりの御辛抱、こうなすツたらいか
がであろうかと思いついた一策を、御相談にまいりました」

「その策とは？」

「京の梅溪うめたにけ家から徳島へ依託されました三ツの葛籠つづらがございます。それも明日あしたの便船へ
積みこむことになっておりますので、ひとつ、そいつをからくりして」

「しッ……」

といわれたので新吉が声をのむと、そのとたん、弦之丞しゆりの手裡しゆりを離れた小柄こづかが、キラ
ツ——と斜めに闇を縫ぬって行った。

ちようど小柄が届いたころ、井戸側の蔭で、ウームという人の呻うめき——忍び頭巾をまと
った影がゴロゴロとのた打って転げだした。

それは、かれが宵から察していた、阿州屋敷の廻し者であった。

ザアツ……とそよぐ笹やぶを透すいて、その時、駕ちようちんの提ひとだま灯ひとだまが人魂ひとだまのように向うを過
ぎてゆくのを見た。

新吉がうごめく侍に目を白くしている間に、弦之丞はお米があきらめて帰ったことを知

った。

* * *

「お綱……」

そつと門かどから呼ぶ者があつた。

いよいよ阿波へ立つというその日の黄昏たそがれ。

薄暮の色がうツすらと沈んでいる桃谷の町端まちはずれ、天満てんまの万吉の家の前にたたずむ侍が

低く呼ぶ。

紫紺色しこんの宗十郎頭巾を、だらりと髻まげの上からくるんでいる横顔が空明りのせいにかくツき

りと白い。

両刀は手たばさんでいるが、どこか華奢きゃしゃな風俗、銀砂子ぎんすなごの扇子せんすを半開きにして口へ当

て、

「お綱……」

と細目に格子を開けて覗のぞく。

と、やがて内から障子が開あかつて、

「弦之丞様ですか」

とお綱の半身。

「時刻が迫っている、すぐに」と急せいた。

「はい」

「支度は」

「すっかりしておきました」

「では……万吉には告げずに」

「お吉さんへ、ちよつと挨拶あいさつをしてまいります」

「これを渡してやってくれ」

内ぶところから厚ぼったく封じた手紙を出して、

「拙者たちが立つたあとで、万吉がそれと知つたら、さだめし恨みに思うであろう。委細の事情、やむなく書き残して阿波へ立つわけ。昨夜こまごまと書いておいた。これをお吉に渡して、後で病人に読み聞かせてくれるように、よく頼んでおいたがよい」

あれからずつと、万吉の家において、お吉と一緒に病人の手当てをしていたお綱は、もう朝から弦之丞の来あわせるのを待ちぬいていたところ。

浅黄あさぎの手 甲脚てつこうきやはん絆をつけ、新しい銀杏形いちょうなりの蘭笠いがさと杖つえまで、門口に出してある。

もし万が一にも露顕ろけんした時には、四国屋で世話をしたことのある旅の能役者、桜間金五郎ごろうといつわるから、なるべく身装みなりもそれらしくしてくれという新吉の注意だったので、お綱もあらかじめそんな支度。

「もし……お吉さん」

中二階を仰むいて、お吉へ軽く合図をしたが、なかなかおりてきそうもない。

お吉は、今の良人おっとの容体ではとても起たたれないのを覚悟しているので、ふたりが立つのを、病人が気けどらないようにと祈っている。で、その合図も心得ている筈だった。

何か手離せないことがあるのだろうと、お綱はしばらく梯子はしごの下にたたずんでいたが、なかなかお吉は降りてきそうもなく、病人のじりじりした調子で、

「むむ、いまましい……早くどうかしてくれ、おれの体を。おれはまだ剣山まで行かなくツちやならねえ。……お吉ツ。医者を代えてくれ、医者をや。こんな気の永なげえ療りようじ治じなんかを待つていられるものか」

という声がひびいてくる。

中二階の悲痛な声を耳にすると、大事の前の小事と、心を鬼にしてきた弦之丞も、かれ

を残して去ることは情じょうにおいてしのびなくなつた。

梯子の下にしやがんだまま、お綱もさすがに後ろ髪をひかれている。

「ううむ……また痛みはじめてきた。お十夜のやつに斬やられた傷が……お吉、ほかの医者にみせてくれ、この傷が……この傷さえどうにかなれば、立てねえという筈はねえ。阿波へくらい、行けねえということはない」

「あ、お前さん、そんなに無理に動くと、よけいに後が悩むじゃありませんか」

「だって、じれツてえからな。あ……お吉」

「水ですか……水ですか」

「ううん、水じゃあねえ。……弦之丞様はどうしたろうな」

「ひとりでご苦心していらつしやいますよ」

「四国屋のほうはダメになつたのか」

「そんな話でございますけれど……」少し落ちついた模様を見て、お吉は梯子の上から顔を覗のぞかせた。

そして、去りがてに、ためらっているお綱のほうへ、目まぜで早く立つようにいった。

お綱も、目まぜで別れを告げる。

それをしおに、目に涙を溜めながら、編笠を抱えて格子の外へ走りだした。

後では、また万吉が何かわめいているらしかった。弦之丞は暗然として、外から、中二階の窓を仰いでいる。

その窓に、お吉のやつれた顔が見えた。

ご機嫌よう……と目にいわせて。

ふたりは夕明りの中に姿を揃えて、その目へ、その二階へ、心からの哀別を告げて早足に立ち去った。

東堀はドツプリと暮れていた。

赤い灯影ほかけが映る隙間すきまもないほど、川には舳舟はしけがこみ合っている。四国屋の五ツ戸前の蔵からは、まだドンドンと舳舟へ荷が吐かれて盛りだった。

水脚みずあしを入れた舳舟は、入れかわり立ちかわり、大川へ指し下り、天神の築地つきじへ繫かかつている親船おとこぶねへ胴の間まをよせてゆく。

紫紺地しこんじの頭巾おんてに面おもてをくるんだ弦之丞と、青い富士形の編笠べにひもに紅紐べにひもをつけて、眉深まぶかくかぶつたお綱お綱とは、せわしない往来をよけて、農人橋のうにんばしの手欄てすりから川の中を見下ろしていた。そうした雑踏の中で見るだけ、よけいに二人の姿は、誰の目にもしがない旅芸人りゆうげいじんとより

しか見えない。よく世間にある侍くずれの能役者と、それしやの果ての女とが、生活たつきの旅に疲れたという姿だ。お綱が帯に秘かくし差さしにした柳しぼりの一腰さえ、尺八の袋か、笛や舞扇でも入れているかと、人目もひかぬほど調和していた。

「もし、桜間さくらまさん」

人混みの中をぬけてきて、なれなれしく呼びかけた者がある。

見れば、手代の新吉。

河岸どおりから姿を見かけて、約束どおり店からここへ駈けてきたのだ。

「お、新吉さんでございます」

言葉を合せると、往來の者へも聞こえよがしに。

「この間、旅先から手紙を寄越よこしなすつたそうだが、なぜもつと早く来ないのかつて、お家様うわさも噂うわさをしていたのさ。船が出るのは五ツ刻つだから、まだちよつと間がある。とにかく、寮のほうへ廻まわつてお目にかかつて行きなさい。なに、せわしい最中だが、私がちよつと案内案内をして上げましょう」

と無造作に、さつさと先へ立つて、わざと店の前を通り抜けて行った。

その三人とすれ違つた覆ふくめん面の侍があつた。ふりかえつたが、やり過あやごして、また、

「はてな、今の奴？ ……」というふうには、農人橋の上に立って、腕ぐみをしていた。するとたちまち、その覆面の侍へ、同じような目ばかり光らした者がちらちらと四、五人ばかり寄ってきて、

「おい、何を考えている？」

と、肩を叩いた。

「見つけた！」

腕ぐみを解いた侍は、ほかの者を突きつけるように走りだして、一散に、問屋町の裏通りへ隠れて行つた。

それが誰からともなく伝わると、そこらの路次の蔭、天水桶の蔭、土蔵の横などから、こうもりのような黒い姿がうごめきだして、しきりに四国屋の裏や寮の辺へかけて、ひそかな跳躍をしはじめた。

りりりん……と潜り門の鈴が揺すれる。

後をがらがらと閉めて、

「さ、桜間さん、どうぞこちらへ」

と、新吉の声が招く。

船板塀の中はシットリと打ち水に濡れていた。

燈籠の灯が、暗きに過ぎず明るきに過ぎないほどに、植込みの色を浮かしている。

「変ったでございましょう」

そんなことを言いはじめた。ひとり呑みこみに新吉が。

「この庭もね、すっかり手入れをいたしましたから。はい、近頃ではお家様も、阿波よりは大阪のほうこつらが住居みたいになつてしまつてな。さあ、ご遠慮なく、私について——」

ひとつ、ひとつ、前栽せんざいの飛び石をさぐりながら、弦之丞とお綱とは黙々としておぼろな影を新吉の後に添わせてゆく。

と。

拭き艶つやの流れている檜縁ひのきえんに、

「新吉かい？」

とお久良くらの影。

案じていたらしく立っていた。

「はい、お連れ申してまいりました」

「来たのかえ？ 金五郎さんが」

「あまりご無沙汰しすぎているので、どうもしいきいが高いとおっしゃってばかりいるので」

「そんなことがあるもんじやない……。あの……」何か言いよんどんでいたが、

「まあ、とにかく、奥へね」

「そちらのお方も」

とお綱を見た。

さすがに少し動悸をうちながら、お綱は編笠の紐ひもを解く。

「では……」

と言葉すくなく、弦之丞は頭巾のまま、お久良について、中廊下から奥まった寮の間まへ。

裾すそを下ろして、やや急せかれ気味に、お綱の入ったのと一緒に、その編笠を持ってやりながら、手代の新吉も同じ奥へ姿をかき消す……。

——で、あとは人影もない。ただ前栽の木々に、螢ほたるのひそむような静寂しじまが残っていた。

「眠いのか！ 啓之助」

西側の数寄屋すきやである。

やはり同じ前栽の風致ふうちを前にした小座敷。

そこでこういう声がした。

竹屋有村が言ったのである。イヤ、叱ったのである、森啓之助を。

なぜ叱られたかといえは、啓之助、三位卿の前で、コクリとひとつ居眠りを見せた。

時刻の来るまで、ふたりはここで四国屋のもてなしにあずかっていた。それも昨夜ゆうべから

の話である。船待ふなまちにしては長過ぎるし、多少寝たには違いないが、絶えず気を張ってい

るので、頭も鈍どん重じゆうになっているところへ、船出祝ふなでいわいに出された酒も少しは飲んでい

たので、思わず、居眠りも出たというわけ。

だが、三位卿はピンとしていた。さすがにお公卿様の育ちである、折目正しく神経を冴

えさせていた。

で、仮借かしゃくなく、

「眠いのか！」ときめつけた。

「いや、決して」

啓之助はあわてて顔を撫で廻したが、自分でも、赤かろうと分るほど目が渋かったので、
てれ隠しはしに箸はしをとり、わさびを溶といて魚の洗いをひと切れはさむ。

「決して、眠いなどと、そんな場合ではござりませぬ」

「お手前はちと物を食あがりすぎる、食べるから眠くもなる」

「はい、つい無聊ぶりようのままに」

「無聊を感じられるほどお楽らくには困る。昨夜からとくと見るに、お久良の気ぶりにも多少腑ふに落ちぬ所もあり、かたがた油断はならない」

「拙者もそう感じましたが、証拠のないことにはと控えています」

「うむ」

「ことに、お久良のもてなしぶりが、あまりよすぎるのも疑わしゅうござる」

「なかなかご敏感じやの」

「嫌な顔もみせず、この通りの善美な膳」

「それでツイ、箸がすぎ盃がすぎて、居眠りをし召されたか」

「そんなわけでもござりませぬが」と啓之助も少し眼がさめてきた。皮肉で居眠りをさまされた。

三位卿は膝もくずさず、時々、うしろの自鳴鐘とけいをふりかえっていた。眼のさえた啓之助の頭には、船出ふなでのことと一緒に、お米の姿が描かれてくる……。

どうしたろうか、彼女の体の工合は？

大阪へ戻ってきては、また癆咳ろうがいのほうがよくないのではないかな？

最初にこういう考えが頭へのぼる。

捨鉢になつて人をしてこずらす時には、実に憎い始末の悪い女と思うが、しばらく離れてみると、やはり自分にはなくてはならないお米だった。

ほんの十四、五日というつもりで暇をやつたのに、もう大分になる。もつとも船の都合ものびたのだが。

今夜は宅助と一緒に、ここの持船で阿波へ帰るといったが、どこかで、久しぶりに、あいたいものだ。いずれ船が出る間際まぎわには顔を見合す機会はあろうが、この竹屋卿という眼ざといのがいては、うっかり話も交かわされまい。

啓之助の想像は楽しかった。

その時であった。

植込みを隔へだてた向うの潜くぐり門に、空気のうちごめきを感じて、有村が神経を研とがしたのは。

「今……」

三位卿の様子が剃刀のように澄んだので、啓之助、

「何でございますか」

描いていた空想を散らして、その人の眼を見た。

「……鈴が鳴ったようだが」

「庭の客門には銅鈴がついておりました」

「誰かそこから前栽の内へ入ってきたのではなからうか」

「探ってみましょう」

「ウム」

啓之助はすぐに立った。

数寄屋の虫籠窓へ顔を寄せ、しばらく外を探っていたが、庭木に妨げられるので、縁

へ立って行くと、

「しずかに」

と有村が注意を送った。

「は」

白足袋に沁りそうな廊下、酔いでもさますふうを粧いながら母屋のほうをうかがってゆ

くと、その目の前へ、廉すだれのような灯明あかりの縞しまがゆらゆらとうごいて。

「あ——もし」

と、簾戸すどを立てた部屋の内から、

「森様じゃございませんか」

とお久良の影すがが透すいて見える。

啓之助はちよつと戸まどいをして、

「お内儀か、船の時刻は、まだなのであろうか」

「刻限がまいりましたら、お座敷へお迎えにまいりますはずなので」

「さようであつたな」

廊下をぶらぶらしてみたが、しかたがなく、

「では」

と戻ろうとすると、

「森様、森様……」と呼び止めて、お久良はその部屋へ行あんどん燈どんをすえて、

「お伺うかがいしたいことがございますが」

「拙者に」

「はい」

簾戸すどを開けて迎え入れると、お久良は啓之助を見ながら、意味ありげに笑えくぼを作つて、
 「今夜の船で、あなた様のご懇意こんいなお方も、阿波までお送りいたすことになっております」
 「ああ、そうであつたな」

お米のことであろうと、啓之助、少し間まが悪そうに思い当たつて、

「つい、礼を申すのも忘れていたが」

「いえ、滅めつ相そもござりませぬ」

「船に馴れぬ女のこと、何分、途中氣をつけてやってくれい」

「たいそうお美しくつていらつしやいます」

「いや、なに」

と顔を撫でるのを、お久良はニヤニヤ眺めていたが、

「なぜご一緒になつて、途中見てあげないのでございますか。殿方の薄情を、さだめしお
 米様こめさまもお恨うらみでございましょうに」

「そう申されると困るが……」

「でも、せつかく、ひとつの船でお帰りなのではございませぬか」

「実はの」

と顎あごで数寄屋を指しながら、

「竹屋卿には話されぬ女なのだ」

「ホ、ホ、ホ。それは悪いご都合でございますこと」

「で何分、内密に計らっておいてくれるように」

「よろしゅうございます。そういう訳わけとは存じませんので、只今、船のお席もご一緒にしたほうがよくはないかと、あちらへお伺いに出るところでございました」

「いや、とんでもないこと!」

何をしに廊下へ出たのか分らない結果になって、啓之助はぼんやり数寄屋へ帰ってきた。有村は彼を見るなりすぐに、

「どうであつた?」

と声を低めた。

「別に、仰せられたような模様も見えませぬが……」と啓之助はあいまいに席へついて、「お耳のせいでございましょう」といった。

すると、その言葉も終らないうちに、ふたりの坐している床の下から、ことん、ことん、

と二ツばかり突き上げるような音がした。

自分の坐っている床下から、トンと、妙な音が突きあげてきたので、森啓之助、思わず体を浮かしかけてみると、

「お」

といつて、三位卿も片膝を立てた。

そして、啓之助に向つて、

「しばらくの間、庭先とその入口を、よく見張つていてくれぬか」という。

「は」

とは答えたが、啓之助には解げせない。

何で？ と訊きこうとすると、よけいなことは訊くなといわなければかりに、

「早く」とまた言葉を重ねる。

「承りました」

と啓之助、やつと縁口へ立った。

そして、ともかくも、油断のない目を配りながら、有村の挙動へも、時々注視を分けて

いる。

三位卿は、静かに、あたりの器具を片寄せて四角に切つてある^{ろだたみ}炬^ろ置^だをブスツと持ちあげた。

「や？——」と、啓之助が驚いて見ていると、有村は、半^{なか}ばまで上げた畳のへりを片手でささえながら、暗い穴を覗^{のぞ}きこんで、

「ふム、不審な姿をした者が……新吉とともにこの寮の潜り門へ、ほう、桜^{さくら}間……桜^ま間金五郎と申すと能役者らしい名前……なに、たツた今奥へ入つたというか、おお……そしてどこの部屋へ？……」

などとしきりに床下と話しはじめた。

下には覆面をまとつたひとりの原^{はらし}土——さつき農^{のうにん}人^{ぼし}橋の上で腕をくんだあの侍が——
臺^{がま}のように身を屈していた。そして今、この寮の裏で見届けた事実を告げている。

能役者——桜間金五郎——紫紺の頭巾に銀^{いちょう}杏^{がさ}笠の女？——それらを端的に頭の中でつづり合せながら、三位卿、しばらく小首をかしげた後、

「これ」と、いっそうかがみこんで、

「ことによるとそやつこそ、弦之丞にお綱のふたりであろうもしれぬ。しかし、迂^う濶^{かつ}に先

へ気どられて、せつかくこれまでおびきよせた長蛇を逸してしまつては何もならぬ」

ギリギリギリ……と髪切虫の啼くような自鳴鐘の音が、その時、有村の後ろでした。

ちらとふりかえつて、

「ウム、もう六刻半」と心をせわしなくしつづ、

「船の出る潮時までは後一刻（今の二時間）ほどしかない。その間にとくと見定めておきたいが、どこじや、その男女が隠れた部屋は？」

「それと見た時に母屋の下も探りましたなれど、何せい、床下からはその見当がつかませぬ」

「念を入れて身を潜めば、気配ぐらいは分る筈、もう一度忍んでみい」

「はっ」

「その男女から寸間も目を離してはならぬ」

「心得ました、では」

と、床下の影がズリ退ろうとすると、

「待て待て」

と呼び止めた。

そしてちよつと思案をしなすふうであつたが、またすぐに、

「よし行け！」とキツパリいつて——「この有村も屋敷裏へ廻つて天井から母屋の様子を探つてみるであらう。万一、なんぞ非常な場合が生じた時には、呼子よびこ笛を吹いて合図をすること。よいか、くれぐれ先の者に気取られるなよ」

と、畳を伏せた。そして、

「これ、森——」と面おもてをふり向けた。

「はっ」

「しばらくそこを動いてはならぬ」

「あまり軽けいそつ率なことを召されては」

「いや、大事な」

下緒さげおを解いて、片だすきに袖を結び、隅の釣戸つりとだな棚へ目をつけてスルリとその中へ身軽はに跳ね上がった。

「啓之助、啓之助」

はずされた天井板の隙間から顔だけが白く見える。

「何でございますか」

「後ろを閉めてくれい、その、釣戸棚の袋戸を」

「暗うなりますが」

「かまわぬ」

「は」

と、かれはそこを閉めた後の森しんとした天井裏を見あげていた。——ミリツと梁はりのキシむ音が静かに奥へ消えてゆく。

と。ひと足違いに——

「おや、三位卿様はどうなさいましたか」

湯上がりでもあるらしく、艶えんに、薄白粉うすおしろいを粧よそおったお久良が、着物をかえて、部屋の前
にたたずんだ。

ぎよつとしたが、啓之助、さあらぬ顔で、

「お、御退屈をまぎらわしに、今し方、庭下駄をはいて前裁せんざいのほうへ出られたが」

「そろそろお時刻が近づきました」

「ム、もう一刻とぎばかりじゃの」

「あまり間際に迫りませぬうち、天神の船待場ふなまちばの方へ、私が御案内申しまする」

「そうか……それは大儀……ム、では三位卿が見えられたら、すぐに支度をするであろう」と落ちつかぬ自分の所作しよさくに気がついて、またそこへ坐りなおした。

お久良の眼は、有村の空席に散らばっている、藁わらゴミをじつと見ていた。

茨いばらの愛あい嬌きよう

母屋おもやの奥おく、寂じやくとした闇の中に、三つのつづらがすえてあつた。

雪のせ笹せさの金紋きんもんが、薄暗いその部屋へやの隅ぐもに、妖魅あやかしめいた光を放つて――。

召使めいしでも置き忘れたものか、交ちがい棚だなの端はなに裸火はだひの手燭てしよくが一つ、ゆら、ゆら、と明滅めいめつの息いきをついている。

家具かぐや調度てうどの物のあんばい、お家様の部屋へやらしいが、籠行燈かごあんどんは墨すみのような色いろをしてお久良くらも誰もいなかった。

すると、その向うの納屋なやの内うちで。

やはり灯明あかりのない暗い中で。

「船ふねのほうでは、松兵衛まつべえという水夫かこが、お家様の旨むねを含んで、よいようにしてくれること

になっております。はい、もちろん私も、それへ乗って何かとおかばい申しますから、ご心配はございませぬが、ただあぶないのは、安治川を出ますまでの間で……」

あたりをしのぶ新吉の声。

その合間に密やかなのはお綱と弦之丞の言葉らしい。

「じゃ、私に方寸もございますから、お家様が数寄屋のほうをを防いでおります間に――」

やがて仕切戸が開いたかと思うと、静かな人の気配が中廊下へ出てきた。

新吉は先に前の部屋へ入って、つづらの側へ手燭を持ってきた。ガチャリと、ふところから合鍵あいかぎの音をさせる。

中の荷はいつかほかへ移してあると見えて、つづらの中の四角な闇が、人を吸うべく待っていた。

「……………」

黙って部屋の外へ目じらせすると、お綱は笠で髪をかばいながら、ツウと寄って素早くその中へ身を潜めた。色彩いろとりをまぜた反物たんものがひと抱えに入ったように。

弦之丞もまた、新吉が次のつづらを手早く開けたのを見て、「さらば」と、刀を手に、

それへ足を入れかけた。

そして中へ身をかがめようとしながら、ふと蠟燭ろうそくの焰ほのおを見て、ジイと心耳しんじを澄ます様子であったが、何思つたか、不意に、一刀の鞘さやを払つて畳の筋目すじめへ逆持ちさかもに切ツ尖さきを向け——ブスツと、鐔つばの際きわまで突き通した。

と。目には見えぬ所で、

「ウウツ……」と陰惨な——深いうめき声。

新吉は踏んでいる床が左右に揺れたかと思つて角柱すみばしらへ背なかを寄せたが、その入口に、いつの間にかお久良が来て立つていた。

「新吉や」

「ああ、お家様ですか」

「だいぶ探りが入っている様子、どうやら今夜の船は危ないようだよ」

「じゃあ所詮しょせん無事には出られませんまいか」

「何しろ、奥に張り込んである竹屋卿という方がなかなか鋭いお人らしい」

「ああ」と新吉、思わず出足を鈍にぶらして——

「そいつあどうも弱りましたな」

「私のほうはかまいませんけれど、弦之丞様、どうなさいますか」

「どうするかとは？」

おうむ返しにいつて、畳へ立てた刀を上げ、脂あぶらをしごいて鞘さやに納める。

「その床下に忍んだような侍がまだ一人や二人ではございませぬ。それでも今夜の船へお乗りなさいますか」

「もとより危険は覚悟、ただ当家へ累るいを及ぼそうかと、それがいささかの心がかかり」

「乗りがかった船、その御懸念ごけねんはいりませぬ」

「では、強たつても」

「そのお覚悟ならば」

「浮くか沈むか弦之丞が運の岐わかれ目」

「ほんとに、危なツかしいとは思いますが……」

「申さば鳴門の狂瀾きょうらんへ吾から運命を投げこんで、大望なるかならざるか、いちかばちかの瀬戸ぎわへまいったのじゃ。すべては天意——このつづらに任せるのほかはない」

刀を抱いて沈みこんだ。

「じゃ新吉、お前もヌカリはあるまいけれど、早く天神の船待場ふなまちばへ」

「お家様は？」

と、ふたをしめたが、新吉、妙に胸が波立ってやまなかつた。

「私は数寄屋の客を案内して、わざと道を違えて行くから」

「承知しました。では何かのことは向うでまた……」

「しッ！……」

お久良はいきなり袂たもとで蠟燭ろうそくの灯を打ぶつた。

はッと——新吉はつづらに抱きついて、自分の動悸の音を聞いた。

そのとたんに。

天井板の隙間から真ッ暗になつた畳の上へ、バラバラと落ちてきた塵ちり……針がこぼれる程の音をたてた。

肋骨あばらのような屋根裏の梁はりに手をかけていた三位卿。

「や、この下？」

と思つたので、天井板のつぎ目へ小柄こづかをさし込み、そつとねじりながら隙間へ顔をよせてゆくと、刹那に、

「シツ……」と、下の部屋の明りが消え、やり場を失った目の先へツウンと蠟燭のいぶりが沁みてきた。

「怪しい……」

と、かれは直覚した。

しばらく息をためていると、やがて四国屋の若者らしいのがドロドロと暗闇になだれてきて、何かその部屋から運びだして行く様子——。

むせつたい煤すすの暗闇を這はつて、有村は前の茶屋へ戻ってきた。

みると、いる筈の啓之助が、そこに姿を見せないので、

「きやつめ！」と舌打ちして、

「どこへ行ったのだ。ここを見張っているといっておいたに」

塵を払って前裁せんざいのほうを眺めていると、庭木の間を潜くぐって近寄ってくる影がある。

「啓之助か——」

「有村様」

「何をうろたえておるのじゃ」

「ただいま原士の者が」

「原士がどうした？」

「一散にここを離れて、船待場のほうへ急ぎました」

「分った、今のつづらじや」

「え、つづら？」

「そちも支度をせい、すぐにまいろう」

「は……」と、啓之助が取り散らした懐紙や扇子せんすなどをあわてて身につけている間に、三位卿は行燈あんどんを吹ツ消して、すたすたと廊下へ出た。

すると、さっきの簾戸すだの蔭で、

「もし、お待ちなさりませ」

という声がある。

「誰じや……」

急せいでいるので語韻ごいんにも気が立っていた。

「お久良でございます」

「ウム、お久良か——」と有村はキツと唇を締めた。

「ただいま、船待場のほうへ御案内いたそうと存じて、支度をしているところでございますりま

す。天神の河岸のほうは、荷方の者や便乗のお人が混みあつておりますから、水夫などがどんな御無礼をいたさないとも限りませぬ。それに、船のお席も私がまいらぬと分りませんから、ちよつとお待ち下さいませ……ただいま、提灯あかりを灯ともして、すぐにお供をいたしますから」

いつているうちに、お久良は店みせ印しるしのついた提灯ちようちんを手に持つて、有村の前へ姿を立たせた。

かれはかれ一流の読心的どくしんてきな態度で、眸ひとみに威をこめてジツとお久良の顔を凝視ぎようししたが、その眼まなざしを邪魔するように、下から射す円い明りの輪が、薄化粧の腮あごにふわふわとうごいて、才はじけた年増の笑くぼがなぶるように映つて見える。

心は先を急せいで猛つているが、こちらが表面の理由に偽つてきている以上、先の当然な言葉を退けるわけにはゆかない。ましてや、あくまでニコやかな心尽くしを。

有村はじりじりと思う。

先にお久良の部屋で見ておいた三個のつづら。あの雪のせ笹せいさのつづらこそ怪しい。

寮の外へまきちらしておいた原土どもも、それが密かにこの家やを出たのを嗅かぎ知ったからこそ、いつせいに船待場のほうへ追つたのであろう。

だが、どうにもならない気持で、かれは苦にがいいうなずきを与え、大股に表のほうへ歩みかけた。

と——お久良はまた、和やわらかに呼びとめて、

「三位様、お履はきもの物はわざと前裁せんざいのほうへお廻し申しておきました。何せいもう表のほうは、荷埃にほこりや店の者で乱雑で、お足の踏みどころもございませぬ」

と声からまで、愛嬌のよい物いいぶり。

庭木の暗がりを照らしながら、先に立って一歩一歩と導いて行くのにも、商家の内儀らしい細心さや年増の優しみが溶けていたが、今の場合！寸刻もどうかと思うこの間際！三位卿と啓之助の心になってみれば、婉えんきよく曲にょにんな女人の案内は、むしろ始末にならぬ茨いばらの枝にまといつかれている如しだ。

つづらの闇やみ

「もう来そうなものだが」

と、さつきから仲ちゆうげん間の宅助、天神河岸の築つきだし出にたたずんで、お米の姿を待ちあぐ

ねていた。

広い闇を抱えた埋地うめちの船岸ふなつきには荷主や見送り人ての提灯がいつぱいだ。口々にいう話し声が、ひとつの騒音となつてグワーと水にひびいている。

とんでもない大でか声こえで船夫ふなこの猛るのや、くるくるとうごいて廻る影が四国屋の帆印をたたんだ二百石船の胴どうの間に躍まつてみえた。宅助は、そのの棧さんばし橋にも寄つてみたが、お米はまだ来きあわしていなかった。

「ちツ、何をまごまごしていやがるんだらう」

舌打ちをしながら、提灯の中をぬけて、またトツプリと暗い埋地の草原をぶらぶら歩き廻まつている。

「冗じょうだん談じゃねえ、いい加減立ちしびれてしまった。どこかに、一服やる所はねえかしら」

そう思つて見廻すと、向うの浜倉から少し離れた所に、屋台うどんの赤い行燈あんどんが見えて、その明りに、雑な小屋のあるのがすぐと目につく。

側へ行つて覗のぞいてみると、小屋の中には藁わらござや床しょうぎ几もあり、煙草の火縄なども吊るしてあるので、

「船待場だな」

と、うなずきながらごぎの上へドツカリと腰をおろし、首にかけていたまんじゅう笠をそれへはずした。

夜の潮風を察してひっかけてきた渋合羽しぶがっほの前をはだけ、二本の毛脛けすねを立てながら、そこで、スパリと一服吸っていると、向うの屋台うどんの床几に、編笠をかぶったひとりの浪士と、ふたりの子供の影が見える。

むツつりとしたその浪人者は、誰か人待ち顔に時折笠をあたりへめぐらし、広い闇を見廻しているふうだったが、子供のほうはうどんの器うつわを吹いて、チューチューと音をさせながらすすっていた。それがいかにも美味うまそうなので、宅助も急に食欲をそそられ、船待の小屋から居いなりに声をかけて、

「おい、うどん屋、こつちへもひとつ頼みてえな」
と煙管きせるをハタいた。

「へい」

というと、間もなく、剥はげた盆の上にお詠あつちえが乗ってくる。蓑たばこい入れの底をさぐって、
「いくらだい？」

「十二文もんです」

ザラリと銭を盆へのせてうどんを取る。

「ありがとうございます」

「父とつさん、ちよつと聞きてえんだが」

「へい」

「お前めえは、夕方からここにいたのかい」

「船が出るのを当てこみに、明るいうちから屋台を曳ひいてまいりましたんで」

「売れたろうな、さだめし」

と、箸はしでうどんを上げながら――

「なかなか美味うめえもの」

「はい、お蔭様で、八軒家やこの辺では、かなりよく売れますんで」

「そうだろう、もう一ツくんな」

「ありがとうございます」

代りを取って側へ置いた。

「ところで俺の来る前に、ここへ二十四、五になる女が見えなかったらうか」

「お女中様でございますか」

「そうだ、俺の風態ふうたいを見て、ザラにあるお女中と間違えちゃいけねえぜ、スラリとした柳腰よ、ふるえつくようないい女なんだ」

「さあ？ ……商売に気をとられて、ツイどうもうツかりしておりましたが」

「見かけなかったかえ？」

「お見かけ申しませんでしたね」

「じゃ、やつぱり来ねえのかしら」

「この船へ乗って立つお方でも、見送りにおいでなさるんですか」

「そうじゃねえ、俺がお供をして阿波へ帰ろうという人なんだ。やがて時刻も迫ってくるのに、だから、こつちも気が氣じやあねえところさ」

といつていると、向うに立った編笠の侍が、

「うどん屋、子供の食べた代を取つてくれい」

「二十四文でございます」

うどん屋が揉もみ手をすると、浪人は紙入れの内から二歩銀ふぎんを一つつまんで、

「これへ置くぞ」

と屋台へ乗せた。

「あ、恐れ入りますが、細かいのを持ちあわせはござんすまいか」

「つりは要らん……ところで……しばらくの間邪魔ではあろうが、この二人の子供をここに預かっておいてくれぬか、だいぶ疲れておるのでな」

「じきにお戻りなさいませうか」

「うむ、船の出るまで！」

フィとどこかへ見えなくなつた。

それを眺めて宅助も、

「あ！ おれもこうしちやあいられねえ」と塵をはたいて跳ね上がった。

「早く来てくれりやいいが、何をしているんだらうな、お米のやつは？」

と独り言にじれて、饅頭笠を持つたまま広い空地へさまよいだした。

「おお、あぶないぜ」

後に残つたうどん屋は、井を洗いながら床几に居眠っている子供を眺めて思わず笑つた。

「可愛い子だな、疲れているといっていたが、どこから来たんだね」

空腹すきばらをみたされて急に眠気ざした子供は、それに返辞もしないで時々縁台から転げそうになつていた。

「は、は、は、罪はないな。だが、そこで居眠つていちや危ないから、今おじさんがいいあんばい按配あんばいにしてやろう、こつちへおいで、こつちへ——さあさあここならいくら寝ぼけたつて腰掛から落ちる心配はない」

と小屋の中へ連れてきて、その子供の寢床を作つてやろうという考え——何気なく奥に見えた荷物のかぶせになつてむしろいる蓆むしろを五、六枚めぐり取ると、その下から金紋のついた青せ漆いしつつづらが三つ見えた。

金紋に怖れをなして、うどん屋は抱えただけをソツと持つてきて、向う側の隅へそれを重ねてやる。子供は他愛なくもたれあつて寝てしまう。

するとそこへ、ひとりの男が駈けてきた。四国屋の手代の新吉だった。少し気の立つてゐる血相で、

「おい、うどん屋！」と外で呼ぶ。

「へい」と飛びだして「差上げますか」

「イヤうどんは要らない、今ここへ高貴なお方が見えるのだから、屋台をあっちへ引つ張つて行つておくれ、目障りだ」

「へい」

「咎められないうちに、早くあっちへ行きなさい、あっちへ」

「へい」

「船が纜を解く間際には、よけいに混雑するから、屋台を引つくりかえされたつて知らないよ」

「へエ、ですが……」と何かいおうとした時に、屋台をかすつて、覆面をした侍が十四、五人、追い立てられた夜鴉のようにバラバラと疾走して行つた。

「あつ……」と、うどん屋は肝をつぶして、あわてて商売道具を遠くへ運んで行つた。

新吉はというと、原土の一群が目の前を通り過ぎた途端に、小屋の蔭にかがみこんでいた。そして、その足音の消えるのを待つてソロソロと奥のほうへ這いこみ、静かにまたたいている金紋の光へ探り寄つた。

「……御窮屈でございましょう……ですが……へエ、もう間もなく……船から松兵衛という船頭が、水夫を連れてまいりますから……委細は松兵衛が……」と問わず語りにつづら

の中と話している。

「……はい、だいぶ原士はらしが立ち廻っております、なにしろ安治川を出るまでが御難儀で……いえ、三位卿はまだ見えません、来たらお家様と松兵衛が……へエ、どうかしばらく御辛抱を」

と言いかけていながら、新吉あわてて蓆むしろをつづらへかぶせて首をすくめた。

ピカリツと手槍の紫電しでん、小屋の前をはすかに流れたかと思うと――

「怪しい奴ツ！」

突ツかけてきた声だった。

新吉は自分の背すじからつづらの中へまで、その光り物が突きぬいて行ったかと生ける空そらもなかつたが、

「わツ……」

と、別な苦鳴くめいを向うに聞いた。

ドタツ……と誰か倒れたらしい。

見ると槍をつかんだ覆面の死骸が、袈裟けさがけに切られてピクついている。

その側から白刃をひいて、ツウと寄ってきたのは深編笠の浪人の影――、小屋のまわり

をしきりに見廻しているのは、さつき、うどん屋へ預けて行った子供の姿が見当たらないので、

「はてな？」

と探し廻っている眼まなざし。

「お、あんなほうへ」

やがて、深編笠の浪人、遠く離れてゆくうどん屋の灯を見出して埋地うめちの果てへ走りだした。

と――

ここに今しがた、血煙の立った様子を嗅かぎ知って、わらわらと集まってきた覆面の原士は――手槍や抜刀ぬきみの光を隠して、スススと風のごとく、先へ走った編笠の影をつけて廻る。で、新吉は、ホツと顔を上げながら、

「何だろう、あの侍は？」

と見送った。

が、すぐにまた新吉もそこを出て、船のほうへ打合せに駆けだしていた。なにせよ、纜ともづな

を解く混雑まぎわに、八方で光る眼をくらし、首尾よく三ツのつづらを船底へ持ち込もうという危ないからくり、並大抵な気苦労ではない。

もうそろそろ時刻の五刻半に近づいてきた気配、ざわめいていた船のほうも割合にヒツソリしてきた。

ただ、提灯の灯だけは船岸の近くにうようようごいている。

爽やかな風が空を吹き廻っている。星月夜だ。五月にしては珍らしい空。

このあんばいでは、海も順風、鳴門の浪にも大してもまれることはなからう、まず、船出の幸先は上々吉だ。

けれど、その海へ乗っ切るまでに、何ぞ、予想もつかぬような大暴雨がやってこないとはいいきれない。今——その十万坪あまりの埋地の闇はひとつの廻り燈籠になった、三ツのつづらを心棒に、あまたの覆面や怪しげな編笠や、宅助や新吉や、そしてなお幾人も影が、グルグル廻っているのだから……

これもその廻り燈籠の影絵の一つ。

昔、桜の岸にあった古柳の名残とかいう空井戸の側に、夜目にもしるきといたい女が、褌を折って腰帯に結び、手拭の端をつまんで姉様冠りをしなおしている。

と——向うに立つた男を見つけて、

「宅助じゃないのかえ？」

と呼ぶと、

「お米さんですか」

と腰をかがめてくる合羽かっぱの影。

やツと巡り会つたという風に、喜悦きえつを誇張して、

「冗談じゃありませんぜ。いくら探し廻つていたかしれやしねえ。エエ心配しちまつた！」

「そうかい……ホ、ホ、ホ」

「そうかいもねえモンです、あれほど、船待の小屋と念を押ししたじやありませんか。それをこんな所で、夜鷹よたかみてえにしやがみこんでいるんだもの、分りッこありやしねえ」

「まあそれでも落ちあえたからいいじやないか」

「またうめえことをいッといて、一杯食わすんじやないかと、少しお冠かんむりが曲りかけていたところなんで」

「そうしたらどうおしだえ？」

「こんどこそはただ置きやアしませんさ——まああしたの読売にや、お米殺しと出るでし

ようよ」

「おお怖い……」

と、わざとらしく男を見たが、ちつとも怖そうな表情でなかった。

「とにかく、もう少しあっちへ行つていようじゃありませんか」

「あっちツていうと？」

「船待の小屋にいるのが一番です。あすこにいりや、出る間際にだつて船頭が知らせてくれます」

「じゃ、そっちへ行つてみようかね」

「お米さん」

「エ……」

「誰か探しているんですか」

「なぜ」

「イヤに後先を見廻しているじゃありませんか」

「そうかい」

「そうかいツて、自分のしていることを」

「淋しいからだよ……妙に広くつてき、イヤなものだね、船旅に立つ夜というものは」
 弦之丞様、弦之丞様。

どうしたろうか姿が見えない？

——そう思う闇はお米には淋しいはず。

争鬪と愛慾。ひそむ者と追う者。

次々に奇しき影絵は巡り廻めぐまわつてくる。

お米と宅助がそこを去ったかと思うと、空井戸の縁ふちに手をかけて、中からヒラリと躍り
 だした者があつた。

たつた今、向うの小屋から、うどん屋の灯を目的めあてに走って、原士の群れにつけられたあの編笠の侍。

「違う！ ……」と、ぽつり一語ひとこと。

こうつぶやいて、お米の後ろ姿に小首をかしげた。

「年ごろもよく似ていたが……」

腕ぐみをして、二、三步、前へ伸びようとすると、捨石の蔭から這はい寄って行ったひと

つの影が、

「うぬッ！」

と組みついてたすきにしほる。

ダダダッと四つの足が乱れつよれつ——草の根を踏みにじって、

「で、出合えッ。組ンだ！」

叫ぶと一緒に側面から、

「おっッ」

といつてまたひとり、駆けよりぎま太刀を突いてきた——無論、絞しほりつけた編笠の脇腹へ。

だが——颯さつこ光はそれた。引くも遅し！ 横一文字に相手の剣！ あッと思いつつ、のめり込んで、その刃やいばを抱いだいてしまった。

「うう——ッ……」

と一方が横倒れになるとたんに、目を閉つぶつて、組みついていた腕だすきも、ハッとふりほどかれて、侍の肩を越した。

そしてその体が地につかぬうちに、腕の付根から肋骨あばらへかけて、ザッと、あまりにすご

い二の太刀がかかる……。

目にもくれず編笠の影は、刃やいばの血をビューツと振って、

「ああ、子供たちの身も気がかりな……それに、阿波の手配てくばりも思いのほか厳しい様子、この分ではさすがの彼も」

と、面おもてを星にふりあげていると、足もとから不意に、断続した呼子笛よびこの音ねが水のように鳴った。

斬り伏せられた傷負ておいのひとりが、断末苦の必死に、あえぎながらくわえた呼子笛……。その絶えだえな音ねがかすれ消えると一緒に、八方から集まった原士の影は、仲間の死骸をとり巻いて、無念そうに、不思議な編笠の出没にじらされ、かつ錯覚さっかくを起こし、じだんだを踏んで口惜しがった。

「奇怪な編笠、何者だろうか」

「無論、幕府方の奴に違いない。今夜の騒ぎにまぎれて、やはり御本国へでも入り込もうとして来たのだろうか」

「この斬り口を見ろ！　すごいやつだ。とても唯の曲者しれものではない」

「ことによるとそいつの正体が、法月弦之丞なのではないか」

「う……うム？ ……それも大きに」

と、やや背すじの寒さを感じてどよめいていると、

「何じゃ、何かあつたか！」

と駆けてきた者がある。

「や、森啓之助殿——」と輪をくずして後ろを見ると、啓之助と一緒にきた竹屋三位卿、七、八間離れた所に、お久良の持ち添える提灯あかりをうけて立っている。

宵のうちから、この埋地うめちの闇に怪しい編笠の侍が出没して幾人かの原土が斬られたという話を聞いて、啓之助は小首をかしげながら、それを三位卿さきやに囁いた。

「ふうむ？ ……」

と思ひ当たる様子もなく、

「何なに奴やつだろう」

と彼のつぶやきも同じであつた。

「有村様……」と啓之助、袖知そでじらせをして、お久良の側を離れながら、

「——手口を見るとすばらしく腕の確かな奴なそうで、或いは、それが弦之丞ではないかと申しおりますが」

三位卿の思判しはんも少し錯覚にとらわれてきた。

お久良の部屋から密かに運び出されたつづらこそ怪しむべしと目星をつけてきたが、原士の言葉を綜そつごう合すると、またその深編笠の正体も怪しまざるを得なくなる。

「旅立ちせは急くもんじやねえ。まだ煙草ぐらい吸う間はゆっくりありますぜ」

と宅助は、ムリにお米を船待小屋へ連れこんだ。

「お詠あつちえだ、ちゃんむしろと蓆むしろが敷いてある」

合羽すその裾すそをまくツて、

「どツこいしよ——」と腰をすえる。

お米もひとつ蓆むしろに並んで、紅緒べにおのついた両足を前へ投げだした。

ちようど、いい按配あんぱいによりかかる物があった。

宅助もよりかかつて、後ろの物を枕まくらにしながら——

「お米……一昨日おとといの今ごろはよかつたなあ」と、いやらしい思いだし笑いを浮かべる。

「一昨日おとといつて？ ……」

「松島の水茶屋サ、あそこの奥の四畳半サ。忘れちまうなア薄情だな」

「忘れやしないけれど、まじめくさって不意にそんなことをいうからさ」

「だが約束を違^{たが}えずに今夜ここへ来た心意気は買つとくぜ」

「私の気性は一本気なんだよ」

「どう一本気なのか、聞きてエものだが」

「こうと思う男にぶつかるとネ……その気性がよくないと知りながら」

「へ、へ、へ。ほんどけえ？」

「さあ、お前にはどうだか」

「あれ」

「憎いねエ、知りぬいているくせに」

「あ痛^{いて}……」

「来たよ、お離し」

「え」

「人がさ……」と身をねじると、そこへ誰かの影が立って、小屋の内を覗^{のぞ}きこみ、

「宅助ではないか」といった。

「ア！ 旦那様で」

と、これには驚いて立ち上がった。

「そこにいるのはお米ではないか。久しぶりだな」

「ハイ、永らく気ままに遊ばせていただきました」

「ウム、いよいよ帰るか」

「お蔭様で大阪にも、ゆつくり滞留いたしました」

「それですツかり気がすんだであろう」

と啓之助、ひどく機嫌がよい。

「いろいろと話もいたしたいが、なにしろ三位卿が御一緒だな」

「宅助から聞きましたが、そんな御都合だそうで……」

「いずれ帰国した上で、ゆるゆるいたすが、船の中では一切素知らぬふうを粧っているようにな。よいか」

「旦那。ご安心なせえまし、宅助が呑みこんでおります」

「ではあろうが、乗る間際にも、充分に気をつけてくれ、なにせい連れが、お公卿にしては血の巡りのよすぎるお人だ」

「で、その三位卿様は？」

「いま彼方あちらで、原士の者に何かいい含めておいでになる。その隙をみて、大急ぎでここへ探しに来た訳だ。ウ、なに、弦之丞のことか？ いずれこの船が安治川口を出るまでには、何とかして捕まるだろう。とにかく、船の上へ追い込んでからの方策だといっておられたから。お、船といえは、乗つてからも、決して言葉をかけてはならぬぞ。ではお米、くれぐれもそのつもりで、さびしかろうが徳島まで一日ひと晩の辛抱しんぼうじゃ……」

啓之助は落ちつきのない様子で、それだけいうと、スタスタと三位卿のいるほうへ大股に立ち去った。

その後ろ姿を見送つて、

「うふッ……」と、宅助、口を押さえて吹きだしたものである。「もったいねえくれいお人好ひとよしだなア」——と。

「お米」

と、そこでまた、色男へ立ち返つた気で、以前の所へドツカリ腰をすえなおした。

「小屋の中が暗かつたからいいようなものの、不意に、コレ宅助と来やがったんで、すっかり面食めんくらつてしまった」

「でも気がつかなくなつたから倅しあわせさ」

「付かれて堪たまつたもんじゃねえ」

「やっぱり悪いことはできないものかね」

「河豚ふぐの味と間男まおとこの味、その怖いのがよろしいので……」

と、いい気持で、後ろへ体をよっかけてゆくと、ズルズルと襟元むしろへ蓆すべがこり落ちてくる。

「エエ、塵ごみが入いった……」と背中へ手を突つこみながらふりかえってみると、蓆むしろをかぶせた四角い荷物。

「つづらだナ」

といったが、宅助、別に気にも止めなかった。

ちようど、凭もたれぐあいがいいのに任せて、そのつづらによっかかりながら、

「ええ、お米さん」

と、神ほんぶならぬ凡夫、

「こう寄よんねエな……」と女の肩へ手を廻まわした。

お米は顔をそむけて、

「あ、およし」

と、宅助の青ひげを避けるようにした。

「なぜエ」

「まだ動悸が鳴っていて息苦しいんだから……後生……手を離しておくれ、この手を」
頼むようにいえばいうほど、宅助の腕は女を苦しめた。お米は腹が立った。人が方便ほうべんに白い歯を見せていれば――。

それに、嘘ではなく、仮借かしゃくのない下司男げすおとこの力に、心臓がしめられるようだった。

「およしといったら……もう船の時刻も来ているのじゃないか」

「まだ大丈夫だツていうことよ」

「ま、くどい！」

後ろの荷物へ押しつけられて、ズズと背中をすべにすべらせたかと思うと――

どうしたのか？ 宅助。

「うツ！ ……」

と突然、妙な呻うめき声をふくみ、それと一緒に、激しい痙攣けいれんを起こして四肢を硬直させた。

「宅助ツ……宅助や……」

お米は、自分の首にからみついている彼の手が、肌へ爪を立つばかりに、ブルブルと慄ふるえてきたので、色を失った。

「ど、どうしたんだえ!! 宅助や……あれ……宅助ッてば!」

一本一本指をもちで、ソウと体を起こしてみた。

と——どうだろう! 眉をしかめた形ぎようそう相あひらを青蟬あおろうのような色に変らせて、グタツと、お米の肩へもたれてくる。

「あつ……」

と支える手の先に、何か? 温ぬるい液体がタラタラと伝わってきたので、よくよく目をこらしてみると、宅助の胸の脇、ちょうど肋骨あはらの下したの辺に、キラツと光る物が突き抜けていいる。

わずかに見えたのだが、まぎれもない、小柄こつかか短刀さきの切きつ尖さき。

「……………」

お米は、キヤツという悲鳴も立て得なかつた。

喪そうしん心しんしたようになって、ふわりと、宅助の体を離した。

そして、齒の根のわななきをこらえながら、懸命に、腰を立てようとした。

すると……。

ギイと蝶ちようつが 番ばんいの鳴る音がして、後ろのつづらの蓋ふたがひとりでに口を開いたかと思うと、その中から肩を起こした紫紺頭しこん中の人影。

「お米……」

「……」

「お米」

しずかな声で呼びとめる。

お米は一念に歩こうとしていたが、どうしても前へ体が運べなかった。

足に釘でも打たれたように、ワナワナとすくみ立ちにふるえているばかりで――。

いつのまにか左の袂たもとが、もう一つのつづらの口に噛まれている。

と、うしろから伸びた腕が、

「待て」

と襟元えりへ触さわつたので、かの女じよは今が最期のように、思わず声をしぼって、

「ひい——ツ」と地べたへうツ伏せになった。その途端。

もう一つのつづらがポンと開いて、咲きひらいた花のように、

「弦之丞様——」

と、お綱の顔がニツコリと笑う。

「しッ——」

と、手を振って耳をすます。

誰かの躑あしおと音でもして来たか、ふたりの影は、つづらの蓋と一緒に吸われたように消え込んだ……。

そこへ、風のようにはいってきたのは、あの編笠の侍だった。

うどん屋を捕まえて、ようよう子供の居所を聞いてきたと見え、一本槍に小屋の隅へ駆けこみ、藁わらにくるまって正体なく寝入っていた子供に何かささやくと、また、風のごとく出て行った。

その躑音に、

「ウウム……」と、宅助は動きだした。

そして、傷口をおさえながら、小屋の羽目板につかまって立ち上がると、その足にからんで、お米も必死な力で、よろよろと腰を切った……。

*

*

*

二百石船の舳みよしに立つて、水夫頭かこがしらが貝を吹いた。
五刻半だ。

にわかに、埋地うめちの闇や水明りの船岸ふなつきに、ワラワラと人影がうごき出す中を、一散に、
船待ふなまち小屋へ目がけてきたのは、竹屋三位卿。

「つづらはここか」

ついてきた原土かえりを顧みていうと、

「は、四国屋の若者が、たしかに最前、ここへ運び入れましたはず」

「ウム」と重くうなずいた。

そして一歩、中へ足を踏み込もうとした時に、ゴソゴソと、すれちがいに、外へ出てきた者があつた。

手拭てぬぐいに髪をくるんだ若い女と、渋合羽しぶがっぱにまんじゅう笠をかざした仲間ちゅうげん。

出会いがしらの目を避けて、さりげなく行き過ぎようとした男女ふたりの足は、

「待てッ！」

という一喝かつを浴びて、思わずすみ止まってしまった。

「不審なやつ、ふたりともしばらく待て！」

こうしつかりと呼び止めておいて、三位卿、あの炯々けいけいと射るような眼をジツと注そそいだ。まんじゆう笠のツバをおさえて、小腰をかがめた仲ちゆうげん問と、手拭をかぶった艶あでやかな女の影が、暗がりの中に肝きもを縮めている。女の口にくわえている手拭の端がワナワナとふるえているように見えた。

だが、この男女があわてて小屋から出てきたとたんに、誰よりも狼ろうばい狽ばいし、誰よりも穏やかでない色をなしたのは、三位卿の側についてきた啓之助で、向うにうづくまつた影を見るや、

「ちツ、どじな奴め」と人知れず腹立たしい舌打ちをしたことである。

アレほど噛んで含めるようにいつてあるのに、何をぐずついでこんな所に、有村の目に触れるのを待っていたのだ！ 迂うぐ愚ぐめ！ 鈍どんち智ち！

人前がなければ森啓之助、こういつて、頭から男女ふたりをどなりつけたに違いない。

この上はうまく三位卿をゴマ化して、難なくこの場がすんでくれるようにありたいものだ、と心のうちでひたすら祈っている、願くつがえいは覆あごされて、有村はうしろへ顎あごをすくった。

「あの男女を捕たえて糺ただしてみい。どうやらうさんくさい風態」

「あつ」と、原士の二、三名が、躍り立ちそうに見えたので啓之助はぎよツとして、開くべからざる口から、思わず、

「しばらく！」と叫んでしまった。

「なんで止めるか」

「は、実は」

「実は？ ……」と眉をひそめて「実はなんじゃ」と三位卿、きびしくたたみかけて行つた。

「手前が用事をいいつけて、先に大阪表へよこしておきました 仲間ちゆうげんにござります」

「ふム、お手前の 仲間ちゆうげんであるとか」

「宅助と申します者で……それに相違ござりませぬ」と、腋わきの下に冷汗をかいている。

「して、一方は」

「は……？」

「アノ女は。一方の艶なまめいた女は、アリヤ何者か！」

啓之助はみじめなほど口吃くちごもって、

「あれは、その、私の身寄りのもので」と、手の甲で額ひたいを拭く。人の悪い三位卿、その様

子で、ははあ、とうなずいていくせに、なお初めて聞いたように、

「あんな美しい身寄りが其そこ許もとにあつたとは初耳である」と苦笑をふくみ、皮肉な眼で啓之助の足もとから逆さに見上げた。

「どうも恐れ入りました」

「なにも恐れいることはない、身寄りとあらば格別の間がら。これから船へ乗るのであろう、親切に面倒をみておやんなさい」

「いや、仲ちゆうげん間かんがおりますから」

「遠慮するな！」

痛い言葉だ。

「宅助ツ」と啓之助はその腹立たしさを向うへ当たって、

「たわけ者め、何をまごついているのだ。早く船のほうへ行かんか、船のほうへ。お目ざわりなツ」

と叱りとばした。——すると三位卿はもう小屋の中へ入って、あっちこつちを見廻していたが、

「ヤ、いつのまにか、つづらは船へ運ばれているぞ」と叫んだ。

ここに三個のつづらがあつたことを、たしかに見届けていた原土たちは、驚いて有村と一緒に小屋の中をかき廻したけれど、荷縄の束やむしろ蓆が山に積んであるばかりで、つづらはいつのまにか運び出されてある。

と。ひとりの原土。

隅の方に抱きあつて、怖ろしそうに眼をさましていた二人の子供を見つけた。

「おい」と、その前に二、三人立つて——「お前たちはこの小屋に寝ていたのか」

「ウン……」と、姉らしいほうの少女がわずかにうなずいた。

「じゃ知っているだろう！ たしか向う側の隅にむしろ蓆をかぶせてあつたと思う、三ツのつづ

らが置いてあつた筈だが、それを誰がいつ運びだしたか、知っていたら教えてくれい」

弟であろう、十か九ツくらいな子、姉の胸に抱かさりながら、

「たツた今だよ」

と少しふるえながら答えた。

「今？ ふム……」

「たツた今——小父さんたちがここへ来てから」

「そうではあるまい、見なかつた」

「嘘じやアない、本当だよ。その後ろの戸を開けてそツと裏のほうへ持ちだして行つたんだ」

また先を越されたな！ と有村は唇を噛んだ。

しかし、自分の計画は船の上にあるのだから、お久良とはらを合す者が、巧みにつづら運び去つたとしても、それはむしろこつちの思う壺へ墜ちて行くのだ！ と笑止にも考えられる。

やがてあの親船が、安治川屋敷の裏へかかれば、水見番の詰所には天堂一角が見張つており、周馬や孫兵衛も手ぐすね引いて待ち構えている！ もうどんなことがあると、ここまで追い込んできた網の目から、かれらは遁れることはできない。

こう信じて三位卿は、ゆうゆうとそこを引き揚げた。そして親船のほうへ足を向けてくと、お久良が提灯をかざして呼んでいる。

ぼウ、ぼウ、ぼウ……と出船の貝がゆるやかに鳴りだした。折から潮も満々と岸をひたしてきて、夜はちやうど五刻半ごろ、大川の闇は櫓韻にうごいてくる……。

合図の貝ぶれと一緒に、二百石船の胴の間はいちどきに人をもつて雑鬧してきた。船

頭絞りの水襦袢をつけて帆役や荷方、水夫や楫主が、夜風をのぞんでめいめいの部署に小気味よくクルクルと活躍しだす一方には、手形を持つて便乗する商人だの、寺証をたよりに乗る四国詣り、城下へ帰る武士、諸州巡拝の山伏、人形箱を首にかけた阿波祭文、そのまた雑多なものがドカドカと混み入って、潮除けの藪をめぐらした胴の間へ埋まつた。

阿波には他領者の入国禁制がかなりきびしく行われているが、やはりそこを郷土としてゐる者、是非の用務がある者、信仰に国境なしと踏み歩く行者たちは、皆なんらかの縁故や手づるを求めて是非にもこうして渡るものとみえる。いや、平常の便船がないだけに、こういう場合は、いつそう人が混むのかも知れない。何しろかなり多くの頭数であった。その中には、森啓之助が人しれず氣に病んでいるところの艶な女と合羽をかぶった仲間も、混雑にまぎれて後ろ向きに座をしめていた。

で、雑人たちが落ちついた一番最後に、竹屋三位卿と啓之助とは、四国屋の提灯に圍繞されて、送りこまれてきた。それと見ると、松兵衛という老船頭、つづらについて阿波へ行く手代の新吉、ばらばらと駆けてきて、三位卿を鱸寄りの屋形へ案内した。

「松兵衛や、心得てはいるだろうけれど、ずいぶん氣を配って、途中御無礼のないように

頼みますよ」

お久良はこういつて竹屋卿の前へ進んできた。

「では三位卿様——」と腰をかがめて、「海上御無事にお渡りを祈っております」

「ウム、何かと世話をやかせたの」

「まことに行届かぬことばかりでした。それに御覧の通りなあきないぶね商船。お席もむさ苦しう

うございますが、どうぞお忍び下さいませ。また何かの御用は松兵衛に仰せつけ下さいま

すように。では森様もごきげんよう……新吉も頼みますよ」

お久良が陸おかへおけると同時に、船は天神岸を離れて粘ねんぼく墨のような黒い川波へゆるぎ出

した。二百石船といえは十四反帆たんぼ、苦数とますう八十四枚、水夫かこ十六人、飲み水十五石積だ。そ

れにかなりの便乗者と雑貨雑穀がミツシリ入っているので、船脚もズンと深く沈んでいる。

船は流れに乗りだした。雑音のひびきも徐々に遠く、大川の中ほどをきわめてゆるく押

しだされてゆく。太いともづながうねうねと波を切つて艫ともへ手繰り上げられているのが大

蛇ろちのように見えた。

「ああ……」

お久良が重荷を下ろしたように深い吐息といきをもらした。ともかくも、ここまで運んだとい

うホツとした気持がいッペンにこの間からの気疲れを覚えさせた。そして、心の中で合掌をくんだ。

「どうぞ無事に彼岸^{ひがん}まで、あのつづらが……」

いつの間にか、送りの灯は思い思いに帰っていた。お久良は吾を忘れたように船の影について岸を歩いていく自身に気がついた。

そしてその足もとへ、誰かぶつかつた者があるので、初めてオヤと我に返って見ると、姉弟^{ふたり}の稚^{おさな}いものが手をつないでシクシクと泣いている……。

「誰か、船へ乗つた人を、送りに来たのかえ？」

お久良がそう訊ねてみても姉弟^{ふたり}はかぶりを振っているだけだった。

「どこから来たの、お前方は」

「江戸から……」

「えっ、江戸からだって、まあ。そして何でこんな所に泣いているのだえ？ 連れの人にでもはぐれたのかえ？ エ、そうなの」

姉弟^{ふたり}は泣きながらうなずいた。

するとそこへ、闇を探しながら駆けてきた侍があつた。あの編笠の浪人である。

「オオ、ここにいたか！」と子供たちの側へ来て両手に抱きこむと、姉弟ふたりも嬉しそうにすがりついた。と、侍はまた、編笠の目堰めせきから水明りにお久良の姿をすかして、

「や！ もしやそちは」

ツカツカと歩み寄ってきて、不気味なほどジツと顔を見ていたが、

「もとわしの屋敷におった久良ではないか」といった。

「エツ、そうおっしゃいますと、あなた様は？」

「見忘れておるのももつとも、もう十年も以前に、そちや多くの召使いとまに暇をつかわした頃から浪人いたしておる元天満てんまよりき与力の常木つねきこうざん鴻山じゃ」

「まア……」とお久良はよろめくばかりあきれた。

自分が恐ろしい危険を予覚しながら、弦之丞とお綱に尽つくしたのも、その人が以前の恩主である常木鴻山と同じ目的をもっているのを知ったからである。ことにお久良は江戸に生おい立たちちつちていて、二十歳はたちごろまで常木家に小間使となっていた。そして鴻山が浪人した後、縁があつて阿波の四国屋へ嫁いでいたもので、そうした人の知らない好意が胸につつまれていたものだった。

だが、江戸に残っていた鴻山が、どうして不意にここへ来たのだろうか？ それにもい

ろいろな事情があるが、要は道者船取止の沙汰をはるかにきいて、弦之丞の多難を知り、松平左京之介と計つて、別な方策の打合せに急いで来たので、連れてくる姉弟の供は、すなわちお三輪と乙吉であつた。

弦之丞には、その後お千絵様の病状がよくなったことをついでに話してやりたいし、また、姉のお綱を慕つてやまぬお三輪と乙吉にも、もう一と目の名残を惜しませてやりたいと急いで来たが、ここへ来る前に、桃谷の万吉の家へ寄つて聞けば、着いた日の今夜、ふたりは四国屋の船で阿波へ立つというあの弦之丞の置手紙。

で、疲れている姉弟を励まし、ただちにこの埋地へ駆けつけて、宵の内からさまよつていたが、そのうちに張り込んでいる原土には怪しまれ、尋ねる二人がまさか荷つづらの底とは分らず空しく水と岸とに別れたのである。

油断のならない埋地、ここでは深い話もできぬからと、お久良は思いがけなく会つた旧主の常木鴻山とお三輪と乙吉の姉弟とを連れて、農人橋際の自分の寮へ帰つたのである。そこで夜もすがら尽きぬ話となつたのはいうまでもなからう。

万吉が不慮のことで落伍したのにガツカリして、さらに弦之丞とお綱の前途にまで、心

もとない不安を持つていた鴻山も、お久良が臨機な計らいを聞いて、いささか胸を撫でた様子。

なおその前途に、安からぬ暗礁あんしやうを感じないではないが、既に、運を天意にまかせたつづらと船とは、還らぬともづなをきつて天神岸から離れてしまった以上、今さらどう気をもんだところでおよばぬことであつた。

「そちが十年前の縁を思つて、こうまでしてくれようとは、思いがけぬ神護であつた。なおこの上は自分としても、ジツと弦之丞の安否を待つておいてるのは心苦しい。で、迷惑の上の迷惑ではあるうが、この姉弟ふたりをしばらく寮に預かつておいてくれぬか。そして、桃谷の家に療治をしている万吉のことも、よそながら何分心づけてくれるように頼みたい」
 こう言い残して、お久良の俠気を見込んだ鴻山が、ふたたび、藺編いあみの笠ひもの紐を結んで、四国屋の寮からいずこともなく飄然ひようぜんと立ち去つたのは……後の話。

さて。

大事はまだ当夜の四刻時よつじきごろに残つてゐる。

表面は夜風よなぎのとおり無事平穩に天神岸からともづなを解いた二百石船——淀の水勢に押されて川口までは櫓ろかい櫓ろかいなしだが、難波橋なにわをくぐり堂島川どうじまがわを下つて、いよいよ阿州屋敷の

めまつおまつ
女松男松、水見櫓の赤い灯、お船蔵の石垣などが右岸に見えだしてきたころも、果たして何の疾風も船中に巻き起こらなかつたであろうか？ ……これはお久良も鴻山も知るよし
がなかつた。

* * *

船が天保山の燈籠台を左に過ぎるまでは帆柱を立てないので、水夫は帆車や帆綱を縦横にさばき、川口を出るとたんにキリキリと張り揚げるばかりに支度をしていた。

その間に船津橋をくぐつてすぐに左の三角洲、えびす島の船番所で、川支配の役人から定例のとおりな船検めをされる。この間が約半刻。

この検分は御番城配下の手だから、新吉はまず安心していた。雪のせ笹の金紋は、梅溪家の貴重品が入っているつづらとして、別に何の面倒もなく役人を黙認させた。

実をいうと新吉は、この幕府方の川番所にもすくなくならぬ心配をもつたのであつた。なぜかといえ、役人たちはもとよりこの中に、大公儀の秘命を帯びた人物が隠れていようなどとは夢にも知らないから、もし蓋へ手でも掛けられた日には、味方からボロをだして、同船の阿波方の者に思いがけない発見をさせるからである。

しかし、それは杞憂に過ぎなかつた。

で新吉は、

「まずよかった」

と初めて満面にくる川風にホツとした気持を撫でられて、腰の煙草入れを抜いた。だが、まだまったく心が鎮しずみきつていないとみえて、火縄を借りる気力もなく、筒を抜いて煙管きせるを指に持っているだけであった。

川幅がひろくなつて行くにつれて、星明りとも水明りともつかず、何となくあたりが明るくなつてきたのが乗合の者の気持にまで影響して、そろそろ胸どの間のほうでは大勢の話し声が賑わいだした。それも絶えずソヨソヨと吹く風が消してゆくので耳うるさい程ではない。

その乗合の混んでいる藪しとみの蔭にうしろ向きになつている仲ちゆうげん間まづれの女が、この間察りようへ手形を貰いに来た森啓之助のかこい女ものだろうと、新吉は遠くから眺めていたが、自分の居場所は、ちよつとも離れられない気がして、別に話しかけにも行かなかつた。

かれは、ちよつと胸との間と艦との間にある、松兵衛の部屋の戸口に、三つのつづらを大事そうにすえて、その前に二、三枚の苫とを重ね、よしや船が沈もうともこの側は動くまい、というふううに腰を下ろしていた。

だが夜更けてくる頃には外海の飛沫しぶきもかかってくるから、乗合が木枕をつけて寝入った頃に、この場所も松兵衛がどこかへ移してくれる筈。そしたら、こつそり船底かどこかで、ふたの隙から、弦之丞とお綱に、阿波へ着いた時の手筈をささやいておこう……など胸のうちで目算をたてている。

松兵衛は今、水夫かこに櫓ろの持場をいいつけたり、帆方ほかたの者を指図したりして、舳みよしと帆柱の間を駆け廻っていた。だがその忙せわしい中にも、時々、新吉が背なかにかぶっているつづらのほうへ眼配めくばりを忘れていない。

「よい風なぎだの、風も頃合、海へ出たら定めし爽さわやかであろう」

「さようでござります。この分では揺れることもござりますまい」

「昨年、殿と同船して帰国した時は、殿いかめしいお関せきぐね船せきぐねで、船中も住居とかわらぬ綺羅きらづくしであったが、旅はむしろこうした商あきな船いぶねで、穀こく俵たわらや雑ぞう人にんたちと乗合のほうに興味深いものだ」

「仰せのとおり、手前なども」

「啓之助！」

「は」

「見えてまいったな、安治川屋敷のかすかな灯が」

そういう話し声に、新吉がハツと背筋をすくめながら、よりかかっているつづら越しに覗いてみると、森啓之助と、三位卿のニヤリと見あわせた顔がすぐ後ろに――

ふたりの死

「おも舵かじイツ」

白い波の条すじが大きな曲線を描く。

ドーンと一つ、今までと違った波濤はとうが胴の間にぶつかる。

海が近くなつたのだ。

左の小高い丘に天保山てんぼうざんの燈籠台、右舷うげんのすぐ前に安治川屋敷の水見番所みずみばんしよ。

「おおウイツ」

そこから漕ぎだす小舟があつた。

「止まれーッ。その舟待てーッ」

小舟の上には三ツの人影。

止まれ止まれと声を囁ささらしているのは旅川周馬、指さして立っているのがお十夜孫兵衛、櫓ろを撓しなわせて烏羽玉うばたまの闇を切っている者は天堂一角。時々サツとその影を白くかするのは波飛沫しづきだ。親船のほうでは水夫頭かこがしらの松兵衛、みよしに立って川口の水路みずみちを睨にらんでいたが、

「ちえツ、来やがった。面倒くせい」と聞えぬ振りをして、

「おも舵かじイツ」

左岸へ左岸へとかわしてゆく。

「親方ア！」

櫓方ろかたのひとりがふりかえった。

「追っかけて来ますぜ、阿州屋敷の役人が」

「かまわねエから撓しなわせろ！」

「合点！」

というと両舷六挺ちようずつの十二船頭。

「エーイ、オーツ。エーイ、オーツ」

音頭おんどを合せて流れに乗せると、松兵衛、帆方アとどなって手を振った。キキキキキと帆

車が鳴る、赤い魚油燈がぶらんとかかった。人魂ひとたまが綱たぐを手繰たぐって登ったように。

するとその時洞どうの間まのほうで、にわかには大勢がガヤガヤ騒ぎだした。ドタドタドタと松兵衛のそばへ真まツ蒼さおになつて飛んできたのは手代の新吉。

「松兵衛、大変だッ」

「ヤ、新吉さん、何だつて、つづらの側を離れて来たんだ」

「三位卿がお前を連れてこいというんだ、何か御立腹で、タダごととは見えない」

「かまうものか、ほうツておけ」

「だつて」

「船の上じや船頭が御城主だ。お前さんはあの側を離れちやいけねエ、川口を出たら船底へ下ろすから」といったとたんに、松兵衛の襟えりがみをつかんで、

「おいッ、なぜ来ないかッ」と利腕ききうでをねじ上げた者がある。見ると、森啓之助だ。

「あつ、何をしやがるんだ」

「何をしようと三位卿の前へ出れば分る、じたばたするとそのほうたちの不為ふためだぞ」

松兵衛が突きのめされて行つたのを見て、新吉は慄ふるえ上がった。

「連れてまいりました。水夫頭の松兵衛を！」

「ウム、そこへすえろ」

と三位卿大きくいって開きなおった。

ウム、と胆きもをつぶされて松兵衛、ヘタヘタとそこへ腰をついてしまった。なぜかといえ、潮除しわよけの苦くを払はらって、三ツのつづらの真ま中へ、竹屋三位卿、どったり腰を乗せて磐ばん石じやくのごとく構かまえている。

「松兵衛ーッ」

お公卿くげに似合にあわぬ大声だ。

「へい」

「なぜ船を止めないか、咎とがめがなければさしつかえないが、最前から安治川屋敷の水見張が、アアして呼び止めているのになぜ止めない」

「ヘエ、お呼び止めがございましたか」

「だまれーッ。この有村を盲目めくらと思うか」

「けれど番所のお検めあつたは、えびす島ですんでおりますので」

「ひかえろ。ありや御番城のきまつたことだ。そのほう達には公儀だけあって、領主蜂須賀侯の御支配は無視いたしてもかまわぬという所存であるか」

三位卿の追詰ついきついよいよ凜烈りんれつ、新吉も松兵衛も、もう舌の根がうごかない。

「ともあれ有村が盲目でないことだけは心得ておけい！　そこで一応問ただい糺すが、この三個の荷つづらの送り状は、いずれ水夫頭かこがしらのそのほうが預かっているであろう。中の品物は何か、読み聞かせろ」

「それはご免こうむりまする」

「なぜか」

「梅溪家うめたにからお預かりしました貴重なお品、それに、二十四組の廻船問屋には、送り状の内容うちわけは決して人様に洩らさぬという組掟くみおきてがございますんで」

「いうなツ、あくまで吾らの眼をくらまそうとて、その言い訳にうなずく有村ではない。強たつて組掟たてを楯たてにとるならこのほうは領主重喜公しげよしの御名おんなをもってこの荷つづらの錠じょうをぶち破るがどうじゃー！」

ブーンとその時一本の鈎繩かぎなわ、右舷の下から高くおどつた。と、その鈎かぎの爪がガツキとどこかへ食いついた途端に、天神岸から輕舸けいかを飛ばしてついできた原士はらしたち、繩なわを攀よじてポンポンと蝗いなごのようにおどり込んできた。

そこへザザツともう一艘。安治川屋敷から大川を横に切つてきた三人の舢舨はしけだ。

「オイ、槍を！」

と天堂一角が親船へどなると、

「ホイ！」といって上から槍――。

「お先へ」

と、お十夜孫兵衛、それにすがつてはね上がると、次にそれへならつて周馬も槍へつかまつたが、呼吸が足りない、ドタンと舳舟はしけへすべり落ちた。

「旅川、こうやるんだ」

と一角はあざやかに上がってしまう。周馬はいまいましたようにかぎなわ鉤繩のほうへ取ツついた。

船中は混乱した。

水夫かこや乗合の者は理由わけを知らぬだけに何事かと驚いて隅すみへなだれた。

そのまにもものしくおどり込んできた原土と天堂ら三人組は竹屋卿の前後をグルリと取巻いて、目指すつづらとともに、松兵衛、新吉の二人をもけんそう劍槍の中にくるんでしまった。

舵取も舵に手がつかない、櫓方も胆をひしがれて姿をひそめ、方向の眼を失った船そのものは、流れに押されて天保山の丘へ着いている。

「松兵衛、白状してしまえッ」

森啓之助は中央に立つて、かれの利腕をねじ上げた。新吉は原土に襟がみをつかまれてすくんでいる。

「お久良に何か言いふくめられて、この荷つづらの内へ抜乗り者を隠したであろう。吐かせッ、さ、新吉もだ！」

と船板へ額をコツいて責めた。

「知らねエ！」

松兵衛は頑として強くかぶりを振りながら、

「おいらは船頭だ、船頭は船をうごかすだけだ！ 頼まれたものを積むだけだ！ そんなことア知るもんか」と捨鉢の語気になった。

「情の強いおやじめ！」

三位卿はそのつづらに腰を構えたままハツタと睨めて、

「そちたちはこのつづらの金紋を何よりの不可侵境と心得て、梅溪家の威光を借り、

吾らに手出しがならぬと心得ているのであろうが、抜乗りの者がひそんでいることは、四国屋を出る時から読めているのじゃ。強つて言い張るなら言い張ってみよ、今その実証を目に見せてやろうから」

と、言いながら、戛！ 叩くように柄を握ったかと思うと、有村の手に、晃とした剣が抜き払われた。と——。

有村が腰をのせているそれと、もう一個のつづらの中で、パリツと爪をかくような音がして、錠金具がかすかにカチカチとゆすぶれた。

新吉は生色を失って、中に足掻きもがいている者と同じな苦悶を感じていた。

「ムム……」と心地よげな笑みを口辺にのぼせて、竹屋三位、抜き払った大刀の切ツ尖を真ツすぐに、つづらの蓋へ向けながら、

「とやこうは事面倒。松兵衛も新吉も、これでもなお泥を吐かぬというか！ 曇りのないこの刀で、中の品物を探ってみるがどうじゃ！」と叱咤した。

「あツ……」

ふたりは、啓之助に襟がみをつかまれながら顛倒した。そして、何か口走ったが、それは意味をなさないくらい平心を欠いたものだった。

三位卿は、腰かけている物の中から必死に突き上げてくる力を身に感じて、思わずムラとする殺念が剣にこもるのを禁じ得ない――、

「いわぬな！」

「……………」

「どうしても実を吐かぬなツ」

「ムム」と松兵衛、船板へしがみついて、

「し、知らねエツ……………」

「ちイツ、ようし！」

有村キツと唇を噛みしめた。

「天堂、天堂」

「はっ」

と、天堂一角、帆柱の裾からおどり出した。

ふたつのつづらへ眼を落して、有村、

「その一方を槍で探ってみい！ この中にたしかにいる！ 阿波へ抜乗りをせんとする生きものが」

「承りました」

というとき、天堂一角、かたわらに居る原士の手から槍を取って、黒檜くろがしの柄えを低目に持ち、ずつと斜身しゃしんになったかと思うと、ピウツと素すごきをくれてつづらの横へ穂先をつけた。

重い息づかいが流れるほか、船の中はヒツソリとしてしまった。誰の眼も空洞うつろのようにそこへ気を奪うばわれている。

遠い天星てんせいの青光りが、ガラツとつづらの側によれ合った。一方のつづらへは有村の剣！ ひとつのほうへは天堂一角が、今にも突き出さんと撓ため澄あます光鉞こうぼう。

「松兵衛！」

「……………」

「新吉！」

「……………」

「面おもてを上げてこの切ツ先をよつくみはつておれ！ これでもなお梅溪家うめたにから預あかったお品と申し張るかツ——ウウム！」といった声もろとも。

三位卿の剣は力まかせにつづらの蓋ふたをブスツと貫ぬいて切羽せつばの辺まで突き通って行った。同時に。

一方の檣は天堂の気合とともに走って、つづらの横を突き破り、深さひるまき蛭巻の半なかばまで入った。

と——見るまに、中の生命は断末のあえぎをあげて、なんと名状しようもない——耳を掩おおわずにはおられない、凄せい惨さんな震動を刻むようにさせて、船板とつづらの間を、噛むがごとく、ガタガタといわせた。

スツと、有村は刃やいばを引いた。

抜き取った白い鉄かねの肌には、まざまざと人間のギラが浮いている。

と同時に。

二つのつづらの下から、こんこんと噴き出した温ぬるい血汐！

船床ふなどしこのかしいでいるままに、数条の黒い血すじの条が、生ける長虫かのごとく一散にほとばしってきた。

たしかに感じられた手応え、存分な抉えぐりをよりながら、一角もまたおもむろに檣を戻した。そして、檣の尖端からポト——と糸を曳ひいた一滴の粘ねん液えきに、年来の鬱うつ念ねんを一時に晴らした心地。

あははははははは！ と。

かれは、声を揚げて、哄笑こうしょうしたい気がした。

ついに刺止めしとめた！

法月弦之丞をついに刺止めたぞ！

いくたびも心の底で叫んだ。

安治川屋敷から東海道に、或いは、江戸に木曾路に上方に、つけつ廻しつ、折あるごとに討たんと計つていつも失敗してきたことは、今となってみると、この最終の幕切れの歓喜を大きくさせるべく積んできた転変にほかならない。

と、チャリンという鏗鳴つばなりの音が、かれの瞬間な陶醉とうすいをさました。

後ろ向きになった有村は、血糊のりをしごいて、刀を鞘さやに納めた。そして、紅をなすつた懐紙を捨て、松兵衛や新吉へは、いずれ後日沙汰さたあるべきことをいい渡し、固睡かたずをのんでいた原士たちへはつづらの始末をいいつけている。

「はっ」

と、黒い影が右往左往に動きはじめる。だが、前よりは妙に静かだ。どんな場合にでも、人の死の前に立って生ける者は、何か考えずにはいられない。精悍せいかんなかれらも、暗黙の

うちにはそれぞれの感想を描いているのだろう、自然、憂鬱な運動となり、妙に静かに働いている。

そのうちに、かれらは細^{ほそびき}曳^{たぐ}を手繰り、二つのつづらをがんじがらめにくくりだした。なお、残る一つのつづらへも、念のために槍や刀を突っ込んでみたが、それは、何の手応えもなかった。

「この下へ寄せろ！ その艇舟^{はしけ}を」

つづらは、ズ、ズ、ズ、と左舷へ引きずられて行った。

あとの鮮血は目もあてられない。

太陽があつたら燃えあがるだろうが、星明りでは黒い液体でしかない。だが、なんとなく、生きている、うごいている、うなずいているように感じられる。

つづらは、がんじがらめのまま、さつき、原士たちが乗ってきた小舟の一つへつり下ろされた。それに続いて三位卿が降りてゆく。原士もぞろぞろ跳び降りる。

森啓之助、天堂一角、各 《めいめい》小舟へ移って行った。

親船には恐怖と大^{だい}寂^{じやく}が残った。松兵衛と新吉とは、最前から額^{ひたい}をすりつけてしまつたまま、雷^{らい}にうたれたようにうツ伏した形^{なり}となっていた。

その肘ひじや膝の下へまで、温ぬるい液体がこんこんと浸ひたしているのも感じないくらい、喪心そうしんしたかの態ていである。

三位卿の仮借かしゃくないあばき方には、もう絶対に抗弁する余地がなかった。なおさらのこ
と、みすみすつづらを運ばれて行つても、阻はばめる気力などはない。被征服者の屈伏がある
のみだ。

櫓ろも帆かじも舵かじも、茫然と、水夫かこの手から忘れられているまに、船は、怖ろしい暗礁あんしょうか
らつき出されて、目印山めじるしやまの水尾木みおつくしを沖へ離れ、果てなき黒い海潮かいちように舷ふなばたを叩かれて
いた。

夜の海鳥が、ちぬの浦の闇に、気味の悪い、羽ばたきを搏うつた。
さて。

四国屋の船から凱歌をあげた数艘すうそうの舳舟はしげは、暗い大川を斜めにさかのぼって、安治川
屋敷へと櫓韻ろいんをそろえた。

お船蔵の石垣へと、白い飛沫しぶきを寄せたかと思うと、そこから庭づたいに、屋敷のほうへ
引き揚げて行つた。

きのうからぶツ通しに緊張していたので、誰も相当に疲れていた。かたがた慰勞という

意味で、三位卿、酒樽さかだるの鏡を抜かして、一同の労を多とし、自身も敷物もせず縁先へ座をかまえた。

庭には、二カ所の篝かがりび火がドカドカ燃え、そこに真ッ赤なつづらが二ツ、暑い覆面を解いた原土、あぐらを組んでグルリと居流れ、杯はいを廻して、景氣のいい歓声を湧わかせた。

有村は愉快だった。

血の匂いを嗅かいだ後の酒は、一種の湿氣しつげばらい、自分も冷酒ひやざけの杯さかずきを取って、

「まだ多少は、息の音が通かよっているかも知れぬ。それ、中のふたりを引きずりだせ」と、命じた。

いい気持でもありいい機嫌だ。

大勢の中から、三、四人の原土が立った。

小柄こづかを抜いて麻繩をプツプツ断きり、錠前えいぐを抉えつたが容易にはがれないので、石を持ってきて滅茶滅茶にぶちこわした。

たちまちそこに隙ができた。

気転をきかせた一人、弓の折れを噛ませて、ミリッ、ミリッと、生木を裂くようにコジ上げた。

「よし」

といつて一方のつづらも、同じような手段でコジ開けると、縁の上から有村、

「これ、もう少し、その篝火を」

と、伸びあがって手を振った。

「はっ」

と、啓之助が縁を下りたのを見て、原土の中にまぎれていた一角もそこへ出て、篝火の鉄脚を五、六尺ほどつづらの側へズリ寄せる。

焰をゆたぶられた松薪の火、パチパチパチパチ火の粉を降らせた。

で、一角と森啓之助。

ふたつのつづらの側へわかれて立ち、検分の格でその蓋へ手をかけた。そして、

「有村様」

と名だけ呼んでかれを見上げた。

今こそこの赫々とした焰の下に、死に瀕した法月弦之丞の姿を見るのだ——といううなずき合いの眼、拈華微笑だ。三位卿もただちよつと顎を下へ動かしたばかり、

「では」というと、蝶番ちようつがいの金具がキイと……悲しむように鳴った。この一瞬になると、並
 いるもの誰彼の境なく、痛快とか悲壮とかいうものを超えて、一種の凄気せいきに齒の根が咬か
 しまる。

ぽんと、棺かんの蓋ふたが開かれたように、血腥ちなまぐさいつづらの中が覗のぞかれた。

一角が手にかけてほうには、血でこね廻したような男の体がかがまっていた。何のため
 らいなく、被おおわれている物をズルズルと引っ張りだしてみると、その夕べ、弦之丞おもとが面を
 くるんでいた紫紺色の頭巾きんの布……。

別なつづらには、蓋を払うと一緒に、青い富士形の蘭笠いんがさが見えた。

覗きこんだ森啓之助は、

「ウム、見返りお綱だな」

と、少し、無残な念に衝うたれて、中からムーツとしてくる血と白粉おしろいのまじった匂いに、
 思わずちよつと顔をそむけた。そして、両手を深く差しこんで、お綱の腰帯らしい所をつ
 かむ。

押し込められていたせいか、まだ温湯ぬるまゆのような体温がある。

足を踏ん張って、ずるずると抱え出した途端に、つづらの口は横に仆れて、ダランとし

た青白い手——笠の首——着物の裾が——啓之助の小脇に、糸の切れた人形みたいに吊るされた。

「あ、三位卿！」

「なんじゃ」

「お綱の方は、もう息が絶えておりまする」

そういつて啓之助は、片手を廻して死骸がかぶっている銀杏笠の紐を解こうとしたが、持ちこらえているのが辛いので、縁をつかんでペリツと引つ剥いだ。と——啓之助、才、啓之助、どうしたんだ、森啓之助、

「わーッ！」

と叫ぶと、いきなり女の死骸から手を離して、うしろのつづらへ、ドンと、弱腰をついてしまった。

「ヤ、ヤツ？」——と総立ちに、驚目をみはる。

見れば！ 篝火の下に投げだされた女の死顔、帯も着物も、見返りお綱のに違いないが、息は絶えながらドンヨリした死膜の目で、森啓之助を見ているのは、

（旦那さま……）

と呼びかけてきそうな、川長のお米。

その顔の青白さ。その唇の無念そうなこと。

啓之助は、喪心したようになって、唇をワナワナふるわせていた。

「ウウム」

と拳こぶしをにぎり、板縁に棒立ちになったまま、三位卿、お綱と思いのほかな、お米の死顔を睨にらみつめた。これだ！ 剣山の帰りに馬上から見かけた啓之助の匿かくし女おんなは！

そう思つて、意外な蹉さ跌てつに、無念な唇をかみしめた。そして、その薄のろ武士を、足あ蹴しげにしても飽き足らなく思つた。

「天堂ツ、天堂ツ」

かれの声は、にわかに痲かん癬ぺきをフンぎかせてきた。

足の拇おやゆび指ゆびをジリジリさせて、縁の板を踏み鳴らしながら、

「それはどうだ？ そのつづらのほうは弦之丞に相違ないか」

と急せきこんだ。

一角は、中の死骸が、金具の裏に噛みついていたため、容易に抱き出されないうで弱っていたが、もしや？ と彼の心もわくわくして、

「エエ、面倒」

とばかり、つづらを横に蹴倒した。

そして、ムリに引きずりだしてみると、これはただ、弦之丞とおぼしい衣類を、頭の上からかぶせられたくりからもんもん俱利伽羅紋々の死骸——すなわちちゅうげん仲間の宅助だった。

きょうらん
狂瀾

つづら心中の形となつたお米の死、宅助の死。

なんと無残な輪廻りんねだろう。不合理な心中だろう。運命の神の皮肉さよ。

だが、まこと真の弦之丞とお綱は、いつのまにこの二人と入れ代つていたのだろうか？ なに

せよ阿波方の面々、不覚のかぎりであった。

「ちえツ、うまうまとたばか騙たばかられた」

みにく醜みにくしとは思ひながら、三位卿、齒ぎしりを嚙まずにはいられない。

「今にして思い当たるのは、船待小屋ですれちがった時の、怪しげな男女ふたりであった！ それを啓之助めが、おのれの非にきようきよう恟々としておつたがため、いらざる口出しをして、有

村の明察をあやませた」

じだんだ踏んで口惜しがった。

原士たちは嘩然として、棒を飲んだようになっていた。一角も呆ツ気にとられて、いふべき言葉を忘れていた。

弦之丞の瞬速に、これだけの者が翻弄されたのか！ そう思う苦々しさが、みんなの醒めた顔にみなぎっていた。

「いたずらに茫としてはおられない！」

有村は形相をかえて庭へ下りた。

「一角ツ、大急ぎでお船蔵から船を出せ。まだ先の船も、さして沖を遠くへは離れていない」

「あつ、追手を？」

「無論。早くだ！」

「あるか、脚の早い船が？」

一角、原士の中へどなった。

「お手入れ中の納戸船、あれなら軽い、たいして人数は乗れませぬが」

「それでいい、それでいいッ」

叱りとばすように有村が急がせると、バラバラ向うへ駆けだした。櫓だ、櫂だ、帆の支度だ！ そんな声が八方の闇へ別れる。

三位卿もすぐに船蔵のほうへ急ぎかけた。すると、その前へ駆け廻って、啓之助が、

「有村様ツ……」と、足元へへばり伏した。

「なんだツ 蛆虫」

「め、めんぼく次第もございませぬ」

「それがどうしたというのかッ」

かれの額には青筋が太かった。

「不始末のほど、慚愧にたえませぬ。本来、御一同の前で、切腹すべきでございませぬが……」

……

「そうだ！ 当り前だ！」

「殿の御意もうけず、身勝手に死ぬこともなりませぬ」

「よかろう！」

「ではございませぬが」

「かまわん、わしが、殿のお耳へ入れておく。殿もよい家来を失ったとは惜しむまい」

「は……しかし、武士の意気地」

「人が笑うぞ！ 貴様がそんな言葉をつかうと」

「はい」

とガツカリした啓之助、土下座の腰をのぼして、いきなり三位卿へ両掌りょうてを合せた。

「有村様ツ、こ、このとおりでございます」

「何をするんだ、ばかなツ、わしは笏しやくを持っている木像じゃない」

「終生のお願い——どうぞこの不始末を、殿様へおとりなしのほどを。啓之助、過去を悔悟して、御奉公をします。そして、武士の意地にも、追手の船へのりまして、弦之丞めを」

「世迷言よまじごころを申すな」

「でなければ」

「うるさいツ、お前はお前のすることをしておれ。そのな、啓之助」

と、かたわらのものを指さした。

宅助の死骸とお米の亡骸なきがらが重なっている。

「——その醜いものを見る、それを。おのれのものがおのれに帰ってきたのではないか。所有主はお前だ、あれを抱いて、早くお屋敷を出て行け！ けがらわしいやつ」と、肩を蹴った。

うしろへ引つくりかえった啓之助は、手からみついた黒髪にゾツとした。

何を見ているのか、お米の眼は閉じないである。急にどがってみえる骨の間に、どんよりと、なんらかの執しゅうじやく着の相をたたえて。

これが、あれほど自分を燃え立たせた、情慾の対人あいてか。

かれは両手で顔をおおった。

逃げ場のない気持を、死者の冷たい手が追ひ廻してくるようで、啓之助は立ちもならず、いたたまれもしない。

「有村様ツ、有村様ツ」

と叫んだが、その三位卿は、もうお船蔵へ向つて駆けていた。かれは、気狂いじみた迅はやさで、お米の死に顔を照らしている二ツの篝火をいきなり泉水の中へ打ちこんだ。

あたりを闇にしたら、深い土の底へ現実を埋めた気がして幾らか心が安らぐかと思つたが、無駄だった。

駆ければ駆けるほうへ、

(旦那様……)

と、お米の顔が。

*

*

*

沖の汐鳴りが変つてきた。

風が出てきた。

暗い五更を、黒い潮の海を。

破れんばかりに帆を鳴らして、まっしぐらに走る追手の船！ 指してゆく沖の一線に、

これまた、満々と帆を張りきつて南へ南へと急ぐ船影がかすかに黒く――。

雲！ 雲！ 形 相の悪い雲のうごき。

まさに、狂 瀾 天をうとうとしている。

血は潮水で洗われたが、四国屋の船の上には、まだ宵の陰惨の空気が漂っていた。黙々とした水夫、おびえた夢に苦をかぶっている旅客、人魂のような魚油燈、それらに乗せて、船脚は怖ろしいほど迅くなっている。

ときたま、山のような波がかぶった。

その大波の度がふえるにつれて、潮鳴、潮風、帆のはためき、どうやら暴風の兆がみえる。と気がついた頃には、船の揺れ方も尋常ではない。

だが、島とは見えない、淡路の巨影にかばわれて、紀淡海峡を出るまでは、水夫も多寡をくくっていたし、それに、宵のことで、スツカリ気がめいつていたので、騒がず、声を立てず、相変らず黙々と、船は帆まかせに走っている。駈々として白浪を蹴っている。

真夜半を過ぎた。

阿波へ阿波へ。

満をはらんだ十四反帆は巨大な怪鳥のごとく唸りを搏って進む――。

と。やがて大寂の丑満すぎ。

船の一隅、潮除けの葎の蔭に、苦をかぶっていたふたりの客が、ムクムクと身を起こしてあたりの旅客の様子を眺めた。

うごいているのは船暈に悩んでいる者だけであった。

「……………」

何か目と目でうなずきあうと、苦をはねたそのふたり、手と膝とで、松兵衛の部屋のほ

うへ這いだした。船は坂のように見える。

互に、左右へ気を配つて――。

低い達磨部屋だるまの戸の隙から、煤すすんだ灯の色が洩れている所へ寄ると、

「松兵衛、松兵衛」

ひとりが軽く戸を打った。

「新吉さん」と、またひとりが低く呼ぶ。

見ると、その男女ふたりは、天神岸から乗ったあのまんじゅう笠の仲間ちゆうげんと手拭てぬぐいの女だ。

達磨部屋だるまの底には、水夫頭かこがしらの松兵衛と新吉、魚油いしごくさい灯壺ひつぽを中に挟んで、互に、も

のもいわず、ためいきばかりつきあつて、暗鬱あんうつな腕ぐみをしていたところ。

ゴト、ゴト、と戸が鳴ったので、ひよいと眼を上げたが、風だろう、そう思つてまた首

を垂れてしまった。

上には訪れた男女ふたり、低い声は潮風に消されてしまうし、大きな声はあたりをはばかるし

……としばらく迷っている様子。時々、虚空こくうへさらわれてゆく苦とまの影にもハツとする。

「一言ひとこと知らせておきたいが」

「そうですね……さだめし気を腐らしておりますよ」

「事情を知つたらびつくりするぞ」

「幽霊かと思うかもしれないね」

「なにしろ、無駄な心配をさせておくのは気の毒、それに……」

「シツ」と手を振られて口をつぐむ。

「誰か起きています者があります。向うに人影が」

「では、後にしようか」

「……………」うなずいて、身を隠そうとした時、髪をくるんでいた手拭が、サツと風に飛んで、女の白い顔が凄艶せいえんにむきだされた。

「あら……………」

と吹かるる髪をおさえたのは、まぎれもないお綱であった。

とすれば、仲間ちゆうげんにやつした一方の者は、無論法月弦之丞でなければならぬ。

ふたりは健在である。

天神の船待小屋までは、あのつづらに身をひそめていたが、じつと中から埋地うめちの空気を察していると、どうやらその安全でないのを感じた。すると、その荷つづらによりかかつて、痴話狂ちわぐるっている男女があつた。お米をもてあそぶ宅助であつた。宅助あやつを操っている

お米であった。弦之丞は前からの約束もあるので、お米に、つづらの中へ入れ代つて貰おうと思つた。まさか、アア無残な結果にならうとは予測せず——、そして都合の悪い宅助をまず、不意につづらの中から刺したのである。

そして、つづらを開けて呼び止めると、誰か人が入つてきたので、また、中へ潜ひそんでしまった。それが常木鴻こうざん山であると知つたら、その必要もなかったが、咄とつ嗟さに蓋ふたをかぶつてしまつたので、かれも先も気がつかずに、鴻山はまた走りだして行つた。

その後で、弦之丞はお米を承知させて、お綱と姿をとり代えさせた。宅助は否いや応おうなく、合羽を剥はがれて押し込まれた。すべては、まったく一瞬の間に行なわれたのである。弦之丞が代かえ玉だまを入れて錠じようをかつている手も間に合あわなくらいに、そこへ、竹屋三位が来たのだから——。

で当然に、松兵衛も新吉も、つづらの中がすり変つたとは知らないはず、達磨だるま部屋の底に嘆息ためいきをついて、お家様への言い訳や、後で領主からどんな嚴罰をくわされるかと、頭をなやめているわけだつた。

「おお、ひどい風」

お綱は白鳥のように飛んだ手拭の行方を見送つて、帆柱の腰へ背なかを支えた。弦之丞

もその白いものへ眸をあげた。なぜか、その一瞬に、かれは悲恋非業の終りを遂げたお米の魂のさまよいを見る心地がした。

すると。

今お綱が艫とこのほうにボンヤリと見た二ツの人影が、いつのまにか、足音をぬすませて、弦之丞のうしろに立っていた。

「おい、どうだ」

「ウウム……」

袖を引きあつて、お綱の顔を睨んでいる。

「シツ……」と左右へすべとすると二人とも、あり合う苦とまを頭からかぶつて、船床の上へ寝てしまった。

かかるまにも、竹屋三位卿そのほかの乗っている追手の船は、滔とうてん天の飛沫しづきをついてこの船を追っている。

不意にボウと月光がさした。

鯖さばの背みたいな青黒い海の色が、一瞬、ものすごく目に映ったかと思うと、バラバラッ

と、痛いような大粒の雨！

嵐の先駆——。

気味のわるい微風そよかぜが撫でた。

ほんの一瞬とき、欺すだまようにさした月光は、空の怒ろうとする前に見せる微笑であつた。

「あ……アア……」

と、お綱は帆ぼしらの根を離れ得ずに、冷たくなつた額ひたいをおさえた。

「どうした？」

と、抱きこむように支えて、

「暈よつたのか」と弦之丞が優しく訊く。

「エ、すこウし……」

「しっかりといたせ、夜明けになればな風なぎるであらう」

「はい……お案じ下さいますな」

「よいか」

「大丈夫でございます」

「前の所へ戻つて、少し落ちつくがよい」

「そういたします」

「わしの帯につかまって……よいか……足をすくわれるな、足を」

お綱は弦之丞に力とすがった。

弦之丞はお綱を抱いた。

そうして、片手に、笠のつばをおさえて、しとみ蔭へ走ろうとすると、その時だ！

ひとすじ一条の帆綱が、ピュツと——輪を解いて弦之丞の足もとへ飛んだ。

「あつ！」

船の動揺に気をとられていたので、かわすまもなく一方の足は、クルクルと巻きつかれて何者かに手繰たぐられた。

お綱の体は、かれの手を離れてうしろへよろける。弦之丞は倒れながら、脇差を払って、足首にからんだ綱を抜き打ちに切ってはねた。

「ちえツ」

と、向うの闇で声がする。

弦之丞とお綱は、船床へかがみついたまま、そこへ眼を向けたが、誰の影とも判らない。向うの者も、腹這いになっている様子だ。

「ううむ、まだ船の中に、阿波の武士が残っておった。お綱……わしの側を離れるな」
 かれは白い光を背なかへ廻しながら、膝で歩くように、繩なわの飛んできたほうへいざりだした。

と——先の影も這うように動きだした。そして、グルリと向う側の舷ふなべりへ廻ってゆく。
 人数はいないな、ことによると船頭の中で、拾い首の功名をしようとする奴かもしれないぬ。
 ——弦之丞はそう思った。そして、機を計って跳とびかかってゆくと、案の定、抜きあわせでもこず、バタバタと艦ともしのほうへ逃げだした。

「ひと浴びせッ」

と気をはやつたが、ほかの者の目をさましてはと、静かに、気永に、船具や積荷の間を
 追ひ廻していると、先の影も、船蔵の鼠のように敏速だ。

すると、後ろの胴どうの間まで、突然な叫び声がかすれた。弦之丞はあッといって、一足跳び
 に引ッ返した。

見ると、お綱が何者にか組み敷かれている。

「おのれッ」

というが早いか、弦之丞の太刀——その影を横に払った。

が——先も足首に氣構えをとつていたとみえて、いきなり、お綱の胸に片膝をのせたまま、ぱちツと、太刀の切羽せつば。抜き合せに受けた。

燐りんのような火の匂いと光がシウツと削り落された。

「ウウ、おのれは——ツ」

と弦之丞、からんだ鏝つばをそのまませめて、

「お十夜だなツ！」と、絶叫した。

「驚いたか、三位卿の目はかすめても、この孫兵衛があんな甘手あまてを食うものか」

——その時である、艦とせのほうを逃げ廻っていた旅川周馬、隙を狙って帆柱ななかの半ばなかごろまで、スルスルと猿ましろのぼりに上つて行った。

有村や一角が、つづらの内から血汐のあふれだしたのを、てつきりと信じて、引き揚げて行った際に、孫兵衛と周馬のふたりは、一同の移った小舟へ乗らなかつた。というのが——あの騒動のうちに、艦とせへなだれて行った乗合客の中に、ハテナと、小首をかしげた女を見たので。

手拭に顔を隠していても、お十夜にとれば、お綱はあれまでにほれていた女、決して、あかの他人を見るごとくではない。

すべての者は、皆つづらの中に気を奪われて、他に何もものもないくらいだったが、孫兵衛は、周馬にも耳打ちして、絶えず、それへ眼をつけていた。で、ついに仲間の舟へは乗りおくれた訳であるが、やがて有村も一角も、あわてて追いをかけてくるに違いないと察していた。

案のごとく、洲本の沖あたりから、それらしい船が後ろから白浪を蹴立ててくる。それらに來られてからでは気が利かない、その前に料理しておこうではないか——と、周馬があぶながるものを、孫兵衛、いきなり弦之丞の足元へ綱を投げた。そして、かれは巧妙に帆柱の蔭へ立ったので、周馬は運悪く弦之丞の切ツ尖さいばに追い廻されてしまった。

で——とうとう、帆柱の上までスルスルよじ登った旅川周馬。

「お、そこまで来たな」

と、近づく船影にホツとした。そしていきなり、脇差を抜き、片手にふるって、蜘蛛手に張り廻した帆綱帆車ほつなほぐるま、風をはらみきった十四反帆！ ばらばらズタズタ斬り払った。

周馬が、虚空から切って落した帆布ほぬのは、その下にいた弦之丞とお十夜の上へ、バラ——ツと、すごい唸りをあげて落ちてきた。

柱を離れた十四反帆、船をそっくり包んでしまうほど大きい、巨大な獣けものの背なかのようにムクムク波を打っている。

ザアーツと、一散な雨が横に吹ツかけてきた。

雨の白さが、いつそう闇を濃くさせた。波は高くおどり、風は狂わしく吠ほえたける。

船は、無論、暗澹あんたんたる中をグルグル廻っているのである。水夫かこ、楫主かんどり、船幽霊のよ
うな声をあげて、ワーツと八方の闇にうろたえている。

「あつ、ひどい音が？」

「暴雨しけだツ」

と達磨だるま部屋の底で、はね起きたのは、松兵衛と新吉。

戸を引ツぱずして外へ首を出してみたが、そこは、いッぱいに、落ちた帆布ほぬのがかぶさつ
ている。

で何も見えない。ただ、ザンザとうつ大雨の音と、風の咆哮ほうこうと、船夫ふなこたちの気狂いの
ような声。

暴雨しけばかりではない！何か、騒動が起こった様子と——松兵衛、わけは知らないの
それへ潜りもぐ込んでゆくと、ギラリと、太刀魚のような光りもの！

「あッ」

と、突つ伏した途端に、うしろの新吉は、達磨部屋へころげ落ちていた。——と、帆布の一端を切り破つて、おどりだしたのは弦之丞である。うごくところを狙つて、突き刺そうとすると、松兵衛の悲鳴にハツとおどろいて手を引いた。

その隙に、お十夜も、大魚の腹を切り破つて出るように、雨の中へころがりだす。

雨は帆布を叩いて、滝のように白くあふれていた。さらに、空へ、奈落へ、ゆれかえる合の動揺！

目もあけられぬ雨！ 疾風！

「うぬッ」

「おのれッ」

と互に、剣をかまえて、斬ろうとし、刺そうとはするが、自然の力に妨げられて、技も気念もほどこすによしが無い。

帆は切り裂かれても、船は運よく、由良の岬にも乗りあげずに、鯉突の鼻をかわして、狂浪に翻弄されながら外海へつきだされていた。

帆柱にしがみついて、しばらく様子を眺めていた周馬も、いよいよつもの疾風に、とも

すると体ぐるみ吹ツ飛ばされそうになるので、

「あつ、堪^{たま}らねえ」

と、辻^{すべ}り落ちてきた。

そこに、お綱^{ふなよ}が、船^{ふなよ}暈^{ふなよ}いの顔を青ざめさせて、うツ伏^ふしていた。だが、ドンと降りてきたかれの足音に、ハツと顔をあげて、帯の小脇^{こわき}差^さに手をかけた。

世阿弥^{よあみ}のかたみ——新藤^{しんとう}五国^{くに}光^{みつ}の刀^{やいば}へ。

と、周馬^{しゅうま}は、

「ウム！」と叫^こんで、足をあげた。

だが——お綱^{お綱}の肩^{かた}を蹴^けとばしたとたん^{たん}に、かれの体^{てい}も、意気^{いき}地^ぢなくもんどり打^うって、四^よ五間^{けん}向^むうへ突^つんのめつて^ついる。

イヤ、周馬^{しゅうま}のみならず、その時^{とき}二百石^{にひゃくしやく}積^つみの船^{ふね}がもろに傾^{かたむ}いて、海水^{かいすい}をすくうかと思^{おも}われたほど、激^{げき}しい震^ゆ動^{どう}を食^くったのであつた。

突然^{とつぜん}。

船^{ふね}体^{てい}の木組^{きぐみ}が、皆^{みな}バラバラになつたよ^ような音^ねがした。

と思^{おも}うと——舳^{みよし}をつツか^かけてきた一艘^{そう}の納戸^{なんど}船^{ふね}、そこ^{そこ}から、ワーツとい^いう喊^{かん}声^{せい}が揚^あげ

がった。

手鉤てかぎ、投げ爪、バラバラこつちの船へ引っかけ、ずぶ濡れぬになった原士の輩ともがら、手槍を
持った一角、竹屋三位卿など、面もおもてふらず混み入ってくる。

そして、荷蔵とまや苦のかけに、かがまッている客や船夫ふなごを捕えて、いちいち改めているらしいので、旅川周馬、大手をひろげて、お綱の姿を見張りながら、

「ここだ——ッ、ここだッ」

と、大声で知らせた。

すると。

その声も終らぬところへ、法月弦之丞の姿が、目の前へ飛んできた。あつと、思わず逃げ腰になる隙に、弦之丞はいきなりお綱の体を横に引ッ抱えて、斬りつけてくるお十夜を、片手の太刀で防ぎながら舳みよしのほうへ走りだした。

「おッ、いたぞ」

「弦之丞だ！」

「それッ」

と、槍を取った原士の影が、先をふさいで叫んだが、なお、血とも雨ともわかたぬ飛沫しぶき

をついて、夜叉にも似た乱髪らんぱつのかげが、舳みよしの鼻に突つ立った。

そこへ、なだれて来た三位卿と一角とが、

「あッ——」

と、声を筒拔つつぬかせた途端。

うしろへ迫つたお十夜へ白刃の素振りすぶをくれながら、法月弦之丞、お綱の体を抱えたまま、逆さかまく狂瀾をのぞんで身を躍らせた……。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2008（平成20）年12月24日第22刷発行

「鳴門秘帖（三）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年10月11日第1刷発行

2009（平成21）年2月22日第21刷発行

※副題は底本では、「船路《ふなじ》の巻」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

船路の巻

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>